

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十九冊

中間東井坪遺跡
正箱遺跡
八幡遺跡

2004. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第四十九冊

中間東井坪遺跡
正箱遺跡
八幡遺跡

2004. 3

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団

正誤表

香川県教育委員会事務局文化行政課	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター
平成15年度	平成15年度
課長 北原 和利	所長 中村 仁
課長補佐 渡邊 勇人	次長 渡部 明夫
主任 酒井 幸子	総務 野保 昌宏
主任 片桐 孝治	係長 多田 敏弘
主任 小林 正直	主査 塩崎かおり
埋蔵文化財	主任主事 田中 千秋
副主幹 大山 真光	調査 眞鍮昌宏
文化財専門員 佐藤 竜馬	文化財専門員 森 格也
文化財専門員 松本 和彦	主任技師 信里 芳紀
整理作業に携わった方々	山下登志子、市川孝子、森川理恵、溝淵さや香、 辻悦子、香川洋子

表3

序 文

四国横断自動車道高松市内区間の平成 15 年 3 月の開通により、香川県全域が高速道路によって結ばれるとともに、本格的な高速交通の時代を迎えております。

財団法人香川県埋蔵文化財調査センターでは、昭和 63 年度から四国横断自動車道建設やインテリジェントパーク整備事業、サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査と整理報告を香川県教育委員会から委託をうけて実施してまいりました。

このたび「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四十九冊」として刊行いたしますのは、高松市中間町・檀紙町に所在します中間東井坪遺跡・正箱遺跡・八幡遺跡についてであります。中間東井坪遺跡ではナイフ形石器を主体とする旧石器群、正箱遺跡からは奈良時代の集落跡、八幡遺跡からは中世の平地式城館に関係した遺構・遺物を検出しました。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりますが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、香川県教育委員会及び日本道路公団並びに関係各機関・地元関係各位には多大な御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後とも当センター事業への御支援を賜りますようお願い申し上げます。

財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター
所 長 中 村 仁

例 言

1. 本報告書は、四国横断自動車道高松～善通寺間建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告で、高松市中間町および檀紙町に所在する中間東井壇遺跡・正箱遺跡・八幡遺跡の報告を取録した。
2. 発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団より委託を受け、香川県教育委員会が調査主体、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査の年度及び担当は以下の通りである。
平成8年度 大久保徹也・信里芳紀・谷畑雅稔・住野正和・高橋佳織
平成9年度 松本和彦・佐々木正之・滝井理佳
平成10年度 森下英治・蓮元和博・門脇範子
平成11年度 蔵本晋司・信里芳紀・野崎隆・豊岡多恵
平成12年度 西村尋文・蔵本晋司・増井泰弘・豊岡多恵
4. 調査にあたって、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。
香川県土木部横断自動車道対策総室、地元自治会
(順不同、敬称略)
5. 本報告書の作成は、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
本報告書の執筆・編集は、信里芳紀が担当した。
6. 本報告書で用いる座標・方位は、日本側地系平面直角座標系第Ⅳ系であり、標高は東京湾平均海水位(T.P.)を基準としている。
また、遺構は基本的に下記の略号により表示している。
SB 掘立柱建物跡 SD 溝状遺構 SK 土坑 SP 柱穴
SF 窯跡 SX 不明遺構 SR 川跡
7. 石器実測図中、薄く黒く表現している部分は摩滅痕を、輪郭線の回りの実線は潰れを、同じく破線は顕著な研磨あるいは摩滅を、同じく点線はあまり顕著でない研磨あるいは摩滅をそれぞれ表す。
なお、現代の折損は濃く黒で潰している。石器石材は特に表記が無い限り、サヌカイトである。
8. 挿図の一部に建設省国土地理院地形図「高松」「高松南部」「香西」「白峰山」(1/25,000)、1/5000国土基本図、昭和37年撮影白黒空中写真を用いた。
9. 本遺跡の報告にあたっては、下記の機関等に分析を依頼・委託した。
放射性炭素年代測定・花粉分析……………バリノ・サーヴェイ株式会社
土壌中火山灰抽出分析……………株式会社京都フイッション・トラック
10. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値(単位m)である。
11. 土器観察表の中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖1992年度版』に準拠する。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。

目次

第1章	調査に至る経緯と経過	
第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の経過	2
第2章	遺跡の地理的・歴史的環境	
第1節	地理的環境	5
第2節	歴史的環境	8
第3章	調査の成果	
第1節	中間東井坪遺跡	
1.	予備調査	11
2.	Aトレンチの調査	
層序		13
上層遺構		17
3.	下層遺構	17
第2節	正箱遺跡	
1.	調査方法	35
2.	堆積状況	35
3.	上層遺構	38
4.	下層遺構	49
第3節	八幡遺跡	
1.	基本層及び地形	56
2.	I区の概要	67
3.	II区の調査	83
4.	III区の調査	102
第4節	自然科学分析	
1.	中間東井坪遺跡・正箱遺跡土壌中火山灰抽出分析	114
2.	中間東井坪遺跡の放射性炭素年代測定	139
3.	八幡遺跡の花粉分析	141
第4章	まとめ	
1.	中間東井坪遺跡出土の石器について	147
2.	正箱遺跡の古代掘立柱建物の変遷	147
3.	八幡遺跡の掘状遺構の性格について	149

挿図目次

図1	遺跡の位置	1
図2	横断道 高松～普通寺間の 埋蔵文化財包蔵地・2	
図3	1 m等高線図	6
図4	中間東井坪遺跡・周辺の10 cm等高線	7
図5	周辺の遺跡分布 中間東井坪遺跡	9
図6	予備調査トレンチ配置	12
図7	予備調査トレンチ平面及び土層柱状図	13
図8	予備調査出土遺物	14
図9	Aトレンチ遺構平面	15
図10	北壁・東壁断面	16
図11	耕作土・柱穴出土遺物	17
図12	SR01土層断面及び出土遺物	18
図13	下層石器分布	19
図14	下層調査範囲	20
図15	下層包含層断面	21
図16	下層包含層石器分布(垂直)	22
図17	旧石器出土分布	23
図18	下層包含層石器集中範囲	25・26
図19	ナイフ型石器及び翼状剥片	27
図20	翼状剥片石核 その1	28
図21	翼状剥片石核 その2	29
図22	剥片類 その1	30
図23	剥片類 その2	31
図24	SR01に混入した石器	32
図25	SK01、02平・断面、出土遺物 及びa層出土の縄文期遺物	33
正箱遺跡		
図26	調査区割	34
図27	遺構配置 その1	35
図28	遺構配置 その2	36
図29	土層断面	37
図30	SB01平・断面及び出土遺物	39
図31	SB02、03平・断面及び出土遺物	40
図32	SB04、05平・断面及び出土遺物	41
図33	SB06平・断面	42
図34	BトレンチSD01、03平・断面 及び出土遺物	43
図35	CトレンチSD04平・断面及び出土遺物	44
図36	CトレンチSD04出土遺物	45

図37	CトレンチSD05平・断面及び出土遺物	46
図38	BトレンチSK01、DトレンチSK02、 03、SP173平・断面及び出土遺物	47
図39	柱穴出土遺物	48
図40	BトレンチSX01平・断面及び出土遺物 その1	50
図41	BトレンチSX01出土遺物 その2	51
図42	BトレンチSD09平・断面及び出土遺物	52
図43	下層遺物分布	53
図44	下層出土遺物	53
図45	遺構外出土遺物 その1	54
図46	遺構外出土遺物 その2	55
八幡遺跡		
図47	遺構配置	57・58
図48	調査区割	59
図49	土層断面 その1	60
図50	土層断面 その2	61
図51	土層断面 その3	63
図52	土層断面 その4	64
図53	I区遺構配置	65
図54	I b-1～4トレンチ平面	66
図55	I区SD02、II区SD76平・断面 及び出土遺物	67
図56	I区SX01平面	68
図57	I区SX01断面	70
図58	I区SX01出土遺物 その1	71
図59	I区SX01出土遺物 その2	72
図60	I区SX02平・断面及び出土遺物 その1	73
図61	I区SX02出土遺物 その2	74
図62	I区SD01平・断面及び出土遺物 その1	75
図63	I区SD01出土遺物 その2	76
図64	I区SD01出土遺物 その3	77
図65	I区SD03断面及び出土遺物	78
図66	I区SD04～06平・断面及び出土遺物	79
図67	I区SK04、SE01他平・断面 及び出土遺物	80
図68	II区遺構配置	82
図69	SD29他耕作溝群平・断面及び出土遺物	84
図70	II区SD01他断面	85
図71	II区SD03下位出土遺物 その1	86

図 72	Ⅱ区 SD03 下位出土遺物	その 2	87
図 73	Ⅱ区 SD03 下位出土遺物	その 3	88
図 74	Ⅱ区 SD03 上位出土遺物	その 1	89
図 75	Ⅱ区 SD03 上位出土遺物	その 2	90
図 76	Ⅱ区 SD06、SX01、02 出土遺物		92
図 77	Ⅱ区 SX03 平・断面及び出土遺物		
	その 1		94
図 78	Ⅱ区 SX03 出土遺物	その 2	95
図 79	Ⅱ区 SX03 出土遺物	その 3	96
図 80	Ⅱ区 SX03 出土遺物	その 4	97
図 81	Ⅱ区 SX03 出土遺物	その 5	98
図 82	Ⅱ区 SX04 平・断面及び出土遺物		
	その 1		99
図 83	Ⅱ区 SX04 出土遺物	その 2	100
図 84	Ⅱ区 SX04 出土遺物	その 3	101
図 85	Ⅱ区 SX04 出土遺物の刻印(原寸)		102
図 86	Ⅲ区西半部遺構配置		103
図 87	Ⅲ区 SB01 ~ 03 平		
	・断面及び出土遺物		104
図 88	Ⅲ区 SK05 他断面及び SD11 出土遺物		105
図 89	Ⅲ区東半部遺構配置		106
図 90	Ⅲ区 SB04 平・断面図		107
図 91	Ⅲ区 SD14 他断面及び		
	SD14 出土遺物その 1		108
図 92	Ⅲ区 SD14、16、17、23 出土遺物		109
図 93	Ⅲ区 SK29、31 平・断面及び出土遺物		110
図 94	柱穴、遺構外出土遺物		111
図 95	出土石器	その 1	112
図 96	出土石器	その 2	113
図 97			134
図 98			135
図 99			136
図 100			137
図 101			138
図 102	試料採取地点の土層断面		141
図 103			145
図 104			146
図 105	正箱遺跡遺構変遷図		148
図 106	旧図と検出遺構の関係		150
図 107	遺跡周辺の地形		
	分類図と条里地割		152

図版目次

図版 1 中間東井坪・正箱

1. 遺跡周辺の空中写真(上が北)

図版 2 中間東井坪

2. 予備調査 1 トレンチ全景 南から
3. 予備調査 1 トレンチ断面 西から
4. 予備調査 5 トレンチ断面 北から
5. 予備調査 7 トレンチ断面 南から
6. 予備調査 8 トレンチ全景 西から
7. 予備調査 9 トレンチ全景 西から
8. 予備調査 9 トレンチ土坑 全景 南から
9. 予備調査 12 トレンチ断面 西から

図版 3 中間東井坪

10. 上面遺構完掘状況 北東から
 11. 上面遺構完掘状況 北から
 12. SR01 完掘状況 南西から
- ### 図版 4 中間東井坪
13. SR01 南壁 断面 北から
 14. SK01 検出状況 西から
 15. SK01 完掘状況 北から
 16. SK02 検出状況 北から
 17. SK02 検出状況 東から

18.a.b 層中の自然礫 D3 グリッド 北から

19. 石器出土状況 B3 グリッド 北から

20. 石器出土状況 西から

図版 5 中間東井坪

21. 石器出土状況 東から
22. 石器出土状況 北から
23. 基底礫層と包含層の落ち D3 グリッド 北から
24. 旧石器包含層断面 E4 グリッド 南から
25. 旧石器包含層標準断面 F3 グリッド 北から
26. 基底礫層の断ち割り調査区中央 西から
27. 包含層除去後の基底礫層上面の窪み 北から

図版 6 正箱

- 28.B 区 全景 上が北
- 29.C 区 全景 上が北
- 30.D 区 全景 上が北
- 31.B 区 全景 北から

図版 7 正箱

- 32.B 区 全景 北西から
- 33.C 区 全景 北から
- 34.D 区 全景 東から
- 35.A-1 トレンチ断面 東から

36.C区東壁 火山灰採取 断面 東から

37.B区遺構検出状況 北から

図版 8 正箱

38.B区SB01全景 北東から

39.B区SB02全景 北から

40.B区SB01SP05断面 東から

41.B区SB01SP06断面 東から

42.B区SB02SP49断面 西から

43.B区SB02SP24断面 西から

図版 9 正箱

44.C区SD04全景 北東から

45.C区SD04と現状の境界線の地割 西から

46.C区SD04下層の礫群 南東から

47.B区SX01遺構出土状況 北から

48.B区SX01検出状況 東から

49.B区SX01断面 南から

図版 10 正箱

50.B区SP174遺物出土状況(弥生中期) 西から

51.B区SD09検出状況 西から

52.B区SD09全景 北東から

53.C区下層遺物 出土状況 南から

図版 11 八幡

54.遺跡遠景 南から

55.調査地周辺の地割 南から

図版 12 八幡

56.調査区周辺の地割

57.調査地全景 上が北

図版 13 八幡

58.Ⅰ区南半部全景 上が北

図版 14 八幡

59.Ⅰ区北半部全景 上が北

60.Ⅰ区南半部全景 南西から

図版 15 八幡

61.Ⅰbトレンチ北壁 南から

62.Ⅰb-1トレンチ北壁 南西から

63.Ⅰb-1トレンチ東壁 西から

図版 16 八幡

64.Ⅰb-1トレンチSD02全景 南西から

65.Ⅰb-1トレンチSD02断面① 西から

66.Ⅰb-1トレンチSD02断面② 南から

67.Ⅰb-1トレンチSX01全景 南西から

図版 17 八幡

68.Ⅰb-1トレンチSX01全景 西から

69.Ⅰb-1トレンチSX01全景 南から

70.Ⅰb-1トレンチSX01南側屈曲部 全景 南東から

71.Ⅰb-1トレンチSX01南側屈曲部 全景 北東から

図版 18 八幡

72.Ⅰb-1トレンチSX01断面① 北東から

73.Ⅰb-1トレンチSX01断面① 東から

74.Ⅰb-1トレンチSX01断面①南部(SD01との接点)
東から

75.Ⅰb-1トレンチSX01断面①北部(SD01との接点)
東から

76.Ⅰb-1トレンチSX01断面②(南屈曲部) 東から

77.Ⅰb-1トレンチSX01断面③ 南から

78.Ⅰb-1トレンチSX01断面④ 南から

79.Ⅰb-1トレンチSD01断面② 南から

図版 19 八幡

80.Ⅰb-1トレンチSD01北半部全景 南から

81.Ⅰb-1トレンチSD01断面⑤ 北から

82.Ⅰb-1トレンチSD01断面⑥ 北から

83.Ⅰc-1トレンチSX02.SD01全景 西から

図版 20 八幡

84.Ⅰc-1トレンチSX02全景 西から

85.Ⅰc-1トレンチSX02断面 西から

86.Ⅰc-2トレンチSX02全景 南西から

87.Ⅰc-1トレンチSD01断面① 西から

図版 21 八幡

88.Ⅱb-1トレンチ南西部 全景 上が北

89.Ⅱb-1トレンチ中央部(耕作溝群) 全景 上が北

図版 22 八幡

90.Ⅱb-1トレンチ中央部(手前に耕作溝群) 全景

北東から

91.Ⅱa-1トレンチ南西部 全景 北東から

図版 23 八幡

92.Ⅱb-1トレンチ南西部(SD01~04.SX01.02近世遺

構群) 全景 北東から

93.Ⅱb-1トレンチ中央部中世耕作溝群全景 北東から

94.Ⅱb-1トレンチ中央部中世耕作溝群断面 南から

95.Ⅱb-1トレンチ南東部全景 北東から

図版 24 八幡

96.Ⅱb-1トレンチSD01遺物出土状況 北から

97.Ⅱb-1トレンチSD01断面① 南から

98.Ⅱb-1トレンチSD01断面② 北から

99. II b-1 トンチ SD03 断面 北から
100. II b-1 トンチ SD04 断面 北から
101. II a-1 トンチ全景 西から
図版 25 八幡
102. II a-1 トンチ SX03 断面 西から
103. II a-1 トンチ SX03 断面 北から
104. II a-1 トンチ SX03 遺物出土状況 西から
105. II a-1 トンチ SX03 遺物出土状況 南西から
106. II a-1 トンチ SX03 全景 北東から
図版 26 八幡
107. III a-3 トンチ全景 上が北
108. III a-3 トンチ SB01～03 全景 西から
図版 27 八幡
109. III a-1 トンチ全景 北から
110. III a-2 トンチ全景 北から
111. III a-4 トンチ全景 西から
図版 28 八幡
112. III b-1 トンチ全景 右が北
図版 29 八幡
113. III b-1 トレンチ SB04 全景 東から
114. III b-1 トレンチ SK29 断面南から
115. III b-1 トレンチ北壁南東から
116. I c-3 トレンチ全景南から
117. I a-6 トレンチ全景北から
図版 30 中間東井坪遺跡 出土遺物
図版 31 中間東井坪遺跡 出土遺物
図版 32 中間東井坪遺跡 出土遺物
図版 33 中間東井坪遺跡 出土遺物
図版 34 中間東井坪遺跡 出土遺物
図版 35 正箱遺跡 出土遺物
図版 36 正箱・八幡遺跡 出土遺物
図版 37 八幡遺跡 出土遺物
図版 38 八幡遺跡 出土遺物
図版 39 八幡遺跡 出土遺物
図版 40 八幡遺跡 出土遺物
図版 41 八幡遺跡 出土遺物
図版 42 八幡遺跡 出土遺物
図版 43 八幡遺跡 出土遺物
図版 44 八幡遺跡 出土遺物

表目次

表 1 発掘調査の概要	3
表 2 調査体制年度別一覧	4
表 3 整理作業の体制観察表	4
表 4 土壇中火山灰(火山ガラス)抽出分析処理順序表	114
表 5 正箱遺跡 B 区下層北壁における火山ガラス濃集層準とその特徴	117
表 6 正箱遺跡 B 区下層北壁土壇試料分析 6 試料 試料採取層準土層模式柱状図及び分析結果	118
表 7 正箱遺跡 C-2 区北壁土壇試料分析 4 試料 試料採取層準土層模式柱状図及び分析結果	119
表 8 中間東井坪遺跡土壇試料分析 10 試料 試料採取層準土層模式柱状図及び分析結果	120
表 9 正箱遺跡 C-2 区北壁における火山ガラス濃集層準とその特徴	121
表 10 中間東井坪遺跡における検出テフラの層準とその特徴	122
表 11 重鉱物組成表(1)	124
表 12 重鉱物組成表(2)	125
表 13 重鉱物組成表(3)	126
表 14 正箱遺跡 B 区北壁土壇中火山灰抽出分析	127
表 15 正箱遺跡 C-2 区土壇中火山灰抽出分析	128
表 16 中間東井坪遺跡土壇中火山灰抽出分析	129
表 17 火山ガラスの屈折率結果一覧表	130
表 18 火山ガラスの屈折率結果一覧表	131
表 19 火山ガラスの屈折率結果一覧表	132
表 20 放射性炭素年代測定結果	139
表 21 暦年較正結果	140
表 22 花粉分析結果	142
表 23 主要花粉化石群集の層位分布	143
表 24 下層出土遺物一覧(縄文期のものを含む)	147
観察表	155～185

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は、同善通寺～豊浜間に引き続き、昭和57年1月8日に整備計画が決定され、昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団総裁に対して施工命令が下された。香川県教育委員会では、路線内の埋蔵文化財包蔵地の確認を目的に分布調査事業を実施し、これをもとに調査対象面積を39万㎡余りと判断した。また、路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、日本道路公団と文化庁の協議により基本的には記録保存で対応することが決定した。

香川県教育委員会では、これを受けて香川県の担当課である土木部横断道対策室及び日本道路公団高松建設局高松工事事務所と昭和62年度から調査体制等について協議を開始した。協議の結果、昭和63年度当初から2ヶ年の予定で本調査を実施すること、整理報告は発掘調査の終了後に実施すること等が決定した。これを受けて香川県教育委員会では調査体制の充実を図ることを目的に、昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置するとともに、専門職員を増員するなどして、善通寺市原田町・龍川五条遺跡から高松市中間町・中間西井坪遺跡までの間・28遺跡について昭和63年度から平成3年度までで発掘調査を終了させた。

一方、高松～善通寺間の内、残る中間町～檀紙町の区間や、国土交通省施工部分である高松～高松間（檀紙町～前田東町）、香川県東部地域の津田～引田間については、平成4年度から県教育委員会と日本道路公団との間で路線内の埋蔵文化財保護について事前協議が開始された。平成5年度には建設施工命令、平成6年度には中心杭の打設が行われた。この動きを受けて、香川県教育委員会は平成7年6・7月に路線内の分布調査を実施し、高松市内間4地区・津田～引田間22地区について埋蔵文化財の保護に配慮する必要があることを日本道路公団

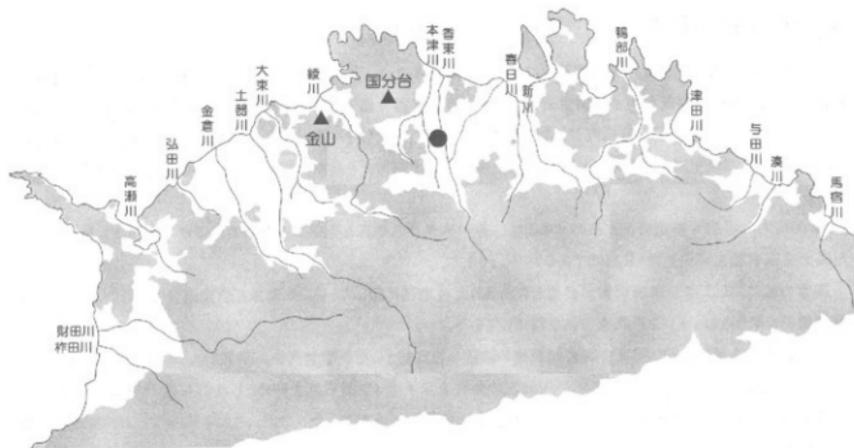


図1 遺跡の位置

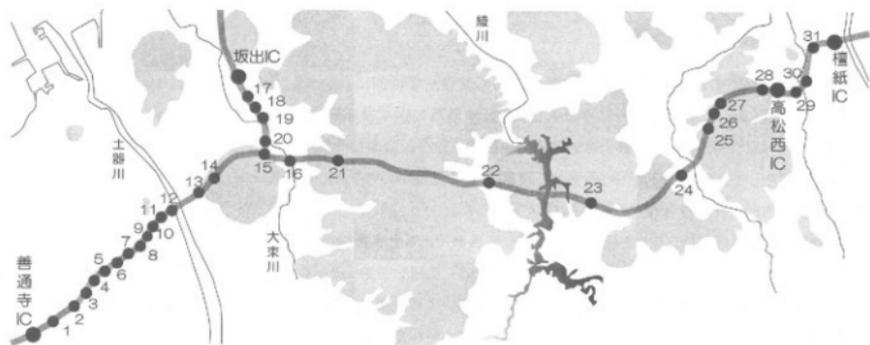


図2 横断面 高松～善通寺間の埋蔵文化財包蔵地

に通知した。

日本道路公団は、県教育委員会の意見を踏まえ、平成7年10月文化庁と協議を行い、平成8年1月文化庁より「工事に先立って発掘調査を実施すること」等の回答がなされた。これにより、平成4年度からの事前協議は終了し、平成8年4月、県教育委員会と日本道路公団との間で埋蔵文化財発掘調査について委託契約が締結され、さらに県教育委員会と財団法人香川県埋蔵文化財調査センターとで発掘調査委託契約が締結されたのである。

第2節 調査の経過

高松市内の区間(中間町～前田東町)は、R区間を除き県道・国道11号線の上部に建設されるため、埋蔵文化財調査は現道の拡幅部分が主な調査対象となる。国土交通省施工区間をあわせると香川県条里A地区(中間檜紙町)・香川県条里B地区(檜紙町)・香川県条里C地区(勸使町)・香川県条里D地区(田村町)・林坊城遺跡(林町)・山田郡条里遺跡(林町)・東山崎水田遺跡(東山崎町)・前田東中村遺跡(高松市前田東町)の8地区である。

これらの内、高松～善通寺間に該当するのは、香川県条里A地区と香川県条里B地区の中で国道11号線に面した国土交通省施工部分を除くR区間である。

調査方法に関しては、保護措置が必要と判断された各地区に関してトレンチ調査(予備調査)を行い、全面発掘調査範囲を絞り込む、トレンチ調査方法を採用している。

香川県条里A地区に関しては、調査対象地の絞込みを目的とした予備調査を、平成8年11月に実施した。その結果、古川西岸の272㎡について瀬戸内技法の存在を示すナイフ型石器を初めとした旧石器の包含が確認され、中間東井坪遺跡として平成9年2・3月の二ヶ月で全面発掘調査を実施した。また、これと並行して未買収地の予備調査を実施したが、遺構・遺物の包蔵は確認できず、古川西岸の部分については現地調査を完了した。

県道山崎・御辰線道路改良工事に伴い、平成2・3年度に発掘調査を実施した、正箱遺跡に隣接する古川東岸の部分については、平成11年1・2月に800㎡を対象とした全面発掘調査を実施し、香川県条里A地区の現地調

No.	遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査期間	主たる遺構	主たる遺物	調査報告書
1	望川玉条遺跡	善通寺市源田町	12,300 10,200	元. 6. 26～2. 3. 31 2. 4. 9～2. 12. 5	竪穴住居跡、竪立柱建物跡・弥生時代墓、自然河川	弥生土器、土師器、須恵器・石器、木製品	I第26冊(1996) II第29冊(1998)
2	鏡川白糸遺跡	善通寺市原田町・木徳町	20,200 1,700 300	元. 7. 1～2. 3. 31 2. 5. 28～2. 10. 24 3. 4. 4～3. 6. 18	古代竪立柱建物跡・溝、溝状遺構、自然河川	縄文土器・土師器、須恵器、和鏡・磁器、瓦器	第15冊(1995)
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	12,941 1,300	63. 4. 18～元. 2. 10 元. 4. 10～2. 3. 31	竪穴住居跡、自然河川、溝状遺構	弥生土器ほか	第11冊(1992)
4	三条黒島遺跡	丸亀市三条町	7,677	63. 6. 15～63. 11. 20	貯石器ブロック、溝状遺構・惣物跡	旧石器・弥生土器・陶磁器	第27冊(1997)
5	塚原遺跡	丸亀市三条町・藤家町	17,099 2,600	63. 4. 18～元. 3. 31	竪穴住居跡、竪立柱建物跡、溝状遺構	弥生土器・緑釉陶器、香申ほか	第13冊(1993)
6	郡家一里遺跡	丸亀市郡家町	14,967 6,450	63. 4. 18～元. 3. 31 元. 4. 10～2. 3. 31	竪立柱建物跡、溝状遺構、自然河川	古瓦尖頭器、弥生土器・須恵器・土師器、緑釉陶器、灰釉陶器	第12冊(1993)
7	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	11,175	63. 6. 16～元. 3. 22	竪立柱建物跡、溝状遺構、自然河川	須恵器・香申ほか	第17冊(1995)
8	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町	12,741	63. 6. 16～元. 2. 17	竪立柱建物跡、溝状遺構、火葬基	ナイフ形石器・弥生土器・須恵器、近世陶磁器	第24冊(1996)
9	川西北原遺跡	丸亀市川西町北	3,033	63. 12. 12～元. 3. 25	竪立柱建物跡、溝状遺構		第35冊(2000)
10	川西北七条目遺跡	丸亀市川西町北	4,034	63. 12. 13～元. 3. 27	溝状遺構、自然河川	土師器・須恵器	第27冊(1997)
11	川西北七条目遺跡	丸亀市川西町北	4,760	元. 2. 2～元. 3. 31	竪立柱建物跡、溝状遺構	土師器	第22冊(1996)
12	川西北殿治屋遺跡	丸亀市川西町北	12,208	元. 4. 10～元. 8. 11	中世竪立柱建物跡・溝、自然河川	土師器・須恵器、近世陶磁器	第22冊(1996)
13	飯野東二瓦輪遺跡	丸亀市飯野町	3,966	63. 12. 13～元. 3. 27	竪立柱建物跡、溝状遺構、自然河川	土師器・須恵器	第20冊(1996)
14	飯野東分山崎南遺跡	丸亀市飯野町	300	2. 3. 1～2. 3. 31		埴輪	第29冊(1998)
15	川津東山田遺跡	坂出市川津町 綾歌郡飯山町	28,100 500	2. 8. 2～3. 3. 20 3. 9. 2～3. 9. 4	弥生～中世竪立柱建物跡、竪穴住居跡、溝状遺構	弥生土器・土師器、須恵器・豊貴土器	I 未刊 II 未刊
16	川津川西遺跡	坂出市川津町	5,400	2. 5. 10～3. 1. 17	古墳時代竪穴住居跡、溝状遺構、古代～中世竪立柱建物跡	縄文土器・土師器、須恵器、其間、土馬、豊貴土器	第33冊(1999)
17	川津中塚遺跡	坂出市川津町	15,290 5,700	2. 5. 10～3. 2. 28 3. 4. 4～3. 9. 13	弥生竪穴住居跡、溝状遺構、土坑、古代～中世竪立柱建物跡、土灰基	弥生土器・須恵器、土師器、須恵器、鉄小刀	第14冊(1994)
18	川津下段遺跡	坂出市川津町	9,650 200	2. 5. 10～3. 1. 31 3. 4. 4～3. 9. 13	弥生時代木田、井塚、溝状遺構、自然河川	縄文土器・石器、弥生土器・木製品	第21冊(1996)
19	川津二代取遺跡	坂出市川津町	10,400	2. 5. 10～3. 3. 8	弥生時代溝状遺構、自然河川、中世竪立柱建物跡、溝状遺構	弥生土器・石器、土師器・須恵器、木製品	第16冊(1995)
20	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	35,180 1,350	2. 4. 12～3. 3. 28 3. 7. 18～3. 9. 27	弥生時代竪穴住居跡、建物跡、土坑、古墳時代竪穴住居跡・溝、水田	弥生土器・石器・土師器・須恵器、木製品	I第28冊(1997) II第30冊(1998)
21	飯山一本松遺跡	綾歌郡飯山町	2,200	元. 4. 17～元. 5. 16		弥生土器・須恵器・土師器	第33冊(1999)
22	府中地区	坂出市府中町	3,000	2. 10. 30～2. 12. 26	時代不詳 柱穴・土坑		第35冊(2000)
23	綾南奥下池南遺跡	綾歌郡綾南町	2,900	元. 5. 22～元. 7. 24	須恵器陶器	須恵器	第19冊(1996)
24	国分寺下日名遺跡	綾歌郡国分寺町	11,360	元. 8. 19～2. 2. 28	弥生時代溝状遺構、水田跡、動物足跡	弥生土器・土師器・須恵器、動物足跡	第31冊(1999)
25	国分寺橋井遺跡	綾歌郡国分寺町	4,400	2. 4. 11～2. 10. 7	刀痕、中世土師器跡、竪立柱建物跡	須恵器・耳環、土師器・瓦質土器	第18冊(1995)
26	国分寺六ツ目古墳	綾歌郡国分寺町	900	元. 9. 1～元. 12. 28	前方後円墳(主体部G3)	古式土師器・鉄器	第28冊(1997)
27	国分寺六ツ目遺跡	綾歌郡国分寺町	5,600	元. 10. 1～2. 2. 28	中世竪立柱建物跡	石器・弥生土器・近世磁器	第34冊(1999)
28	中岡西井坪遺跡	高松市中岡町	11,690 8,680 1,270	元. 8. 19～2. 3. 25 2. 5. 10～3. 3. 25 3. 4. 5～3. 7. 18	旧石器ブロック・埴輪施成土坑、古墳(3基)、竪穴住居跡、竪立柱建物跡・溝、土坑	旧石器・弥生土器・須恵器・須恵器、土師器・陶器	I第25冊(1996) II第32冊(1999) III第37冊(2001)
29	中岡東井坪遺跡(香川郡桑名地区)	高松市中岡町	709	8. 4. 1～8. 5. 31 8. 9. 1～8. 9. 30 9. 1. 1～9. 3. 31	旧石器ブロック・古代河川跡	旧石器須恵器	第49冊(本書)
30	正緒遺跡(香川郡桑名地区)	高松市権紙町	800	11. 1. 1～11. 2. 28	古代竪立柱建物跡・溝	須恵器・弥生土器・旧石器	第49冊(本書)
31	八幡遺跡(香川郡桑名地区)	高松市権紙町	200 4,515 1,542	11. 2. 1～11. 3. 31 11. 7. 1～11. 9. 30 12. 1. 1～12. 3. 31 12. 4. 1～12. 5. 31	溝、柱穴 溝、柱穴、掘溝 溝、柱穴	土師器 土師質土器・須恵器 土師質土器・須恵器	第49冊(本書)

表1 発掘調査の概要

査を終了した。

香川県東条B地区は、平成10年当初に東側の国道11号線に面したインターチェンジの国土交通省施工部分から予備調査を実施した。その結果、中世集落の存在が確認され中森遺跡として引き続いて発掘調査を行った。公団施工部分である西側のR区間については、用地取得が完了した部分から平成10年度末に予備調査を行い、中世集落の存在が認められ八幡遺跡として調査対象範囲を5857㎡に絞り込んだ。全面発掘調査は平成11年上半年と、下半年に4315㎡実施した。平成12年度当初に、1542㎡の発掘調査を実施し現地調査を終了した。

整理作業は、平成15年4月～10月までの7ヶ月の期間で、中間東井坪・正箱・八幡遺跡の3遺跡に関して実施した。

現地調査及び整理作業の体制は以下の通りである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

平成8年度		平成10年度		平成11年度		平成12年度	
課長	藤原 章夫	課長	小原 克己	課長	小原 克己	課長	小原 克己
課長補佐	高木 一雄(～5.31)	課長補佐	北原 和利	課長補佐	小国 史郎	課長補佐	小国 史郎
課長補佐	北原 和利(6.1～)	副主幹	渡部 明夫	副主幹	廣瀬 常雄	副主幹	廣瀬 常雄
副主幹	渡部 明夫	副主幹	西村 隆史	総務係長	中村 禎伸	総務係長	中村 禎伸
係長	山崎 隆	総務係長	中村 禎伸	主査	三宅 陽子	主査	三宅 陽子
主査	星加 宏明	主査	三宅 陽子	主査	松村 崇史	主査	松村 崇史
主査	國方 秀子(～5.31)	主査	松村 崇史	主査		主査	
主査	打越 和美(6.1～)	主査		主査		主査	
埋蔵文化財		埋蔵文化財		埋蔵文化財		埋蔵文化財	
文化財専門員	木下 靖一	係長	西村 尋文	文化財専門員	森 格也	文化財専門員	森 格也
技師	塩崎 誠司	主任技師	塩崎 誠司	主任技師	塩崎 誠司	文化財専門員	宮崎 哲治

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

平成8年度		平成10年度		平成11年度		平成12年度	
所長	大森 忠彦	所長	菅原 良弘	所長	菅原 良弘	所長	小原 克己(1.1～)
次長	小野 善範	次長	小野 善範	次長	川原 裕章	次長	菅原 良弘(～10.30)
総務		総務		総務		次長	川原 裕章
参事	別枝 義昭	参事	別枝 義昭	副主幹兼係長	六車 正憲	総務	
係長	前田 和也	副主幹兼係長	田中 秀文	副主幹兼係長	田中 秀文	副主幹	六車 正憲
主査	西村 厚二(～5.31)	主査	新 一郎	係長	新 一郎	副主幹	大西 誠治
主任主事	西川 大	調査		調査		調査	新 一郎
主事	佐々木隆司(6.1～)	参事	長尾 重盛	参事	長尾 重盛	調査	
調査		主任文化財専門員	大山 眞充	主任文化財専門員	大山 眞充	参事	長尾 重盛
参事	近藤 和史	主任文化財専門員	藤好 史郎	主任文化財専門員	藤好 史郎	主任文化財専門員	藤好 史郎
主任文化財専門員	大山 眞充	主任文化財専門員	長元 茂樹	文化財専門員	蔵本 晋司	文化財専門員	西村 尋文
文化財専門員	大久保徹也	主任文化財専門員	運本 和博	主任技師	野崎 隆亨	文化財専門員	蔵本 晋司
文化財専門員	谷畑 雅彦	文化財専門員	森下 英治	技師	信里 芳紀	文化財専門員	増井 泰弘
技師	住野 正和	技師	松本 和彦	調査技術員	豊岡 多恵	調査技術員	豊岡 多恵
技師	信里 芳紀	調査技術員	陶山 仁美	調査技術員		調査技術員	
調査技術員	高橋伸緒里	調査技術員	門脇 範子				
調査技術員	貞廣智代美						

表2 調査体制年度別一覧

整理作業に携わった方々	山下慧志子、市川孝子、森川規恵、辻悦子、香川洋子
-------------	--------------------------

表3 整理作業の体制

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

今回報告する中間東井坪・正箱・八幡遺跡が所在する高松平野は、香東川を主体に本津川・春日川・新川によって形成された扇状地性の沖積平野である。南は讃岐山地と呼ばれる白亜系の砂岩、頁岩から構成される標高800～1000m程の東西方向の山地に、この北側や東西には、花崗岩からなる低山によって画されている。これらの山頂には、瀬戸内火山活動によって形成された讃岐層群が乗っており、侵食されにくい安山岩や凝灰岩が産出される。中間東井坪遺跡を初めとして、旧石器石材として利用された五色台に産出するサヌカイトもこの石材に含まれるものである。

高松平野は、更新世の段丘面と沖積面に分かれ、沖積積面は、扇状地帯と三角州帯に分類される(高橋1992)。中間東井坪遺跡はじめとして、本書の3遺跡は扇状地帯に分類される地形面に立地している。また、扇状地帯を主体的に構成するのは、更新世末期に堆積した広義の沖積層基底礫層である。中間東井坪遺跡では、この沖積層基底礫層に対応すると見られる礫層上において、ATと見られる火山ガラスを包含するシルト層を確認しており、この礫層の堆積時期は22,000年を遡る可能性が考えられる。中間東井坪遺跡を初めとして、人的活動が確認されているのは、この礫層が堆積した以後の段階からである。

図4には、中間東井坪・正箱遺跡周辺の現地表面の起伏を10cm間隔で表現したものである。遺跡西側には、等高線の間隔が狭く比較的急傾斜の地形面が見られる。これは、高橋学氏の地形分類に従うと、土石流扇状地帯とされる地形面に相当するものと考えられる。また、図中には間析谷と思われる複数の谷筋も確認できる。後述する中間東井坪遺跡予備調査6.7トレンチで確認した旧河道は、こうした間析谷の一つと考えられる。中間東井坪・正箱遺跡の間には、南北方向に現古川が流れ、東西に等高線が密になる部分が見られる。これは、古代末に形成された完新世段丘崖に相当するものと考えられる。この段丘崖より低位の部分のトレンチでは、中間東井坪遺跡の予備調査1.2トレンチや正箱A地区のトレンチで近世の遺物を含む氾濫原を確認しており、基本的には古代末以前の遺構は存在していない。段丘上に位置する中間東井坪遺跡Aトレンチで確認された旧河道が、9cまでに埋没している状況は、段丘崖の形成と深く関わっていると見られる。

以上の景観は、古代末以降のものであるが、ナイフ形石器を主体としたブロックが確認されている中間東井坪遺跡が立地する古い段階の地形面を検討したい。まず、本調査対象としたAトレンチの後方には、現地表面でも微高地状を呈している部分が確認できる。Aトレンチは、微高地の縁辺部に位置していることになるが、問題は微高地の形成が何時の段階に遡るかである。断片的な資料からの判断になるが、Aトレンチでは、AT降灰以前と考えられる広義の基底礫層が、現地表面の起伏と呼応するように南西から北西方向へ傾斜していた。微高地上に設定した4.5.11トレンチでは、地表面から比較的浅い位置でこの基底礫層を確認している。これらの点から、現地表面で観察できる微高地の形成には、旧中州と考えられる基底礫層が深く影響していることが推測される。

古川を挟み東岸の正箱遺跡や八幡遺跡では、礫層は下位に埋没しており、沖積層の堆積の影響を頻繁に被る低地ないし谷状の地形面であったと考えられる。また、正箱・八幡遺跡では、ブロックを形成するような原位置をとどめた旧石器類の出土は見られない。八幡遺跡の東側に位置する中森遺跡では、地表面下50cmほどで礫層が露出し、その上面で旧石器ブロックが確認されている(森下2000, 信里2001)。

数少ない調査例ではあるが、本地域では沖積層基底礫層によって構成される旧中州(微高地)の存在と旧石器群の出土状況が符合している。すなわち、埋没途上にありながらも礫層が比較的浅い位置で露出する場所は、旧石器段階では微高地として捉えられる可能性が高いと言える。

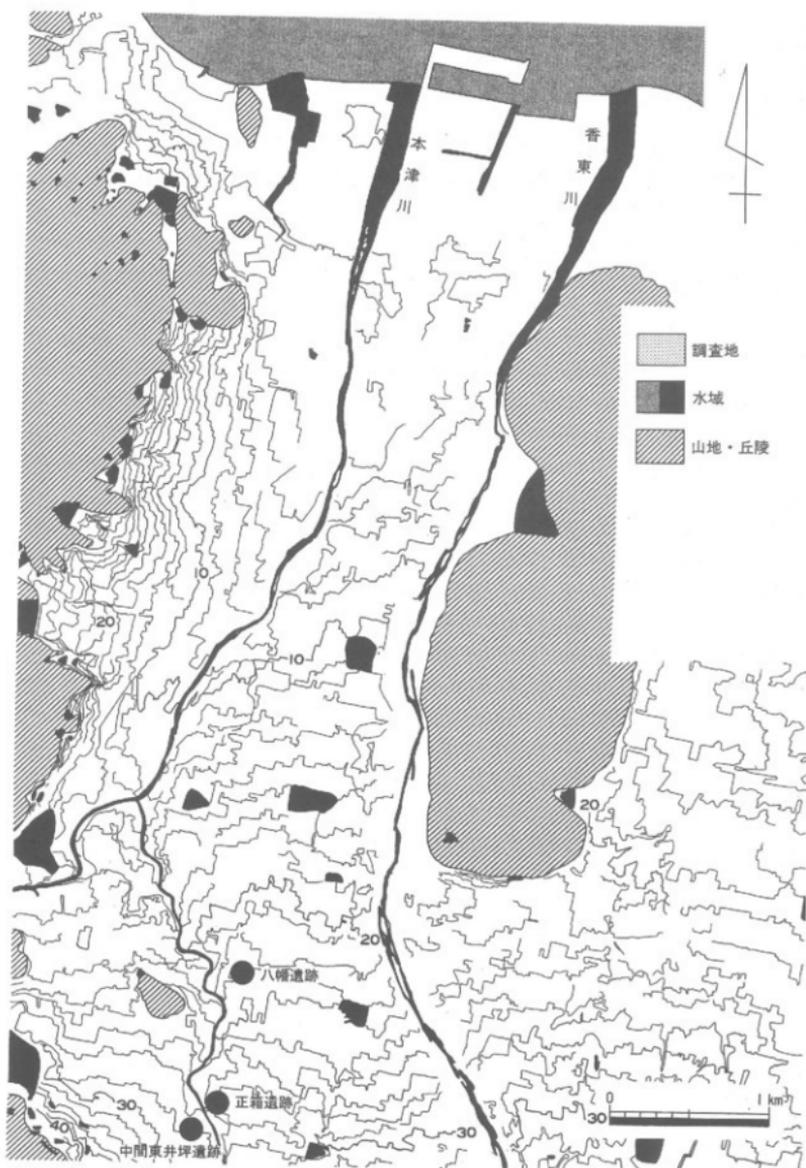


図3 1m等高線図（木下2000を一部改変）

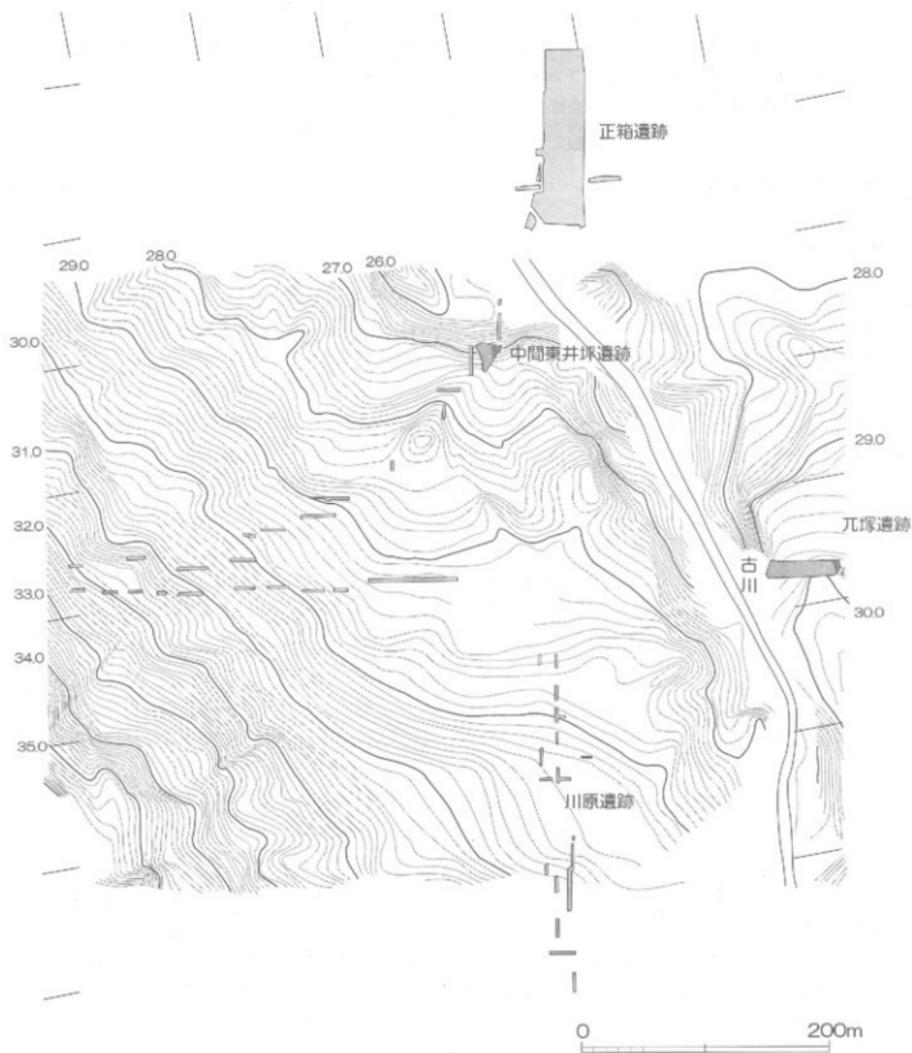


図4 中間東井坪遺跡・周辺の10cm等高線

また、古川（本津川下流域でも）下流域の標高3～4mに位置する西打遺跡においても現地表面起伏に対応して縄文前期の旧河道が確認されている（木下 2000）。このように、高松平野のほぼ中心を流れる香東川の西側では、比較的古い段階の地形面を留めている可能性が高いと考えられる。

第2節 歴史的環境

1. 旧石器時代

香東川西側の本津川・古川流域の六ツ目山東麓を中心とする地域では、近年6遺跡程の後期旧石器の遺跡が確認されている。高位の丘陵斜面地を中心とした近隣の中間西井坪遺跡では、接合資料を含みナイフ形石器や角錐状石器を主体とした数基のブロックを確認しており、比較的遺跡の様相が判明している（森下 2001）。一方低位の中森遺跡では、100程度の横長剥片石核・同剥片を主体とした小規模なブロックが1基確認されているが、確認されたナイフ形石器には瀬戸内技法は見られないことから、後期旧石器でも新しい段階と評価されている（森下・小野・藤好 1999）。本書で報告する中間東井坪遺跡では、瀬戸内技法を純粋な形で見られることから、後期旧石器の中でもかなりの時間幅を要して、本地域に点々と遺跡形成が進んだものと考えられる。

2. 縄文時代

本時代の遺跡の調査例は著しく少ない。中間東井坪・正箱では、縄文後・晩期と推定される土坑・流路等が確認されているが、遺跡全体の様相を復元できるようなものではない。この傾向は、島嶼部を除く県内全域に見ることができ、今後の調査例の蓄積が望まれる。

3. 弥生時代

前期～後期前半の遺跡の調査例は少なく唯一、正箱遺跡で竪穴住居1棟の調査例確認できる（廣瀬・西村 1994）。平成3年度調査で確認された竪穴住居は、直径6mほどの円形プランをもち、中央炉両側に小ピットを伴うものであり、所謂松菊里型・北牟田型住居の系譜である可能性が高い。住居内から時期決定の遺物が乏しいものであったが、本書報告分のBトレンチで、中期初頭段階集落に關係した遺構を確認したことにより、詳細な時期決定が可能になった。

後期後半～古墳初頭に関しては調査例が多い。御厩池遺跡は、実態が不明ながらも後期後半を中心とした集落の存在が予測される（山本 1999）。中間西井坪遺跡は、唯一集落構成の一端が判明する後期後半末葉～古墳初頭の遺跡であるが、竪穴住居を欠落し掘立柱建物のみで構成される点が注目される（蔵本 1999）。建物の機能は定かではないが、掘立柱建物の集中が、集落内に留まるか、一定地域内で局所的に認められる現象であるかは今後の調査例を待って評価する必要がある。

4. 古墳時代

古墳時代初頭～前期前半の古墳・集落は確認できない。前期後半には、中間西井坪遺跡で古墳築造・埴輪生産関係の調査例が見られる（大久保 1996）。埴輪生産では、焼成土坑に加えて作業場としての性格が強い大型竪穴建物など一連の遺構・遺物が確認されている。生産された埴輪には、円筒に加えた盾形などの形象埴輪を初めとして、箱形・割竹形・円筒形の土製棺が確認できる。また、円筒埴輪・箱形土製棺は下流域の今岡古墳への供給が想定されており、古墳築造に際しての関与した地域圏の様相を示す好例と言える。また、遺跡内には、少なくとも



図5 周辺の遺跡分布

3基の古墳が含まれ、中間西井坪1号墳は前期後半の前方後円墳である。2,3号墳は円墳と考えられ、遺跡内の埴輪生産とは時期を違えて、中期後半に下る。南方に分布する矢塚古墳・弓塚下古墳・西山崎1~4号墳など詳細な実態が不明ながらも中期~後期にかけて小規模に形成される古墳群が点在する。同一河川水系では、中期後半段階の築造が推定される御殿天神社の帆立貝形古墳を除き、有力な首長墓は見られない。

先の中間西井坪遺跡の事例は、古墳築造に伴う埴輪生産を契機とした遺跡であり、他に古墳時代集落の形跡は確認されていない。

5. 古墳時代末~古代

集落の検出例は多く、兀塚遺跡(6c末~7c中葉)・中間西井坪(6c末~7c中葉, 8c後半)・正箱(8c後半~9c)が知られ、一見連続性の無いように見えるが、狭い範囲を建物群が移動している状況も想定できる。この中で注目されるのは、糸里型地割の施工と関係が見られる建物の主軸方位である。6c末~7c中葉には、統一性の無い主軸方向から正方位への変遷が、兀塚・中間西井坪遺跡で確認され、8c後半以降には、正箱遺跡・中間西井坪遺跡で周辺に依存するN-9°E前後を測る糸里型地割に合致する主軸方位に統一されていく現象が見られる。地割溝自体は正箱遺跡の一例に留まるものの、集落の建物主軸とその周辺のみに限定される形で糸里型地割の施工が遅くとも8c後半には行われた現象を反映する可能性が考えられよう。また、この3遺跡南方には、現状の糸里型地割なかに取り込まれる形で幅11~12m程度余剰帯と呼ばれる地割が東西方向に依存している。この余剰帯は、ほぼ高松平野を東西に貫くように見られ、官道である南海道に比定されている(金田1988)。この部分を調査対象地とする川原遺跡の予備調査ではこの余剰帯を反映した形で東西方向の溝を確認している(藤好2003)。現状で溝の開削時期は不明ながら、南海道の敷設が正箱遺跡を初めとした集落の建物を含めた糸里型地割の施工と深く関係している可能性があり、今後とも注意する必要がある。

中世

前段階に整備された糸里型地割はその範囲を拡大し、坪界溝の掘開やほぼ全域で集落の建物主軸やその立地にその影響を与えている。完新世段丘崖の形成とともに、多くの旧河道の埋没が完了しており、平坦化が進んだ段丘上ほぼ全域に糸里型地割溝の施工を伴った開発が進行したものと考えられる。糸里型地割溝の多くは、14c以降に掘開されたものが多い。

- 大久保徹也 1996 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第二十五冊 中間西井坪遺跡』 香川県教育委員会 編 香川県埋蔵文化財調査センター 日本道路公団
- 木下靖一 2000 『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第1冊 西打遺跡』 香川県教育委員会 編 香川県埋蔵文化財調査センター
- 金田章裕 1998 『糸里と村落生活』 『香川県史 第1巻 通史編 原始・古代』 香川県 四国新聞社
- 蔵本晋司 1999 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三十二冊 中間西井坪遺跡II』 香川県教育委員会 編 香川県埋蔵文化財調査センター 日本道路公団
- 信里芳紀 2001 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成11年度 中森遺跡』 香川県教育委員会 編 香川県埋蔵文化財調査センター 日本道路公団
- 藤好史朗 2003 『川原遺跡・本郷遺跡』 『県道関係埋蔵文化財調査概報 平成14年度』 香川県教育委員会 編 香川県埋蔵文化財調査センター
- 樋本清輝・森下友子 1997 『兀塚遺跡』 『県道関係埋蔵文化財発掘調査概報 平成8年度』 香川県教育委員会 編 香川県埋蔵文化財調査センター
- 廣瀬常雄・西村尋文 1994 『県道山崎河原線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 正箱遺跡・薬王寺遺跡』 香川県教育委員会 編 香川県埋蔵文化財調査センター
- 森下英治 2000 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概報 平成10年度 中森遺跡』 香川県教育委員会 編 香川県埋蔵文化財調査センター 日本道路公団
- 森下英治 2001 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三十七冊 中間西井坪遺跡III』 香川県教育委員会 編 香川県埋蔵文化財調査センター 日本道路公団
- 山本英之・大嶋和則 1997 『御殿池遺跡』 『香川県埋蔵文化財調査年報 平成8年度』 香川県教育委員会

第3章 調査の成果

第1節 中間東井坪遺跡

1. 予備調査

糸里型地割が明瞭に認められる調査対象地は、当初香川県糸里A地区として保護措置を行うこととなったが、遺跡内容が不明なことから、トレンチを設定して地下遺構の状況を把握する予備調査から始められることとなった。用地取得の完了した部分の6964㎡を対象として平成8年11月6日から11月13日までの実働5日間で10本のトレンチを設定し、調査を行った。トレンチ配置については、図6に示すとおりである。現古川西岸の3トレンチの部分で、A層と思われる火山灰層と、その上位の堆積層からナイフ形石器の出土を確認し、この包含層の残存が認められる323㎡について全面発掘調査が必要であるとの結果が得られた。本調査は、平成9年1月1日～3月31日の期間で実施した。調査対象地の中で残る3042㎡については、本調査と並行して平成9年2月22日～23日の2日間で予備調査を実施したが、期待された旧石器包含層をはじめとした遺構は確認されなかったことから、トレンチ調査をもって保護措置を終了した。以下各トレンチの所見の概略について説明する。

調査対象地は、現古川に向かって南西から北西に緩やかに下る。この古川西岸には、現状でも高さ1m程を測る段丘崖が所在している。これに呼応するように、1、2トレンチともに耕作土直下に氾濫と滞水を繰り返すシルト・粗砂の互層が確認され、遺構の存在は確認できなかった。現古川に伴う氾濫原面と考えられる。1、3、8～10は1トレンチ、6は2トレンチの氾濫原面を構成する堆積層からの出土遺物である。1は縄文晩期前半の浅鉢の屈曲部片。3は小片ながら弥生中期前半の壺頸部片と考えられる。6は須恵器長頸壺の底部片、8は須恵器甕の胴部片、9は須恵器壺の胴部片であり、7～8世紀前半の所産と推定される。10はサヌカイト製の剥片であり、一側縁に使用痕である微細剥離痕が見られる。

一方、段丘上に位置する1～11トレンチでは安定的な堆積状況が確認されるものの、複数の微高地と旧河道・低地を確認した。6、7トレンチでは、南東から北西方向への旧河道が見られ、12トレンチでも正確な方向は不明ながら、南東から北東方向の旧河道を検出している。これらの旧河道は、平成元年度に実施された中間西井坪遺跡のC、D地区の予備調査トレンチでも確認されているが、巨視的には、南西方向の六ツ目山裾部を開析する谷筋に相当するものと考えられる。2は7トレンチの旧河道の埋積土から出土した弥生後期後半期の広口壺の口縁部片である。

この旧河道を境として、12トレンチから古川氾濫原面に所在する1、2トレンチとの間と、6、7トレンチと12トレンチの間との部分が微高地と把握され、前者を微高地1、後者を微高地2と呼称する。また、微高地1は、第1章第2節で検討したように、現地表面でも明瞭な微高地として捉えられるものである。微高地上の削平はきつく、殆どのトレンチにおいて現耕作土直下で明瞭な遺物包含層を介在させることはない。基盤層と判断されるのは黄色系の粘土層であり、乾痕の状況からかなり古い段階で離水した状況が想定された。トレンチ4.5.11では柱穴・溝等の平面遺構は一切見られない。調査対象地周辺の遺跡で旧石器が多く検出されていることから、注意深く精査したが基盤層からの遺物の出土は見られず、遺構は完全削平されたものと判断された。しかし、現古川に向かって傾斜し、微高地1の縁辺部と考えられる3トレンチでは、遺物包含層の薄層と、ナイフ形石器の包含が確認される堆積層が確認された。微高地縁辺部に相当することから、後世の削平を免れたものと考えられる。その厳密な広がりを確認する為に設定した10トレンチでは、4.5.11トレンチと同様の基盤層が露出し、3トレンチの旧石器の包含が認められる層は見られなかったことから、微高地上面は完全に削平が行われているものと見られる。この傾向は、微高地2上面においてもこの傾向は追認され、9トレンチで近世後半期の土坑を確認したのに留まり、平面遺構の多くは消滅したものと判断された。

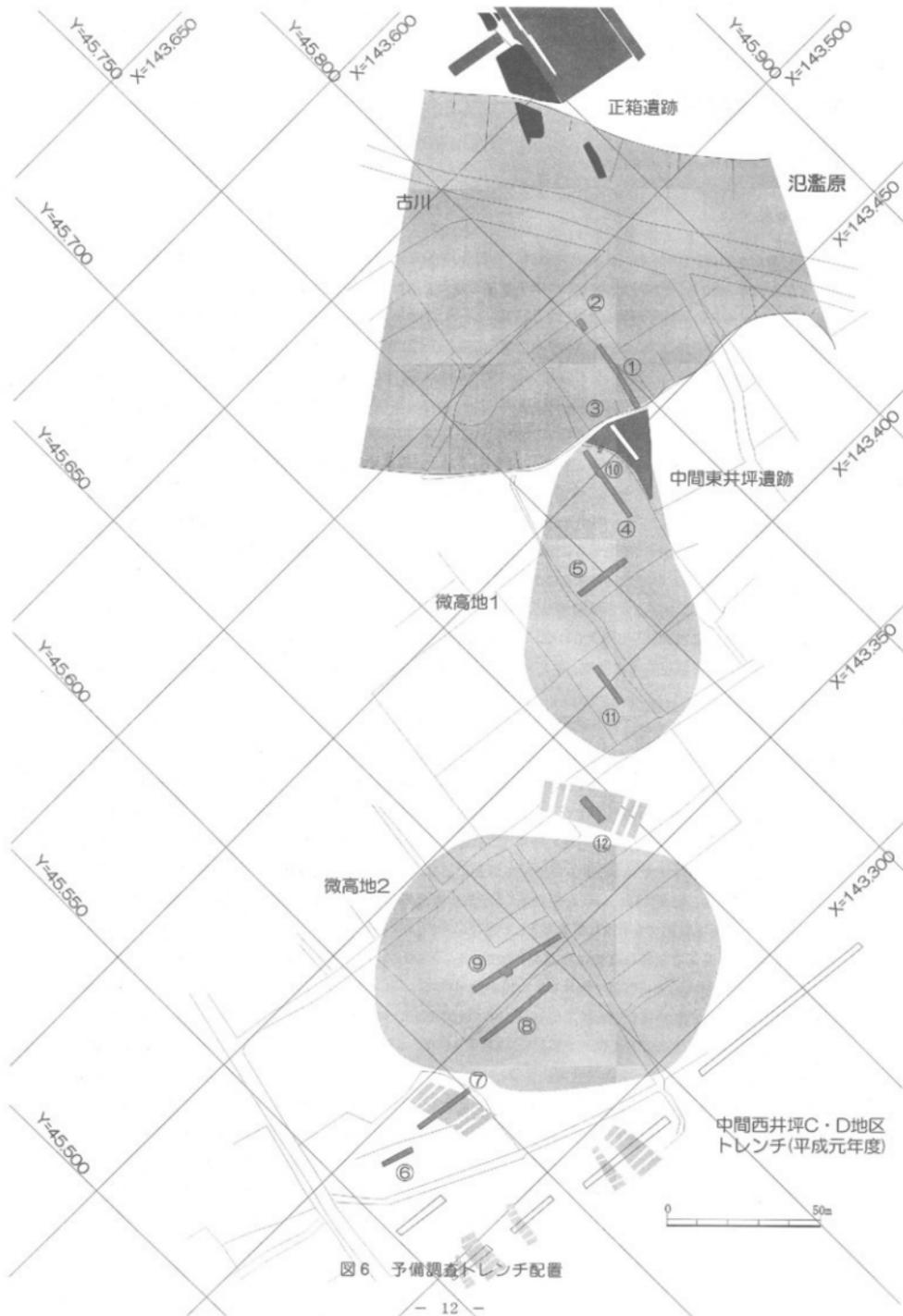


図6 予備調査トレンチ配置

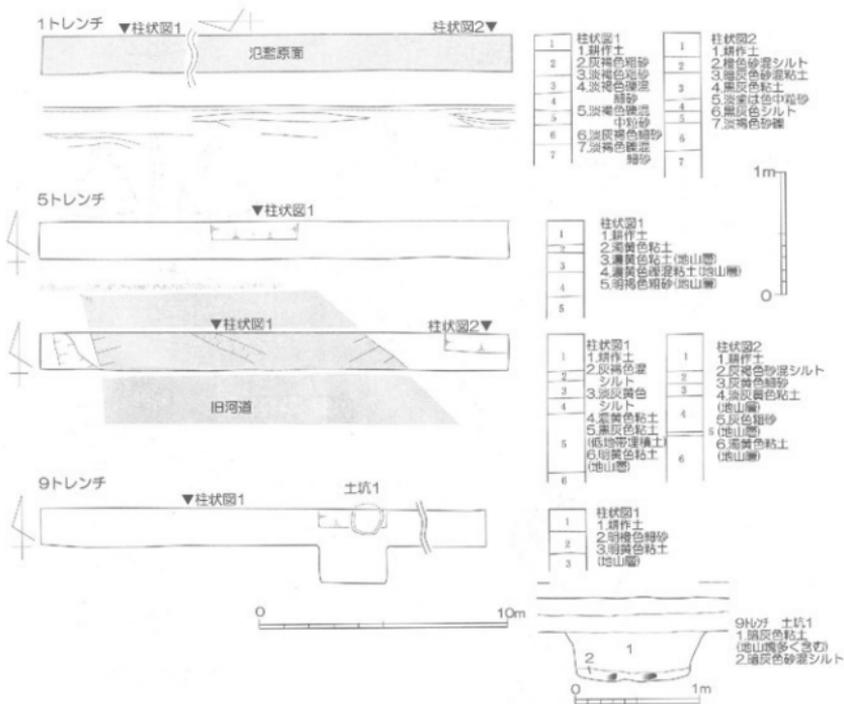


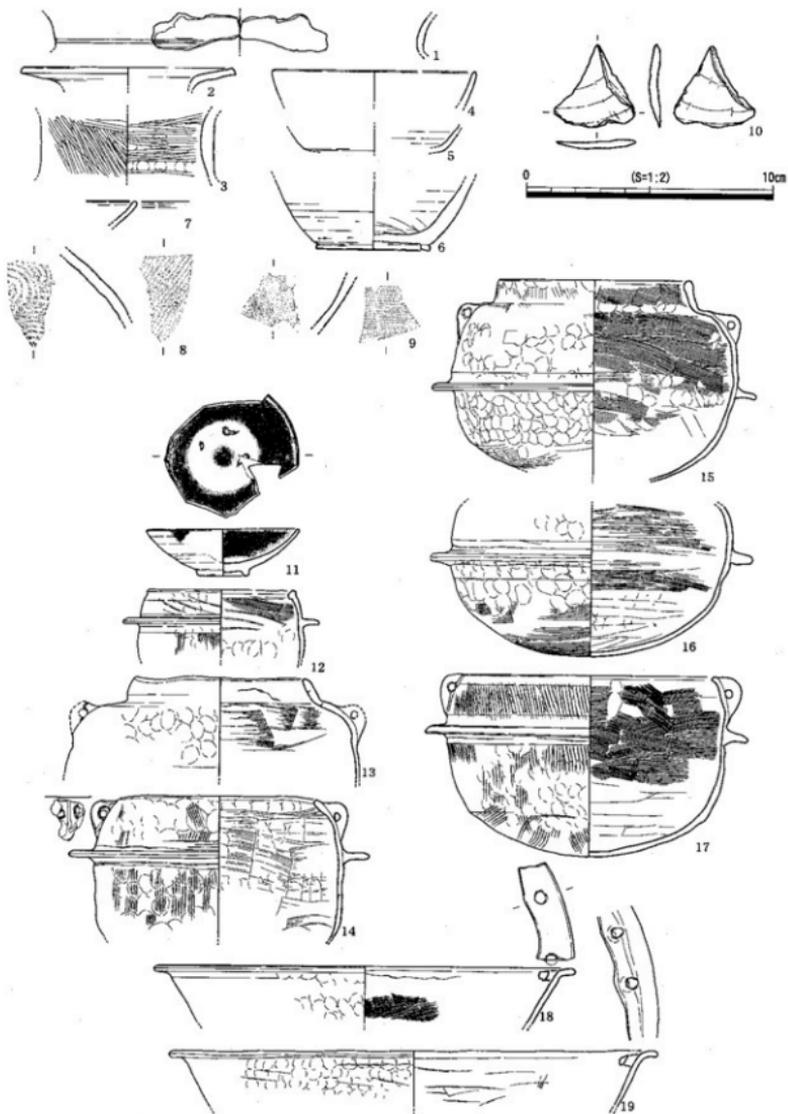
図7 予備調査トレンチ平面及び土層柱状図

4.5は8トレンチの現耕作土直下の比較的近年に形成された耕作土からの出土した須恵器杯であり、概ね8c代の所産と見られる。11～19は、9トレンチの土坑1から出土した遺物である。11は、内面を中心として青緑釉が認められる肥前系陶器碗。12～17は瓦質焼成の羽釜である。18.19は土師質土器焙烙の口縁部片である。これらの遺物は、概ね18c後半を中心とした時期に位置付けられよう。

2. Aトレンチの調査

層序

調査前の現況は一筆の水田であり、標高は27.5m前後を測る。地表面下には0.3m程の現耕作土が見られる。この下位には、比較的近年の所産と思われる連続した旧耕作土層が存在している。その分布範囲は、後述する旧河道SR01が所在する調査区北東部に厚く見られる。調査区南西部では現耕作土のほぼ直下、上層遺構の基盤層であり縄文期以前の遺物を包含する黄灰色粘土層と、更に下位に位置する基底礫層が露出する。SR01は、南から北方向へ調査区の北西部を横切る形で見られ、中央の土手状の中州を介して2条の窪地を刻む。8～9c代の遺物を包含しているが、北壁の断面図で、16～26層までの堆積層は流水状態が想定できるものの、それより上位の8～10.14.15層は、流水停止後の水田耕作土層と考えられる。これらの水田耕作土は、当初のSR01の部分を越えて見られ、SR01西岸部分を大きく削り込んで見られる。その際に、先の縄文期以前の遺物を包含する黄灰色粘土層を攪拌したと推定され、数点の旧石器～縄文期の石器類の出土が確認された。



1.3.8.9.10 1トレンチ 6. 2トレンチ 2 7トレンチ
 4.5 8トレンチ 7. 9トレンチ 11~19. 9トレンチ 土坑1

0 (S=1:4) 20cm

図8 予備調査出土遺物

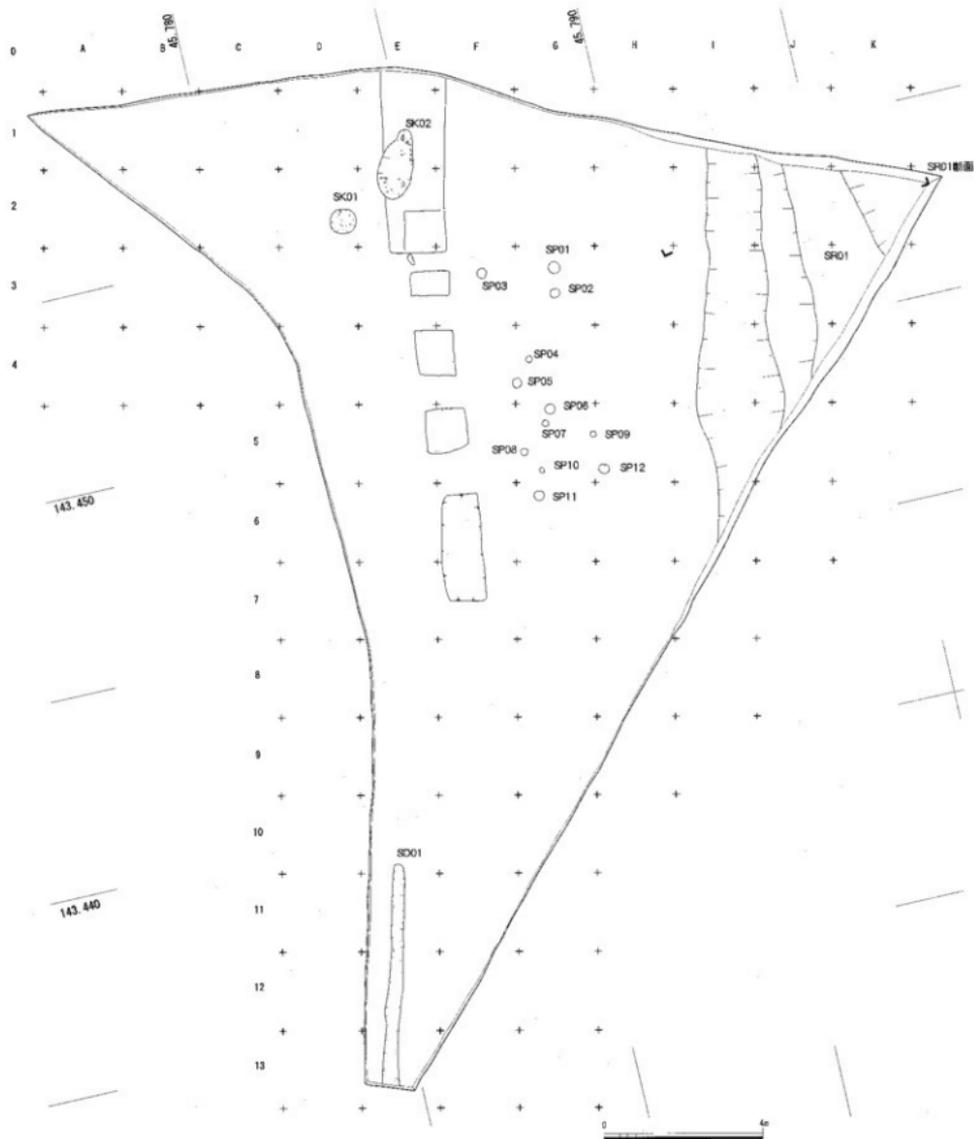


図9 Aトレンチ遺構平面

縄文期～旧石器の遺物の包含が認められるのは、下層包含層と呼称する図 10 上段の 27～29 層であり、最下層の 32 層とした砂礫層上面に最大で層厚 0.3 m 程を測り堆積している。下層包含層は 3 層に大別されるが、上層（図 15 の 1 層とした下層包含層 1）には、旧石器から縄文期までの遺物を含み、下位の旧石器類と層位的に分別するのは難しい。埋没過程において多少の上下動を受けていると見られる。下層包含層 2 とした 28, 27 層（図 15 の 2～7 層）は黄色粘土土であり、旧石器の遺物のみ認められる。縄文期の土坑である SK 01.02 は、本層上面において掘り込みを確認した。北壁で行った火山灰抽出分析では、本層の下位において AT ピークが認められた。更に下層である 29 層（図 15 の 8 層）は、上位の下層包含層 2 と基本的には同一層であるが、砂粒が多く認められることで区分している。AT 層の貫入も認められるものの微量であり、旧石器の遺物の点数の少数に留まる。

最下層の 32 層とした砂礫層は調査区西部では現耕作土直下で露出し、主に北東方向へ向かって緩やかに下る。また、かなり締りがよく、AT ピーク層と考えられる 27 層の下位に堆積していることから、広義の沖積基底礫層と考えられるものである。

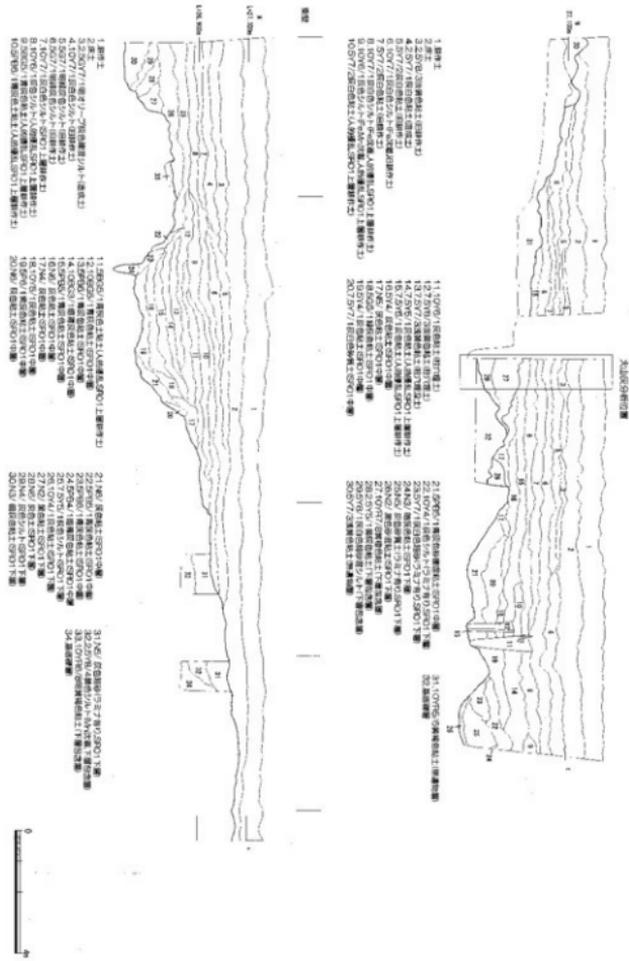


図 10 北壁・東壁断面

上層遺構

柱穴群

調査区中央部で数基の柱穴を確認している（SP01～11）。いずれも埋没土に黒褐色系粘土をもつが、年代決定可能な遺物が見られない。唯一SP01から焼成粘土塊が出土しているのみである。また、配置から建物復元が不可能なことから、その性格については不明である。

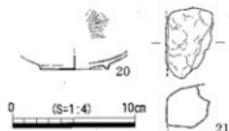


図11 耕作土・柱穴出土遺物

SR01

調査区北西部を南から北へ流れる旧河道である。検出範囲で上面幅8m以上深さ1mを測る。中央部に中州状の高まりを残し、下層では2条に別れた流路状を呈する。中～下層の堆積物は、流水状態を示す細砂～シルトを主体としている。堆積順序は、東側の部分から埋積が始まり、次に西側の部分が埋没する。下層と区分した東側は、顕著なラミナを示す粗砂～中粒砂を主体として埋積されており、かなりの流水状態にあったことがうかがえる。中層とした西側の流路部分は、東側の下層を一部挟み取るものの、埋没土はシルト～粘土を基本としており、流水機能を失う直前の比較的穏やかな堆積環境を想定できる。

上層は、先に見たように、ラミナを一切認めないことや、層境に凹凸が認められることから耕作土の可能性が高く、流水停止後の水田として機能していた段階の層準と判断される。また、複数層位に細分が可能であるが、間層に顕著な自然堆積層を介しないことから、水田面としての検出は行えなかった。また、この耕作土は、当初の流路層を越えて見られることから、水田化が行われるにあたって肩部の堆積層を攪拌していることが想定される。事実、西西部の検出面下位に含まれていた旧石器から縄文期の所産と考えられる石器群の出土も見られた。

22～30は上層出土遺物、31～36は中層出土遺物、37～43は下層出土遺物である。

22は須恵器蓋の握み部小片。23は須恵器蓋口縁部である。25は須恵器甕の口縁部。26は須恵器杯の口縁部であるが、内外面に顕著な火傷を認める。28,29は口縁端部を軽く握み上げる土師器甕口縁の小片である。27は外面にカキ目をもつ須恵器壺の胴部片、30は須恵器甕の胴部片であり、外面に縦格子タタキ、内面に青海波紋が見られる。

31,32は端部が僅かに折り返される須恵器蓋の口縁部である。33は須恵器皿の底部片。34は短く直立する口縁部をもつ須恵器短頸壺である。35は土師器甕口縁部、36は土師器甕の銜部の小片である。

37は握み部が残存する須恵器蓋の天井部片である。38～41は須恵器杯底部であり、40には矮小な高台が立ち上がりにはば接して施される。42は内面に絞り痕を留める須恵器長頸壺の頸部片。43は須恵器甕の胴部片である。

下層から上層出土遺物の年代は、8c中葉を中心とし、上層出土の火傷痕が顕著に見られる須恵器杯26が9cに下る様相を見せている。これらの出土遺物から本旧河道は、8c中葉に埋没が開始され9c前半頃には埋没が完了したものと推定される。水田として利用された期間は不明確ながら、上層の上位より20の黒色土器の高台片が出土していることから、少なくとも12cまでは耕地利用されたことが推定される。

3. 下層遺構

調査方法

予備調査の段階で、下層にナイフ形石器を含む遺物包含層が存在することは判明していた。調査を行うにあたって2mメッシュのグリッド設定をまず行い、調査区全体の石器群の分布状況を確認するために、広範囲に2m四方のト

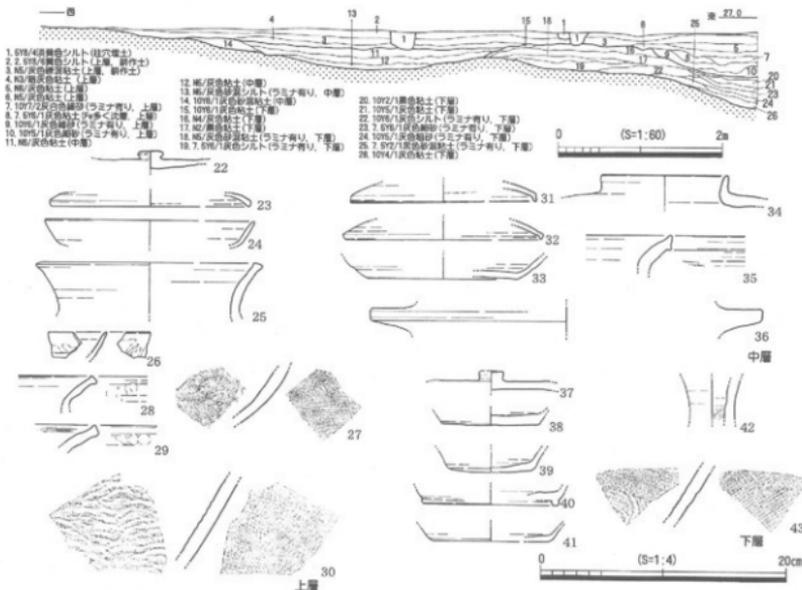


図12 SR01土層断面及び出土遺物

レンチを掘り下げ、調査範囲の設定を行った(図14参照)。その結果、調査区南部に石器群の出土が見られないことを確認した後、北半部を中心に遺物包含層の下位に見られる基底礫層である11層まで掘り下げを実施することとした。調査区北西部では、基底礫層上位に位置し、遺物包含層の下位に見られる茶褐色系粘土層まで(10層)掘り下げを行なっているが、茶褐色系粘土中からは遺物の出土は見られない。また、微小な石片も回収することを目的として、水洗選別を掘り下げと同時に並行で実施した。

層位関係と遺物の分布状況

厳密に調査区全域に共通する訳ではないが、面的な掘り下げに先立って層序対比を行っている。ここでは、遺物の出土が認められる層位に対して下層包含層という名称を用い、1から3に区別して説明する。

最上層の下層包含層1は、マンガング粒の沈着が激しい黄灰色シルト層であり、下層のb層と比較して粘性及び締りがない点で区別しているが、下層包含層2との層界は漸移的である。下層包含層2は、灰色粘土層であり、上層の影響と考えられる鉄分が多く見られ、かなり均質な粘土層として分層した。また、北壁で行った火山灰抽出分析では、本層上面には鬼界アコホヤ火山灰と考えられる火山ガラスを含むが、下位では給良丹沢火山灰のみ確認され、僅かながらピーク層が認められる。また、下層包含層1を除去した段階で2基の土坑を検出している(SK01.02)。時期決定に耐えられるようなものではないが、SK01には土器片が含まれること、SK02から小形の凹基式無茎式石鏃が出土したことから、縄文期の所産と考えられる。断面観察を慎重に行ったが、a層中からの掘り込みは確認できなかったことから、下層包含層1に縄文期の遺物が見られたことと合わせて、下層包含層2上面が縄文期の遺構面と想定

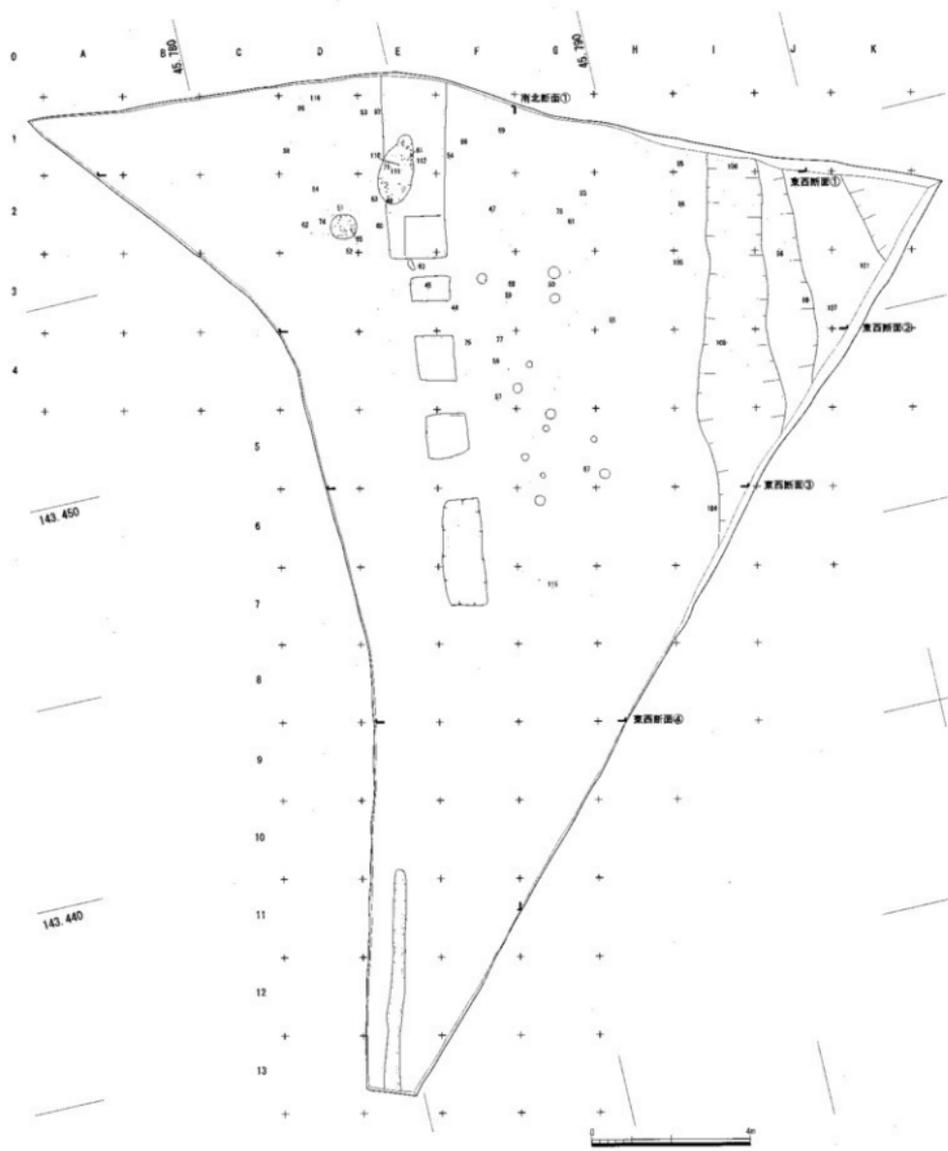


图 13 下層石器分布



図 14 下層調査範囲

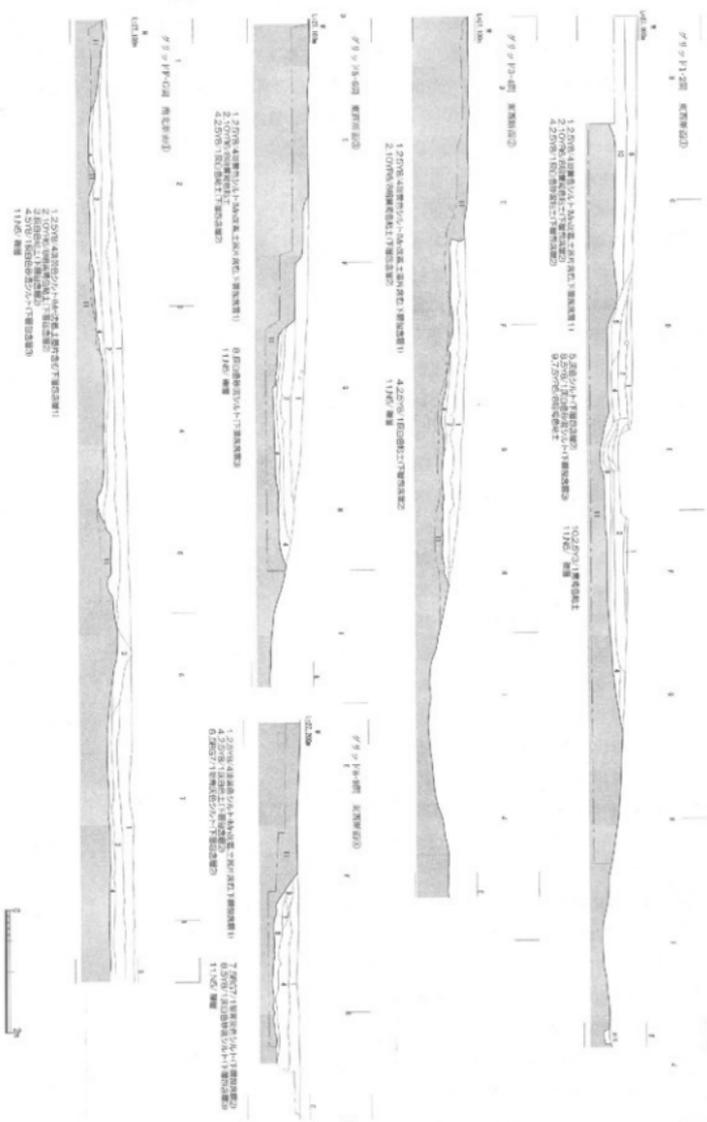


図 15 下層包圍層断面

する。下層包含層3は、細砂が多く含まれる灰色シルトであり、最下層の礫層の窪んだ箇所部分的に見られる。本層にもAT火山ガラスが確認されるが、先の下層包含層2下位のピークに比べ小數に留まる。

遺物の出土は、3層に跨って確認されたが、そのピークが見られるのは下層包含層1にあり、下位に移るに従って散漫になる傾向がある。下層包含層1では、旧石器に混在して縄文期の所産と考えられる小形の凹基無茎式石鏃と、縄文土器と考えられる焼成不良の土器片が出土する。下層包含層1の遺物の大半は、5mm以下の石片であることから、縄文期以降の石鏃製作に伴うものと考えたい。下層包含層2は、旧石器の遺物で占められるが遺物量は少なく、堆積過程において下層包含層1にかなり移動した遺物が多いと考えられる。

また、火山灰分析で下層包含層2の上位に鬼界アカホヤ火山灰の二次堆積と考えられるピークが認められている。上層である下層包含層1との層界が漸移的であったことから、調査段階の分層ミスの可能性が高い。平面・垂直分布においてD2、E3グリッドに遺物の集中が見られるが、この部分がSK 01.02に対応する部分である。

次に平面的な広がりを見てみよう。図18には、層位関係を考慮せずに、旧石器の出土位置を示したものである。

この分布図を見ると、接合資料は見られないものの、直径10m程度の範囲に限定して分布していることがうかがえ、石器群の一括性を疑するものではないと考えられる。層位的には不安定であるが、平面分布からはかなりまとまった出土状況を保っていると言える。また、石核の分布状況を見ると、一箇所に分布せず全体的に出土していることから、この集中域内部を細分することは現時点では困難と言える。

下層の微地形と堆積環境

図17には、基底礫層である11層上面の10cm等高線を表現したものである。調査区北半部のみ作成に留まっているが、礫層上面は南西から北東に向けて緩やかに傾斜するとともに、EからFライン付近で微凹地状を呈した状況がうかがえる。第二章で検討したように微高地の縁辺部の様相を呈している。一見、石器群はこうした緩斜面に二次堆積したよう



図16 下層包含層石器分布(垂直)

に見えるが、集中が認められる下層包含層2が堆積した段階には、微高地上面の埋積が進み凹地はある程度平坦化した状況下にあることから、大きく移動を受けたものではないと想定される。また、各層が概ね水平堆積するとともに、粗砂を多く混じえないことから、比較的に穏やかな埋没環境を想定できよう。

出土遺物

先に見たように、旧石器と縄文期の遺物群を層位的に区別できない状況下にあることから、層位関係を無視して時期別に分けて提示するが、剥片類に関しては時間的に下る可能性を否定できない。

ナイフ形石器

ナイフ形石器は合計7点確認しており、いずれも一側縁加工のもので占められる。44はF3区画a層から出土した一

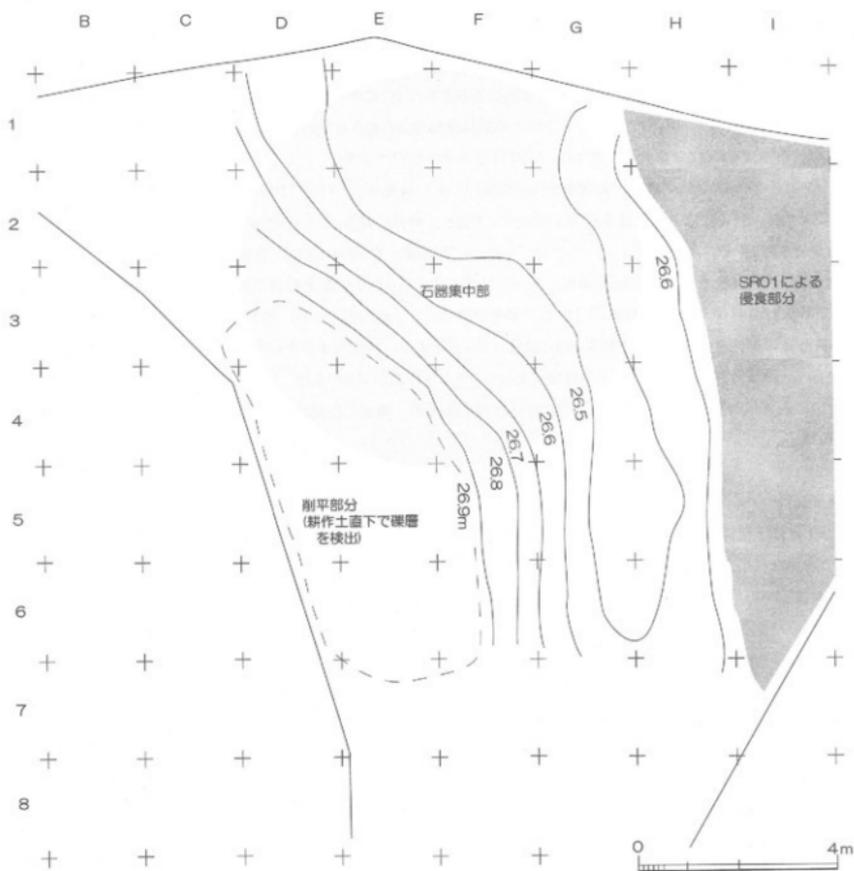


図 17 旧石器出土分布

側縁加工のナイフ形石器である。背部のブランディング途中で折損した基部片と考えられ、普通サヌカイトを素材とする。背部には主要剥離面側からの丁寧なブランディングが認められる。表面側に残るネガ面は、現状では先行剥離面かどうか判断できない。先行剥離面とすると、交互剥離によって得られた横長剥片を素材としていることになる。45は予備調査トレンチのa層から出土した一側縁加工の国府型ナイフ形石器である。ポジティブな底面と先行剥離面であるネガティブ面を背面にもつことから、翼状剥片と素材とするものと考えられる。背部の細かなブランディングはすべて主要剥離面側から行われている。石材は普通サヌカイト。46は、G3区画a層から出土したナイフ形石器基部片である。背面には石核底面と考えられるポジティブ面と、先行剥離面と考えられるネガティブ面の2面から構成されることから、翼状剥片を素材とするものと思われる。また、石核底面エッジには微細な剥離痕が見られるが、加工を意図したものではなく使用痕に近い。背部のブランディングはすべて主要剥離面側から施される。石材は白色風化サヌカイトである。

47はF2区画a層から出土した一側縁加工のナイフ形石器である。横長剥片を素材とし、背面は一枚のネガティブ面から構成されている。背部のブランディングは主要剥離面側から行われている。石材は白色風化サヌカイトを用いる。48は縄文期の土坑であるSK02に混入した状態で出土したナイフ形石器である。断面はやや肉厚の台形を呈し、主要剥離面は1枚のポジティブ面、背面は刃縁に接する1枚のポジティブ面と、それを切る形で2枚のネガティブ面から構成される。背部のブランディングは主要剥離面側から施されているが、先の背面の2枚のネガ面が先行剥離面に相当するかどうかは判断できない。石材は普通サヌカイトである。

49はG2区画b層から出土した横長剥片を素材とした一側縁加工のナイフ形石器である。主要剥離面は1枚のポジティブ面、背面には刃縁に接する1枚のポジティブ面と、背部に残るブランディングと比較してやや大きな3枚のネガ面が残されている。背部のブランディングは、入念に主要剥離面側からのもので、基部から先端部に向かって施される。加工途中で折損したものと考えられるが、刃部には使用痕と見られる微細剥離痕が観察される。石材は普通サヌカイトである。50はG3区画a層から出土した一側縁加工のナイフ形石器である。瀬戸内技法を用い石理に沿って剥がされた翼状剥片を素材とし、主要剥離面は1枚のポジティブ面、背面はポジティブ面である底面と先行剥離面が残される。一部底面には、比較的新しい段階に生じた小さなネガ面が見られるが、加工と意図したものではなく使用痕に近い。基部には主要剥離面側からのブランディングは及ばず、礫面(自然面)が残される。石材は普通サヌカイトを用いる。

翼状剥片

51はD2区画a層から出土した小形の翼状剥片である。比較的小形ながらも山形に調整された打面部を介してポジティブなバルブとネガティブなバルブが見られるが、石核底面は取り込めていない。また、刃部の上端には、自然面が見られる。翼状剥片としては小形であるが、完成品としてのナイフ形石器に、44.46などの比較的小形と推定されるものが見られることから、法定的にもナイフ形石器製作と意図したものと考えられる。石材は普通サヌカイトである。

52はD2区画a層から出土した翼状剥片である。打面は山形に調整されているが、打点が右側へ寄ったせいか、不均整な形態をもつ。この状況は、背面の下方にゆくにつれて幅広になる底面にも見ることができる。底面に接した縁辺には、微細剥離痕が連続して見られる。石材は普通サヌカイトである。53はE1区画b層下位より出土した翼状剥片である。背面は辛うじて付着し底面と見られる1枚のネガ面とこれを切る3枚のネガ面から構成される。底面を除く3枚のネガ面の内、打面部を介して主要剥離面とほぼ同じ位置にネガティブなバルブをとどめる剥離面は先行剥離面の可能性が考えられるが、これに切られる2枚のネガ面は、リングが終息する気配を見せないことから、さらに先行する段階の翼状剥片を剥離したネガ面である可能性が高い。また、本遺跡出土のナイフ形石器・翼状剥片にはポジティブな底面をもつものが多いことから、本翼状剥片は異質な存在である。54はF1区画b層から出土した翼状

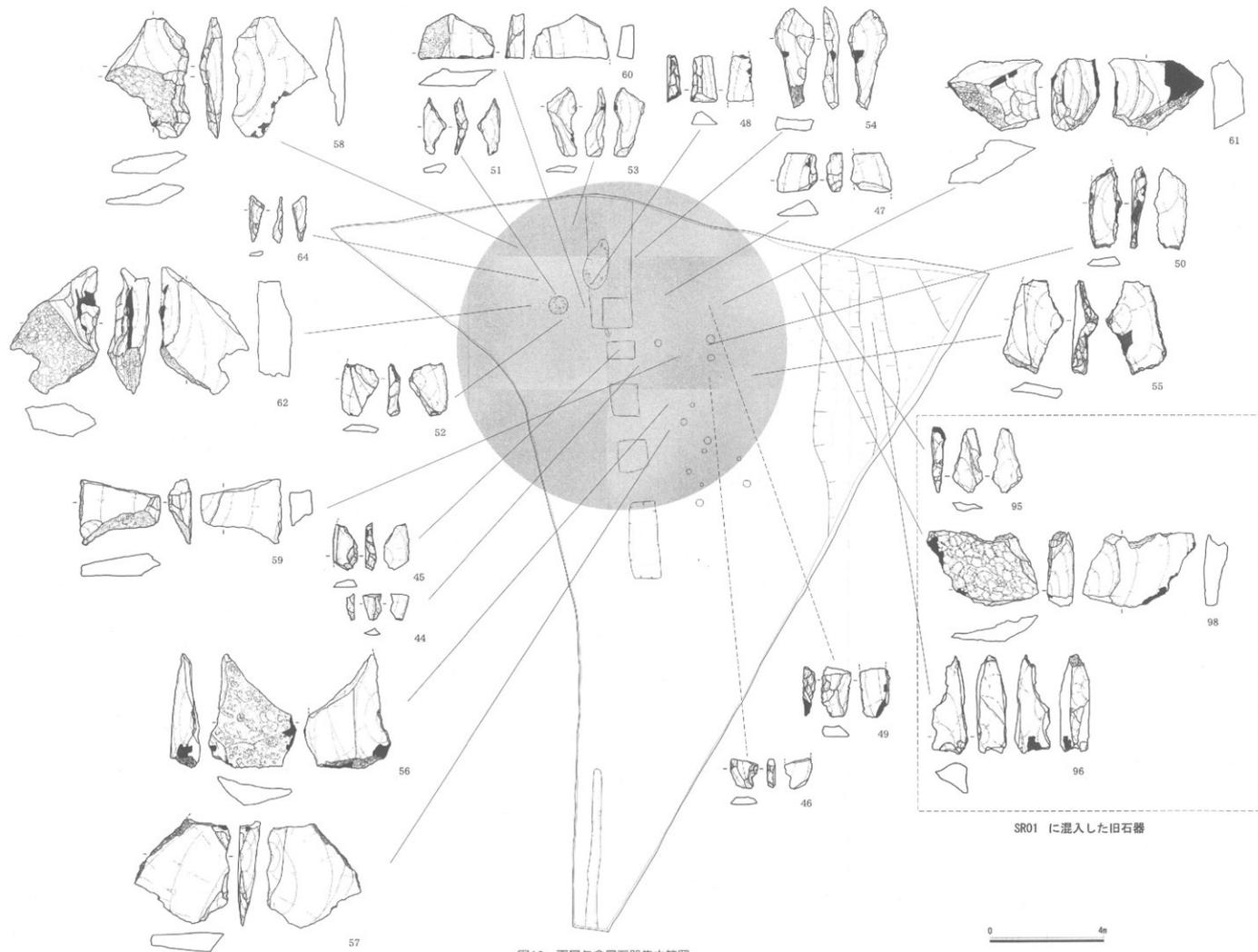


図18 下層包含層石器集中範囲

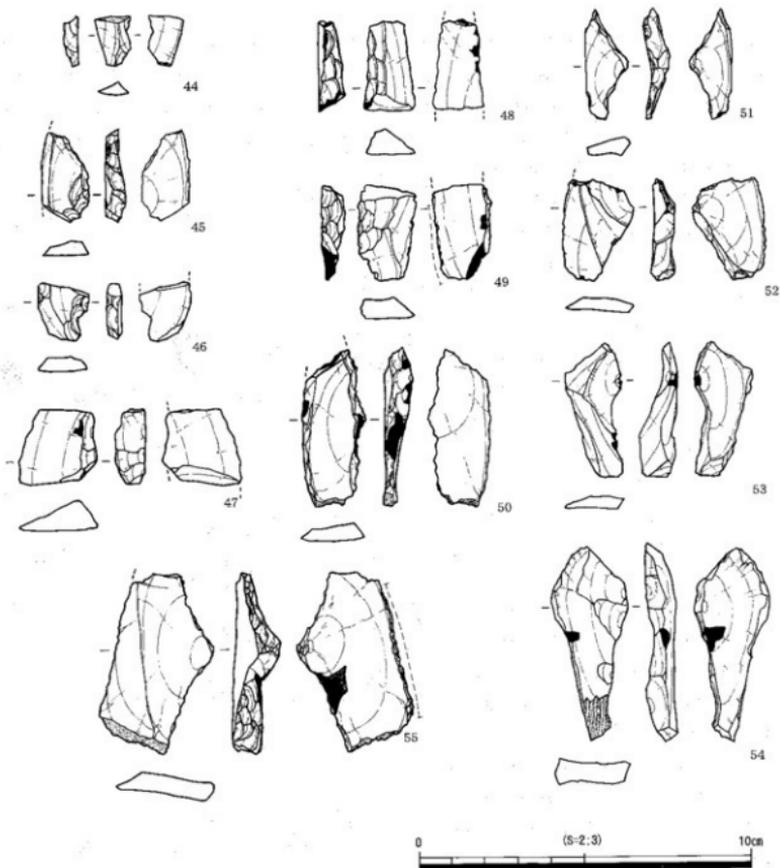


図19 ナイフ型石器及び翼状剥片

剥片である。石理にはほぼ直交する形で剥離されており、底面は取り込めていない。背面側には複数のネガ面が見られ、先行剥離面と考えられない小さなものも含まれる。打面の頂部には複数の打撃痕が見られる。また、背面の下部には自然面が残存している。石材は普通サヌカイト。55はH3区画b層から出土した翼状剥片である。石理に沿って剥がされた普通サヌカイトを素材とする。打面は上下端を中心に細かな打面調整が施され山形を呈する。背面にはポジティブな底面が付着するが、52と同様打点がずれたせいか、下方が幅広になるものである。下端には自然面を大きく残し、底面に接した縁辺に連続する微細剥離痕が顕著に見られる。石材は普通サヌカイト。

翼状剥片石核

56はF4区画a層から出土した翼状剥片石核である。上面の大半は自然面によって覆われ、a面右辺の上下に2回の打面調整痕が見られるが、中央や右下寄りの自然面を打撃し翼状剥片を剥取している。作業面から復元して、

幅 5.1 cm 長さ 6 cm 以上の翼状剥片が得られたものと見られるが、図下方の側面が自然面であることから、必ずしも左右均等なものではないことが推定される。本石核からは復元される剥離角は 141° である。下面は1枚のポジティブ面から構成される。石材は普通サヌカイト。57はF4区画b層から出土した翼状剥片石核である。打面部には合計5枚の打面調整が確認でき、これらは側面部を中心に施される。打点は、上面のネガ面に設定されており、石核幅にほぼ一致する翼状剥片を剥離する。本石核から復元される剥離角は 125° である。末端部には自然面を残し、底面は1枚のポジティブ面であり、石材は普通サヌカイトを用いる。58はD1区画a層から出土した翼状剥片石核である。平面形が二等辺三角形を呈し、上面であるa面下半に自然面を多く残す。打面には10枚ほどの調整痕が見られ、山形に仕上げられた頂部を打撃し、翼状剥片を剥取している。復元される剥離角は 124° である。下面は1枚のポジティブ面からなり、石材は普通サヌカイトを用いる。59はF3区画a層から出土した翼状剥片石核である。翼状剥片を剥取した際に打点部付近から同時折れを起こしたものと見られる。側面と末端に自然面を残し、石材は普通サヌカイトが用いられている。60はE2区画a層から出土した翼状剥片石核である。翼状剥片剥取時に打点部付近で半折しているが、現状で打面調整は側面よりの部分を中心として2枚確認できる。主として上面は、大きな1枚のネガ面であり、末端寄りには自然面を多く残す。下面は1枚のポジティブ面である。石材は普通サヌカイトである。61はG2区画b層より出土した翼状剥片石核である。本遺跡出土の同石核の中では肉厚である。上面に大きめの4枚の打面調整が見られ、末端部付近には自然面を残す。打点部は発掘時の折損に失われているが、打面部のほぼ中央を打撃し、翼状剥片を得たものと見られるが、石核自体がほぼ石理に沿って剥離されており、石核下面と作業面がほぼ平行する形となっている。石材は普通サヌカイトである。62はD2区画a層から出土した翼状剥片石核である。片方の側面と上面の末端付近に自然面をとどめ、打面部には8枚の調整剥離が施される。打点は発掘時の折損によって失われているが、復元される翼状剥片の剥離角は $102 \sim 122$ 度である。石材は普通サヌカイト。

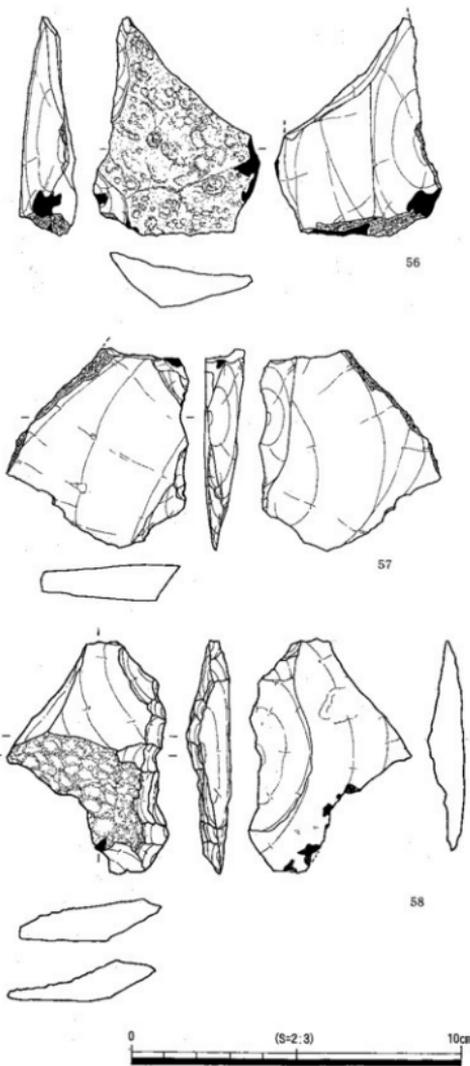


図20 翼状剥片石核 その1

挿入石器

63は自然面を多く残す背面の右側縁に幅9mmのノッチを施す挿入石器である。石材は普通サヌカイト。

剥片

64.65は、背面側にブランディングと考えられる急角度の調整痕を残す剥片である。本遺跡出土の石器群の様相から、ナイフ形石器の加工に伴うブランディングチップと考えられる。64はD2区画a層、65は縄文期の土坑であるSK 01下層に混入した状態で出土した。ともに石材は普通サヌカイトである。

66.67は剥片類であるが、上位の下層包含層1と層位的に分離できないことから、縄文期のものを含む可能性がある。66.68は目的剥片の可能性はあるが、他のものは小形であることや無打面に近いものが多く、調整剥片と考えられる。また、71.80.86.87のように背面側に自然面を留めるものに関しては、本遺跡出土の翼状剥片石核の上面に自然面を多く残すことを考慮すれば、同石核の打面調整に伴うものの可能性が高い。69は、下縁に使用痕と考えられる微細剥離痕が見られる。

92は打点部付近の中央で半折した横長剥片であり、二次加工が見られる。また主要剥離面に切られるC面の剥離痕を打面調整と判断すれば、翼状剥片を素材としたものとも推定できる。94は末端と側面に自然面を残すことや、厚みや平面形から翼状剥片石核の残核である可能性が高い。石材は普通サヌカイトである。

SR 01に混入した石器群

前述の通り、SR 01埋没後に上層

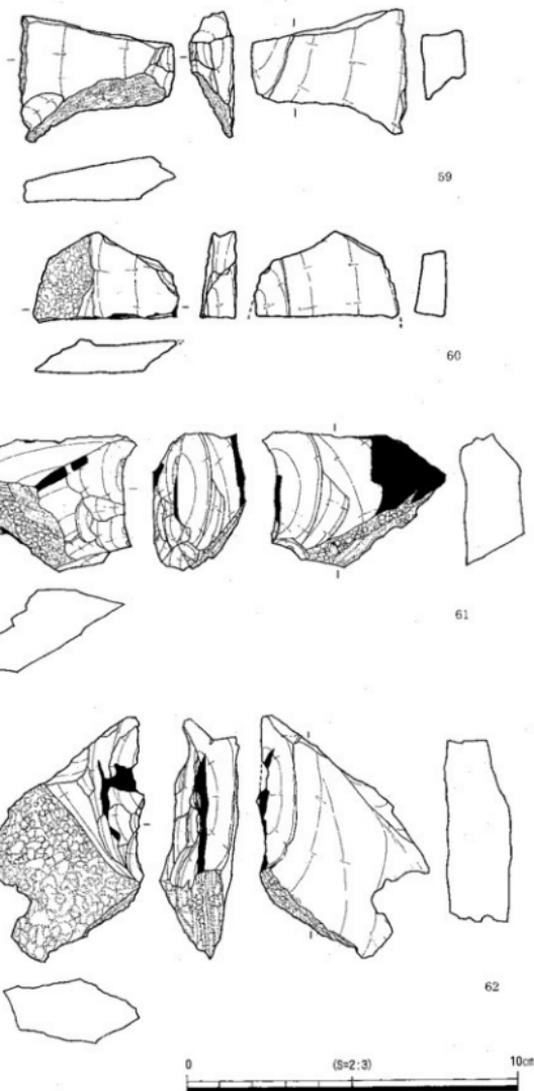


図21 翼状剥片石核 その2

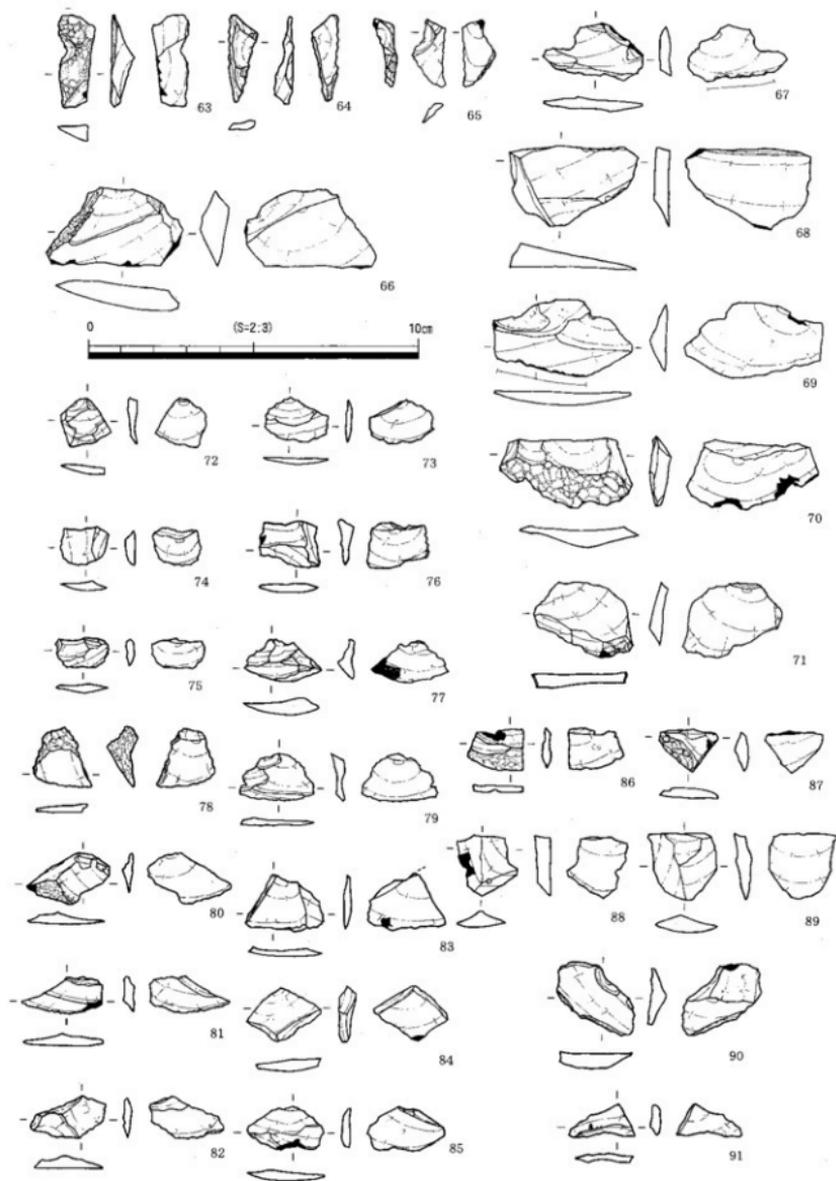


図22 剥片類 その1

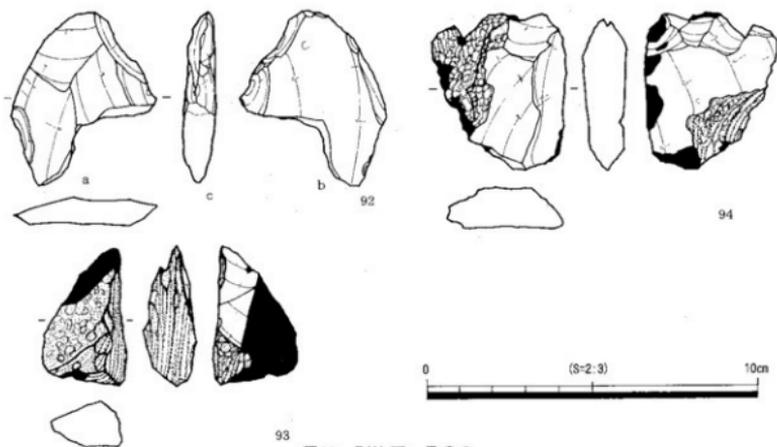


図23 剥片類 その2

が耕作地として利用されており、95～108はその際に下層の遺物包含層であるa、b層の遺物が取り込まれる形で出土した一群である。旧石器と縄文期のものが混在するが、一括して提示している。

95は白色風化サヌカイトを素材とする翼状剥片である。打面部は5枚の剥離痕が見られその頂部を打撃している。背面にやや幅広いの底面が付着し、剥離角は 120° を測る。96は石理のきつい普通サヌカイトを素材とする。背面の石核底面に相当する面に盤状剥片を剥離した打撃痕を留めることから、ファーストブレイクと考えられる。97は普通サヌカイトを素材とする横長剥片であるが、加工は行われていない。98は普通サヌカイトを素材とする翼状剥片石核である。翼状剥片を剥離する際の打点部を中心として半折しているが、下面は1枚のボジ面、上面と一側面は自然面で覆われる。打面部の調整は、側面寄りに2枚確認でき、山形となった頂部を打撃している。現状で復元される翼状剥片の剥離角は 133° である。99は白色風化サヌカイトを素材とする横長剥片であり、一側面に自然面を留める。

105は凹基無茎式石鏃である。本地域の石鏃の編年は未確立であるが、法量や入念な調整から縄文期の所産と考えられる。106は基部の背面側に自然面を多く残す石鏃である。107は主要剥離面側の周囲から細かな加工が施されることから、石鏃の製作途上品である可能性がある。108はスクレイパーである。

SK 01

D2区画X=143.455 Y=45.783付近において検出した土坑である。検出面で直径0.7m程の円形を呈し、残存深度0.8m程を測る。断面系はU字形であり、一部オーバーハングする箇所が見受けられる。旧石器・縄文期の遺物が混在する下層包含層1を除去した段階で検出しており、上層の埋没土は下層包含層1である黄灰色シルトに酷似していた。遺物は中層から上層にかけて集中し、検出面より上位にも集中が見られるが、その多くは5mm四方以下のサヌカイトの石片である。また、ブランディングチップと考えられる65も見られ、旧石器の遺物も混在する様相にある。中層から109は縄文土器深鉢が出土しているが、詳細な時期決定に耐えられるものではない。ここでは放射性炭素年代測定の結果(本章第4節参照)を援用し、縄文晩期の所産と考えたい。

SK 02

E2区画X=143.456 Y=45.785付近で検出した土坑である。長軸1.8m短軸0.9m程のやや歪な楕円形を

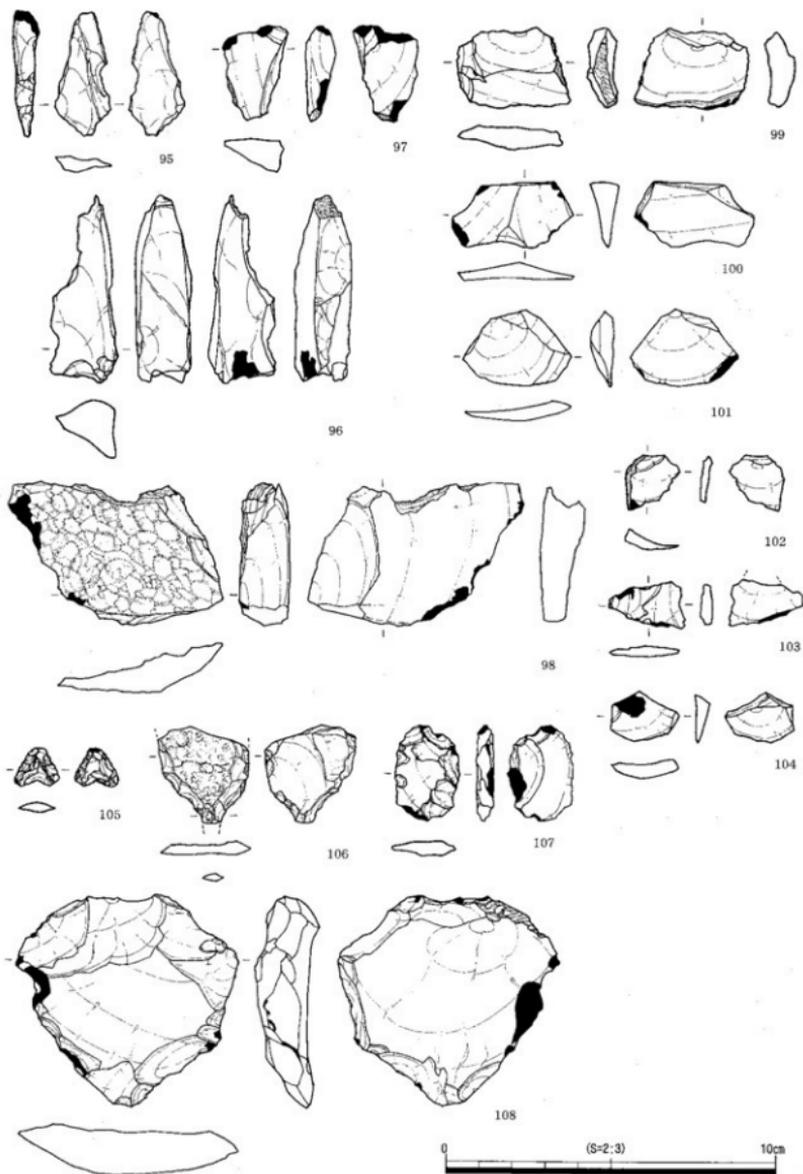


図24 SR01に混入した石器

呈し、残存深度は0.4m程を測る。SK 01と同様に、下層包含層1を除去した段階で検出している。出土遺物には、110の凹基無茎式石鏃のほか、111.112などのサヌカイト製の剥片がある。時期決定可能な出土遺物は見られないが、検出面の状況やSK 01と同様に放射性炭素年代測定の結果を参考にして、縄文晩期の所産と考える。

その他縄文期の遺物

先に述べたように、下層包含層1からは旧石器・縄文期の遺物が混在して見出されている。ここで提示するのは、明らかに縄文期の所産と推定されるものである。

113はサヌカイト製の小型の凹基無茎式石鏃である。G 2区画のa層を水洗選別中に出土している。114はF 6区画a層の水洗選別中に出土したサヌカイト製の凹基無茎式石鏃である。113よりやや厚手であるが、胴周囲に両面から細かな加工が施されている。115はG 7区画a層から出土しており、一側縁は折れ面が残されているが、それ以外の部分は両側から加工されていることと、法量的な点から石鏃の製作途上品である可能性が高い。116は上下縁に階段状剥離が見られる楔形石器の削片であり、b面左側面の上方面からの打撃によって折損している。

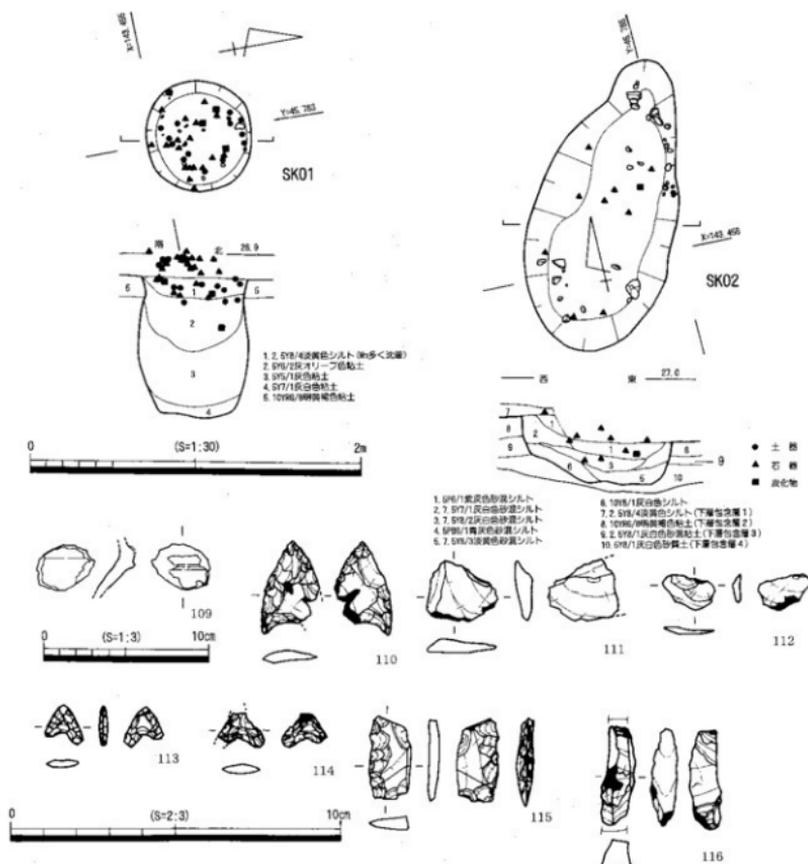


図25 SK01、02平・断面、出土遺物及びa層出土の縄文期遺物

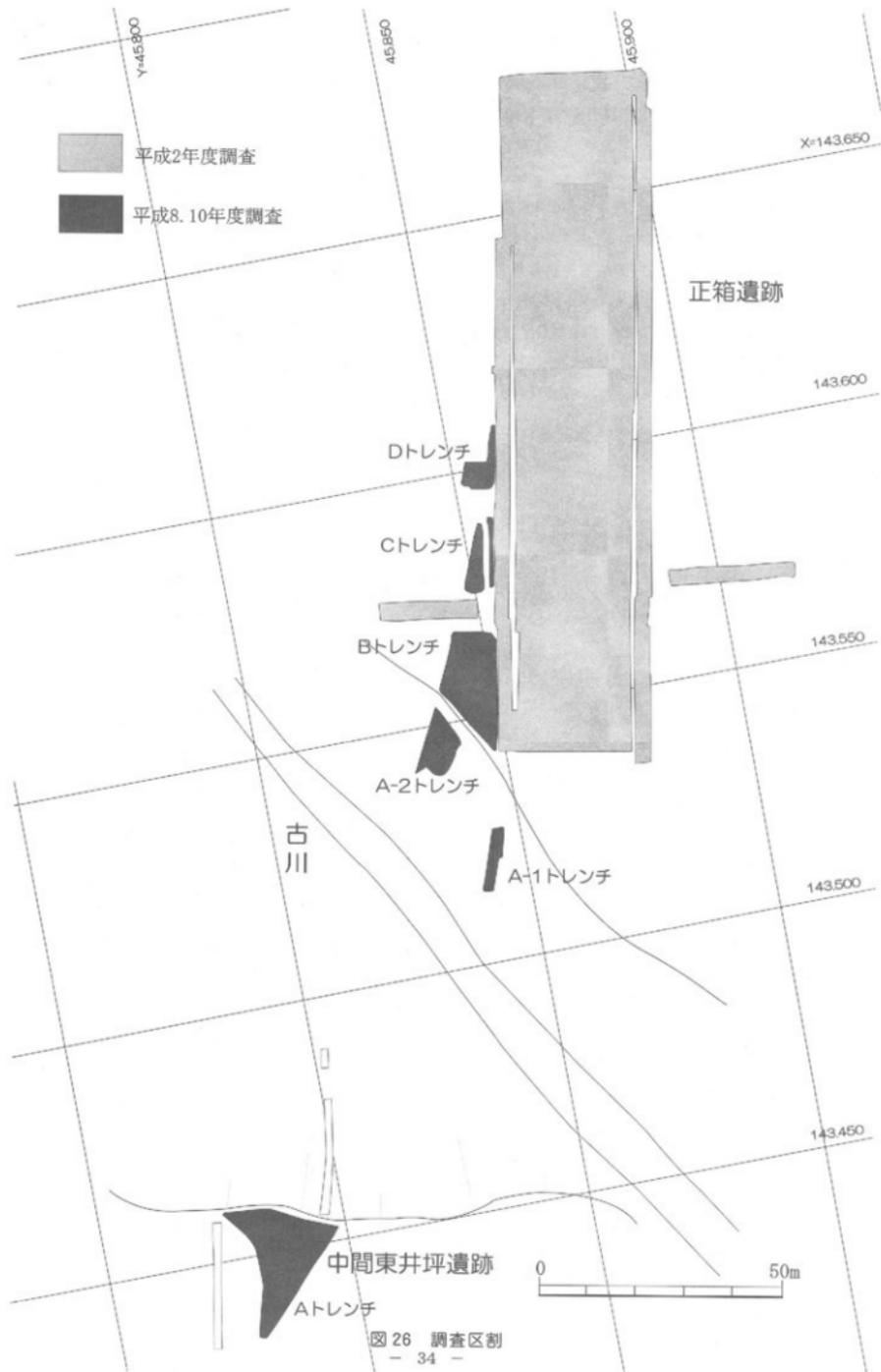


図26 調査区割
- 34 -

第2節 正箱遺跡

1. 調査方法

調査地は、既に平成2,3年度に県道山崎御殿線道路改良工事に先立ち、香川県文化行政課とセンターによって調査を実施したI区に隣接する部分に相当することから、予備調査を実施せず全面発掘から開始した。作業ヤードの確保と調査地の状況から、都合上A～D地区のトレンチを設定した。A地区に関しては、現状の地形や平成8年度の間東井坪遺跡の調査成果から、現氾濫原面に相当する可能性が高いことが予測された。2本のトレンチを先行して調査したところ、氾濫原面であることが確認されたことから、堆積状況と遺物の回収を実施し、部分的な調査で終了した。

BトレンチからDトレンチの段丘上では、既往の調査で確認された古代期の集落遺構をつづいて確認するとともに、下層から弥生中期初頭の落ち込みや流路、小規模な石器群の出土を確認した。

2. 堆積状況

A-2トレンチ西壁

本トレンチは現氾濫原面に位置する。現水田耕土及び床土より下位は、ラミナの発達が顕著に認められる砂層であり、2m程掘削したが安定した基盤層は確認できない。氾濫原面形成後の複数の旧河道が重複している状態と考えられる。中位の砂層より、須恵器杯(117)、肥前系磁器碗(118)が出土している。

Bトレンチ西壁

断面図は、古代期の遺構検出面より下位の層準において作成している。本トレンチは、段丘上に位置し、主に7層とした砂質土上面で古代以降の遺構を検出した。トレンチ北半部では、本層が傾斜する状況が確認され、この部分に

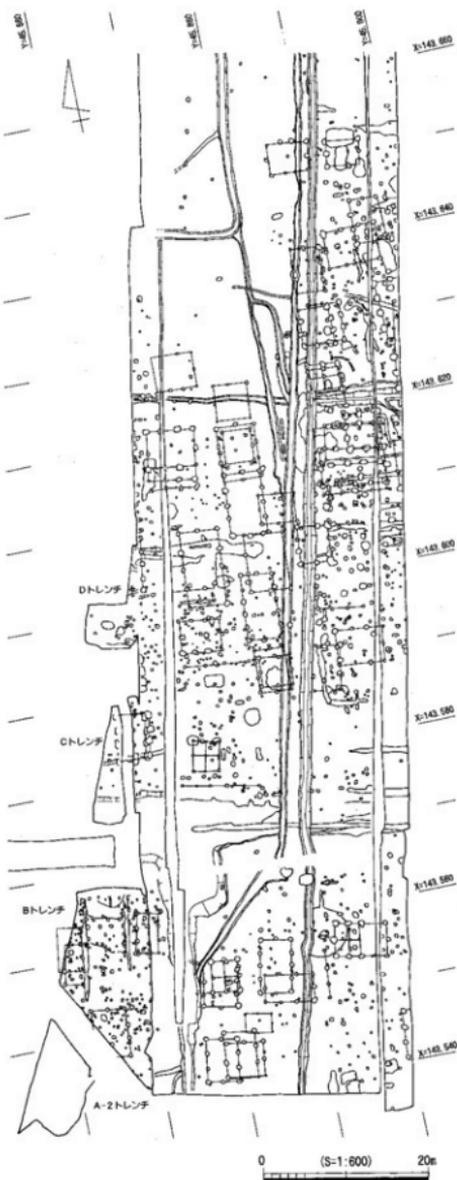


図27 遺構配置 その1

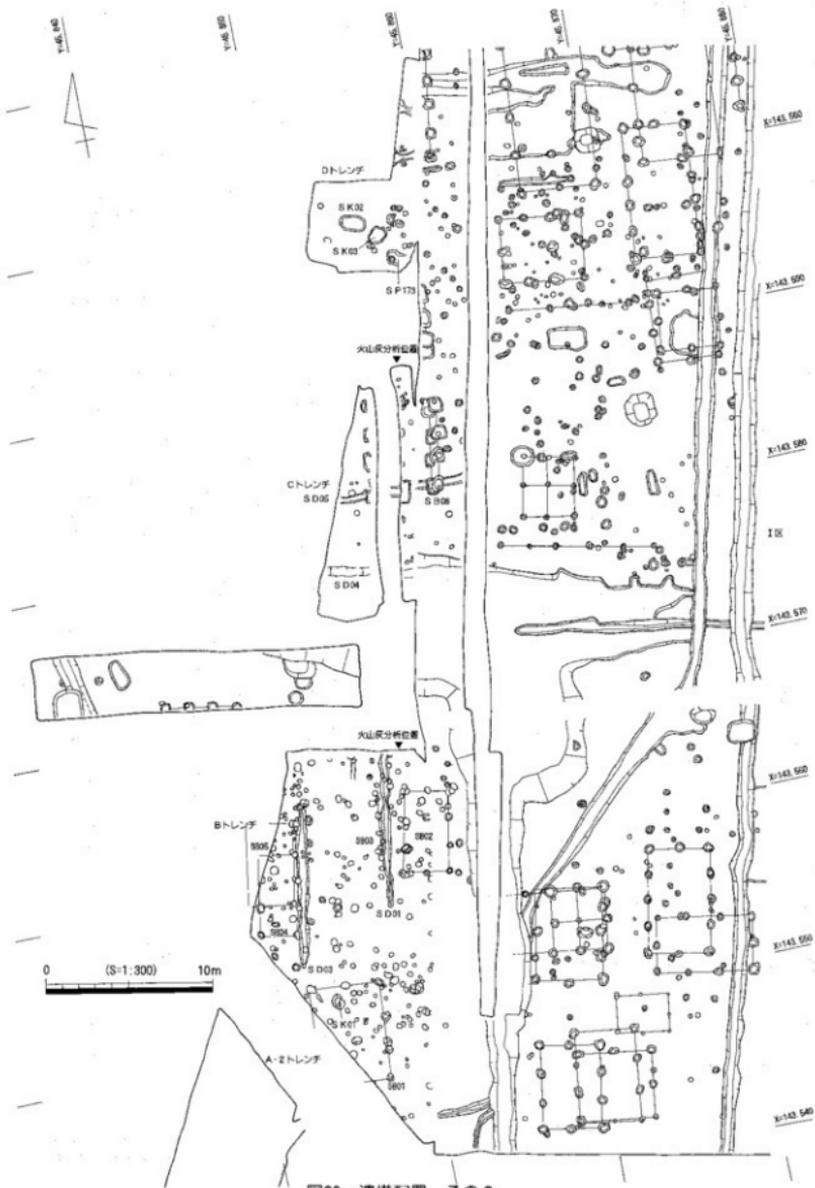


図28 遺構配置 その2

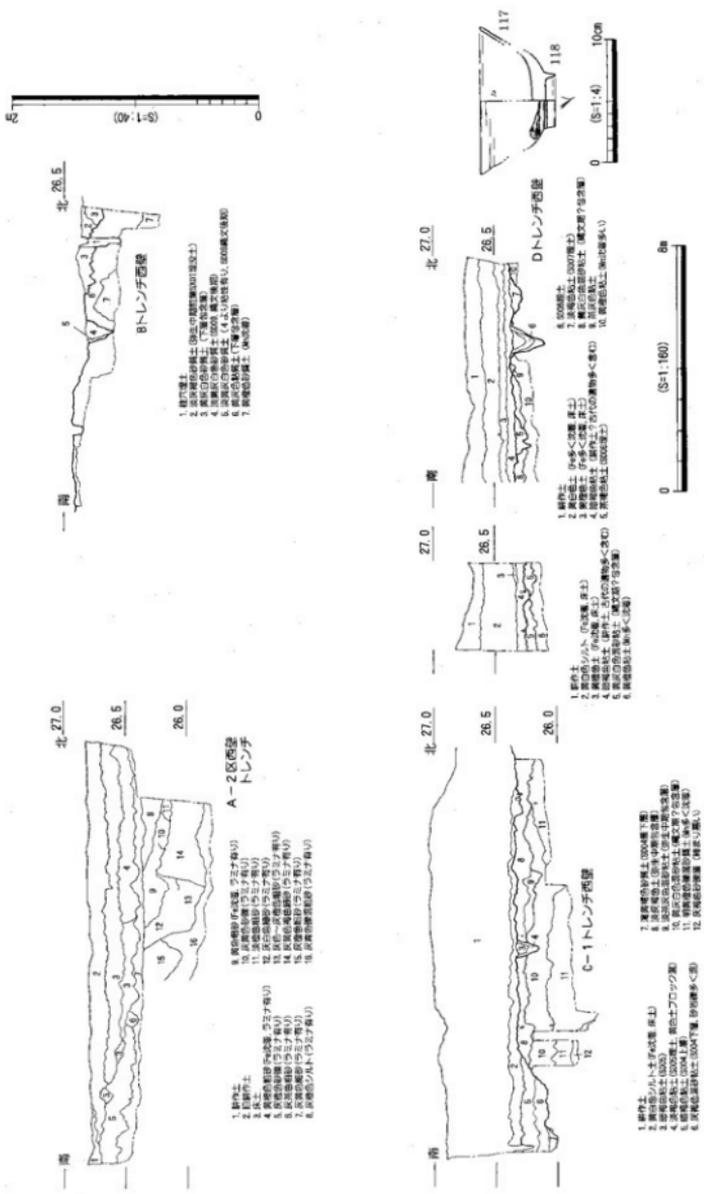


図29 土層断面

は旧石器から縄文期の石器群が散発的に見られた。2層は弥生中期前葉段階の落ち込みであり、4.5層は縄文後期の自然流路であるSD 09の埋没土である。これらの遺物から見て、少なくとも弥生中期前葉までは、一定程度の堆積を被る不安定な環境下にあったと考えられる。段丘崖の存在するトレンチ南部において、古代遺構の分布が終息する気配を見せないことから、古代以降に段丘崖が形成され完全に離水した状況が想定できる。

C-1 トレンチ西壁

本トレンチは段丘上に位置する。基本的な堆積状況はBトレンチと同様であり、8層上面において古代以降の遺構を検出し、8.9層には弥生中期前葉段階の遺物が含まれる。段丘は主として8～11層とした離水の進んだ黄色系の中流砂～粘土から構成されており、本トレンチでは最下層において砂礫層(12層)を確認している。中間東井坪遺跡で見られた礫層とは違い締まりが悪いことから、基底礫層とは考えられない。火山灰抽出分析では、8～11層すべてにおいて給良Tn・鬼界アカホヤ火山ガラスの混在が確認されていることから、広義の基底礫層と認定できない。

Dトレンチ西壁

基本的な堆積状況はB、Cトレンチと同様である。古代以降の遺構は5.8層上面で検出している。本トレンチでも、検出面下位の段丘上位層から遺物の出土が見られたが、B、Cトレンチと比較して少量に留まる。

3. 上層遺構

S B 01

Bトレンチ南西部のX=143.550 Y=45.845付近で検出した2間×3間(4.2×5.8m=24.36㎡)の掘立柱建物であり、南西部は一部調査区外に伸びる。桁行の方向は、座標北から4°東偏する。柱穴の平面形は0.4～0.5m程の歪な隅丸方形または円形を呈する。北東の隅柱であるSP 25には直径0.2m程の柱痕の残存が確認できるが、他の柱穴ではすべて抜き取りが見られる。

遺物は主に抜き取り時の埋土から出土しているが、134の土師器甕片のみがSP 25の裏込土から出土している。119～128は須恵器杯である。124.125は底部に矮小な高台を施す。128の底部外面には明瞭な火褥痕が認められる。129.130は須恵器皿の口縁・底部片。131～133は須恵器甕の小片であり、132は沈線が認められることから頸部片と思われる。135は、SP 06の詰石に転用された砂岩製の砥石である。

SP 25の裏込土から出土した土師器甕の所属時期は明確にできないものの、遺跡全体の遺物主軸の様相から、本建物は9c中葉以降に廃絶したものと推定する。

S B 02

Bトレンチ北東部のX=143.562 Y=45.852付近で検出した2間×3間(2.9×4.8=13.92㎡)の掘立柱建物である。北東隅柱が不確定なものの、遺構配置から既往の調査区であるI区の柱穴と組み合わせることによって掘立柱建物として復元した。桁行の方向は、座標北から11°東へ振ったものであり、遺跡周辺の条里型地割に合致する。

西側の桁行であるSP 49.51.53.56は、ほぼ重複して先行する柱穴が見られることから、建物の一部を改修している可能性がある。柱穴の平面形は0.4m程の円形ないし隅丸方形を呈し統一性が見られない。また、西側の桁行の柱列ではすべてに直径0.2m程の柱痕が遺存していた。

建物の東西両側には、SD 02(西側)SD 12(東側の既往調査分)が桁行に沿って見られ、天落ち溝が建物区画等に伴う施設である可能性が高い。

出土遺物はSP 51から137の須恵器杯底部片 138の須恵器高台杯が、SP 53より136の須恵器杯口縁部、

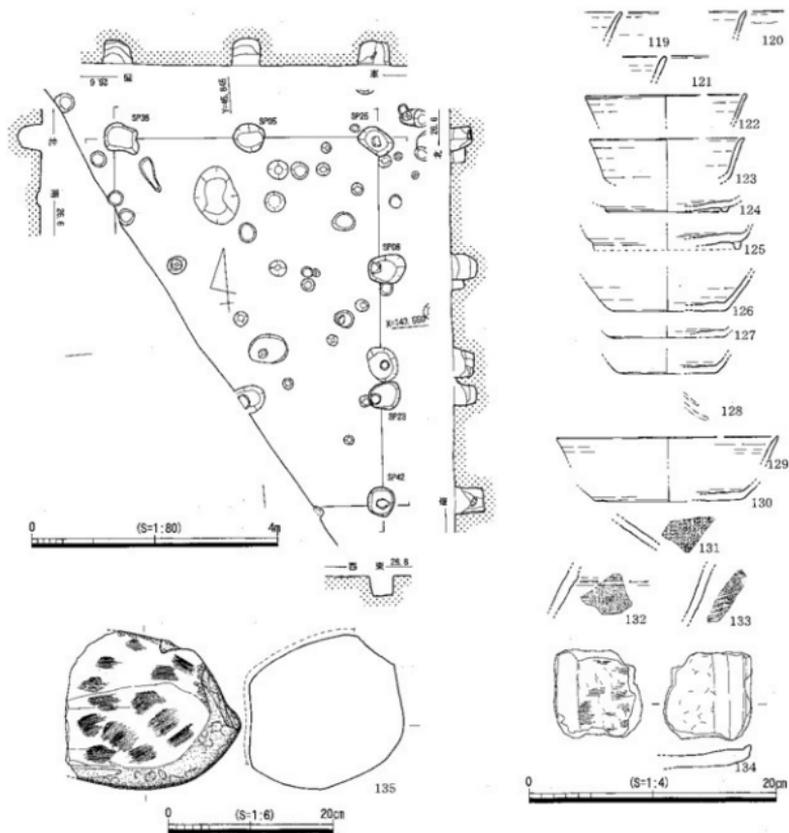


図30 S801平・断面及び出土遺物

139の須恵器長頸壺胴部片が裏込め土から出土している。138の須恵器高台杯の高台の形状や貼り付け位置から、本建物は8c後半を中心に機能したものと考えられる。

SB 03

Bトレンチ北東部のSB 02 西側X= 143.562 Y= 45.850 付近で検出した柱穴列である。桁行と考えられる片側の柱穴列の復元に留まっているが、SB 02に伴う底の可能性も考えられるが、同建物と関連があるSD 02を切る形で検出していることから、別の建物の一部か柵列と考えられる。柱穴列の方向は座標北から7°東へ振ったもので、ほぼ遺跡周辺の条里型地割に合致する。出土遺物はSP 58から141の土師器臈片、SP 60から140の須恵器杯口縁、142の土師器蛸壺頸部片が、SP 61より143の土師器イダコ壺口縁部、144の土師器甕胴部片が裏込め

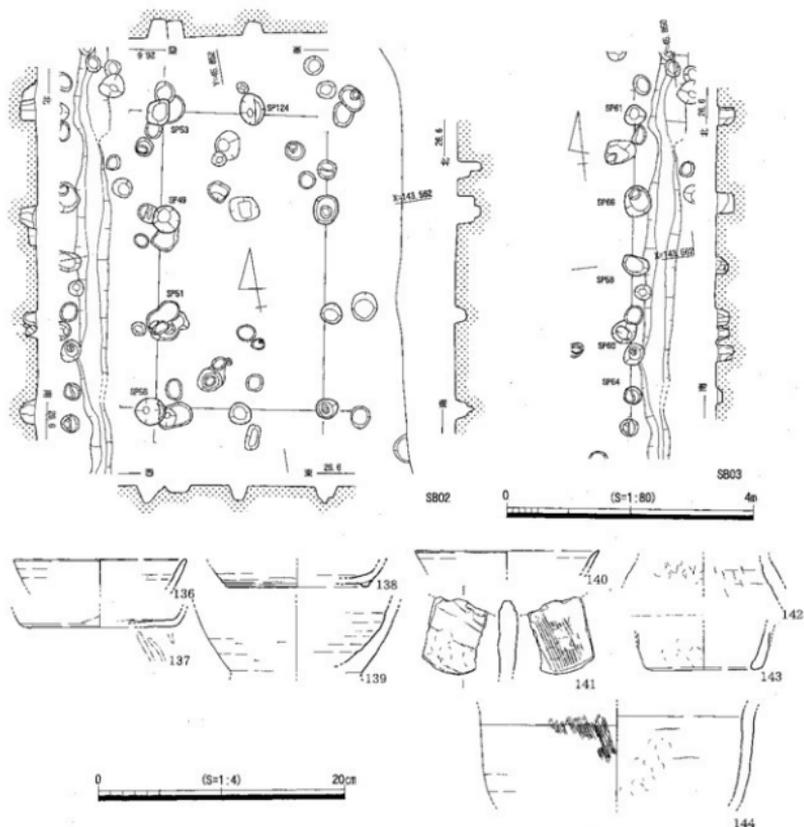


図31 SB02、03平・断面図及び出土遺物

土から出土している。いずれも小片であるが、140の須恵器杯口縁部の形態から、9c中葉以降に廃絶した建物と推定しておきたい。

SB 04

Bトレンチ西半部のX=143.560 Y=45.842付近で検出した1間×3間(2.3×5m=11.5㎡)の掘立柱建物である。桁行の方向は座標北から10°東へ振ったもので、遺跡周辺の条里型地割に合致している。また、西側の桁行の柱六列(SP81～83)と東側の桁行の柱六列(SP79.74～76)とでは柱穴平面形が異なっているが、柱通りや位置関係を重視し、両者を組み合わせて建物として復元した。柱痕はSP82.83.75を除く柱穴において確認しており、直径0.2～0.4m程を測る。

出土遺物はSP81の柱痕から145の須恵器杯口縁部が、SP82より抜き取り時の埋め土から146の須恵器杯口

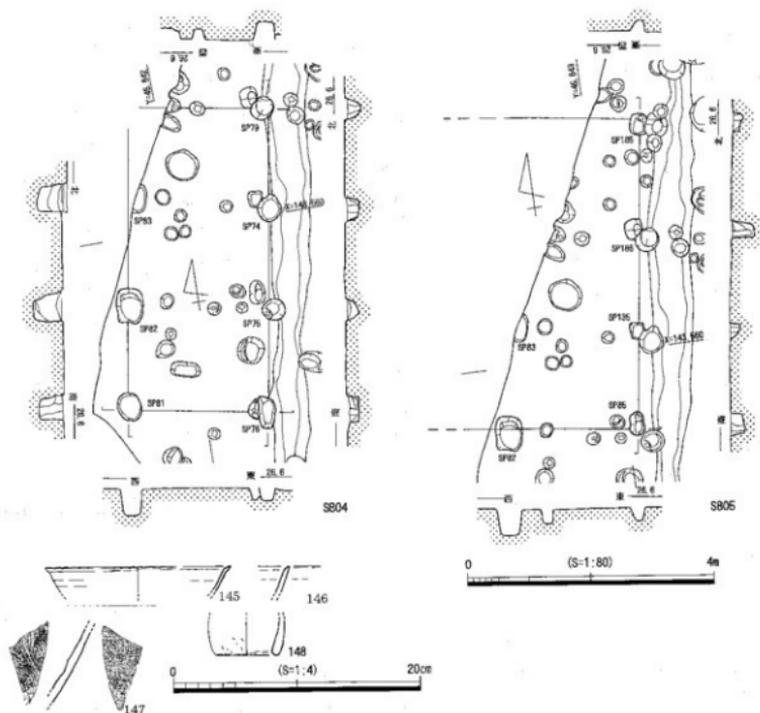


図32 SB04、05平・断面及び出土遺物

縁片、147の須恵器甕胴部片、148の上器器イダゴ壺口縁部が出土している。これらの出土遺物の中で145の須恵器杯口縁部の形態から、本建物が9c前半に廃絶したものと推定しておきたい。

SB 05

Bトレンチ西半部のX=143.560 Y=45.843付近においてSB 04と重複して検出した掘立柱建物である。西側の大半が調査区外へ延びることから、正確な規模は不明であるが、現状で梁間2.4m以上桁行5m程を測る。また、梁間が調査区内で納まらず、西側にさらに延びる可能性も考えられる。建物主軸は、座標北から9°東へ振ったもので、遺跡周辺の条里型地割の方向にほぼ合致する。柱痕は、東側の桁行の柱穴すべてにおいて確認され、0.15～0.2m程を測る。

時期決定可能な出土物は見られないが、Bトレンチで確認した建物に比べて、柱穴の規模が極端に小形であること、埋没土の特徴が異なることから、古代以降の所産である可能性が極めて高い。

SB 06

Dトレンチ北半部のX=143.585 Y=45.855付近で検出した2間×3間(4×5.8m=23.2㎡)の掘立柱建物である。東側桁行の柱穴列が既往調査分に該当し、組み合わせて建物として復元した。桁行の柱穴列の方向は、座

標北から10°東へ振ったもので、遺跡周辺の条里型地割の方向とほぼ合致するものである。

大半の柱穴の断面図作成ができていないが、現状での平面形が長軸0.8～1.4m短軸0.7m程の隅丸長方形を呈する。また、建物内部に位置するやや小振りなSP176、175は位置関係から東柱の可能性が高いと判断され、床張りの建物と見てよいだろう。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、柱穴の平面形や規模・配置から古代期の所産と推定することができ、遺跡内の他の建物との関係から8c後半から9c代の建物と考えられる。

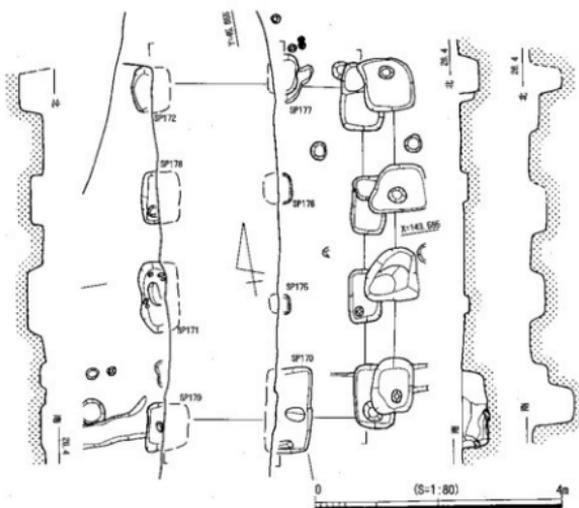


図33 SB06平・断面

SD 01

Bトレンチ東半部で延長9.2mに亘って検出した溝であり、北側の未調査部分へ延びる。現状で上面幅0.3～0.4m、断面形はU字状を呈し、残存深度は0.1mを測る。流下方向は座標北から12°東へ振ったもので、遺跡周辺の条里型地割に合致する。同様の主軸方向を採る先述したSB 02との位置関係などから、同建物に伴う天落ち溝的な性格をもつものと考えられる。

出土遺物には149の須恵器長頸壺頸部片、150の櫛溝施文が認められる弥生土器壺肩部片、同壺底部片である151が見られる。150.151は下位に位置する落ち込みであるSX 01からの混入品であり、弥生中期初頭の所産である。149の須恵器長頸壺頸部片は、詳細な時期決定は困難であるが、概ね8～9cにかけての所産と考えられることから、SB 02の年代とも矛盾しない。

SD 03

Bトレンチ西半部において検出した溝である。上面幅0.5～0.6m断面形は緩い逆台形を呈し残存深度0.1～0.15mを測り、延長約10mに亘って検出している。方向は座標北から10°東へ振ったものであり、遺跡周辺の条里型地割と合致する。規模から見てSD 01と同様に建物等に伴う天落ち溝的な性格をもつものと考えられる。時期決定可能な出土遺物は見られないが、9世紀前半のSB 04との切り合い関係から、それ以前の年代が想定できる。位置関係からSB 05に伴う可能性が考えられるが、SB 05が古代以降の所産と考えられ時期を違えることから、本溝に伴う建物特定することはできない。

SD 04

C-1.2トレンチ南半部で検出した溝であり、既往の調査区のIKSD 01.02に接続するものである。また、現状の

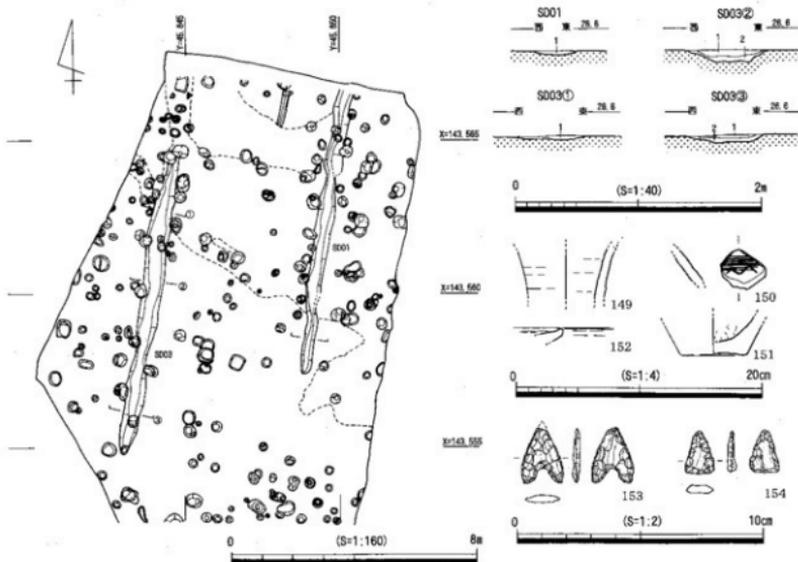


図34 BトレンチS001、03平・断面及び出土遺物

条里型地割の東西の境界線に合致する。C-1トレンチの南端部では、上面幅2.5m以上残存深度0.2m程を測り、断面形は逆台形に近い。埋没土は上下に分離されるが、下層では砂岩礫が面的に投棄されている状況が見られた。上・下層ともに粘土を基調することから、恒常的な流水状態は想定できない。

155～157はC-1トレンチ下層の雑群とともに出土した一群である。155.156は須恵器杯の底部片であり、矮小な高台を施す。157は高台をもつ須恵器長頸壺の底部片である。

158～178は、上層出土遺物である。158.159は須恵器蓋の摘み部小片、160.161は須恵器蓋の天井部及び口縁部の小片である。162～165は須恵器杯の口縁・底部片。163.165には顕著な火禿痕が見られる。166～169は高台を施す須恵器杯底部片。高台は矮小なもので占められ、162の内面には焼成時の高台痕を反映すると見られる焼けムラが見られる。170は須恵器皿の底部片である。171は鉄鉢様の器形が想定できる須恵器鉢の胴部片である。172は脚台をもつ須恵器長頸壺の底部片。173は須恵器甕の頸部片である。174は鈎付の土師器甕口縁部、175はくの字状口縁をもつ土師器甕である。176～178は部位は特定できないが、胎土や形態から土師器甕片と考えられる。

179～183はC-2トレンチから出土した一群であり、帰属する層位は不明である。179は口縁部下に2条の沈線施す須恵器短頸壺の口縁部。180～182は高台をもつ須恵器杯底部片である。183は法量から見て須恵器長頸壺の脚台と見られる。

184～190は下層から混入したと考えられる石器群である。184は普通サヌカイトを用いる一側縁加工のナイフ形石器である。ブランディングは主要剥離面側から入念に施されるが、基部寄りの部分には元々の打面が僅かに残されている。185は二次加工のある剥片。両側には、素材の主要剥離面と考えられるb面からの加工痕が見られるが、

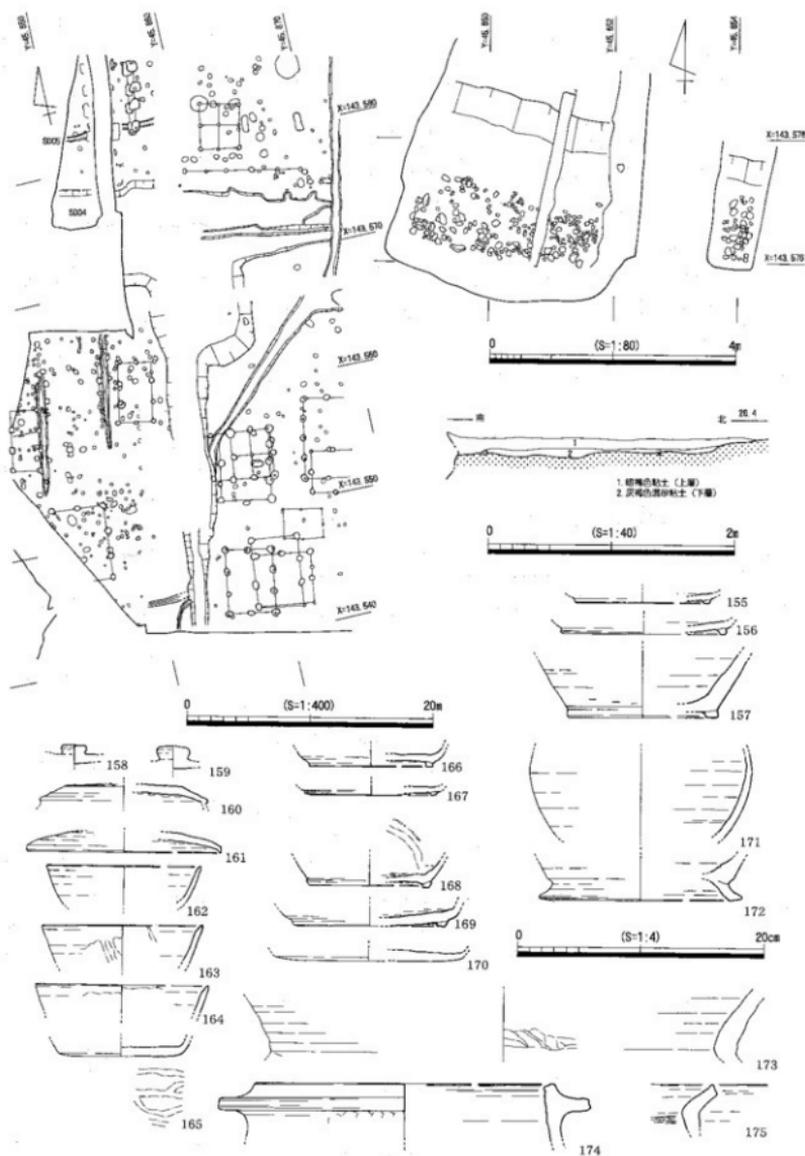


図35 CトレンチSD04平・断面及び出土遺物

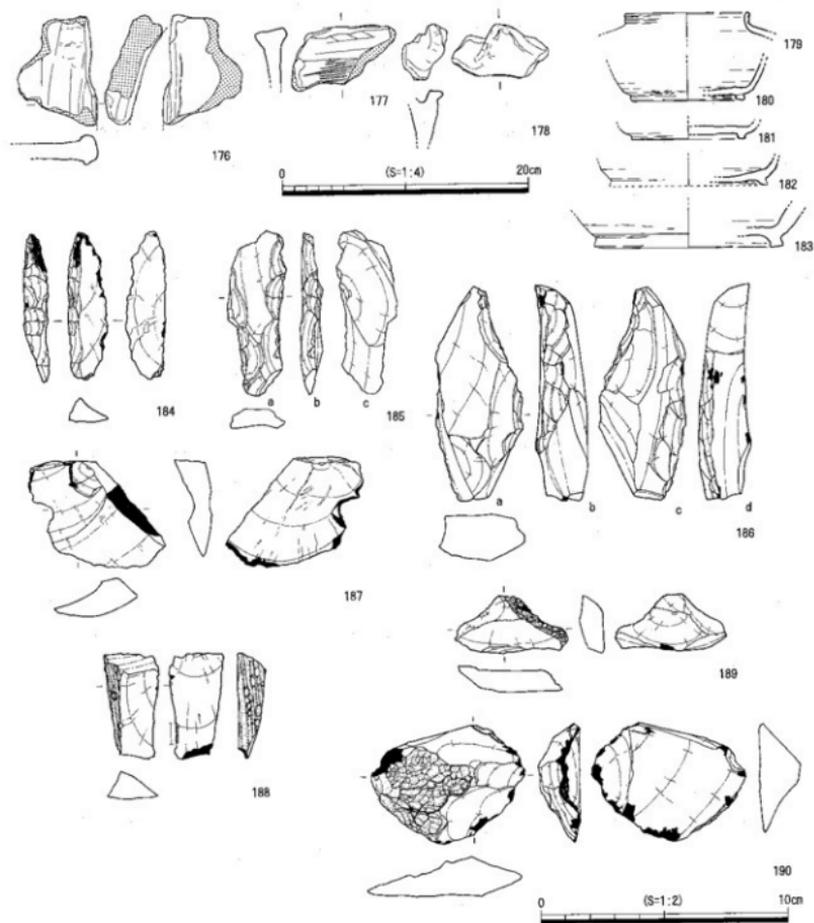


図36 CトレンチSD04出土遺物

b面上半部のa面側からの剥離によって加工途上で折損している。両側縁の加工や、折損の原因となった背面側からの加工を素材の厚みを減じることを意図したものと考えられれば、角錐状石器を意図したものと考えることもできる。186は白色風化サヌカイトを用いる二次加工のある剥片である。先端部の形状と、バルブが不明確ながらd面上半に見られる剥離痕を槌状剥離と考えれば、彫器の可能性もある。188は一側縁に自然面を留める縦長剥片である。打面は折れ面に設定されており、主要剥離面左側縁には、微細剥離痕が見られる。190の石核は、打面部の多くが発掘時の折損によって失われているが、山形に近い形状を示すことから翼状剥片石核の可能性もある。石材は普通サヌカイト。

SD 05

C-1.2トレンチ中央部で検出した溝である。上面幅0.4m、残存深度0.15～0.2m程を測り、断面形はU字状を呈する。流下方向は南側のSD 04と同じく現状の条里型地割に合致する。

191～194は出土遺物である。191は須恵器杯の口縁部。口径から、須恵器椀の可能性も考えられる。192は平高台の須恵器杯底部片であり、内外面に火瘃痕を明瞭に留める。193は断面三角形の矮小な高台を施す須恵器杯底部片。194は内黒の黒色土器椀の底部片である。

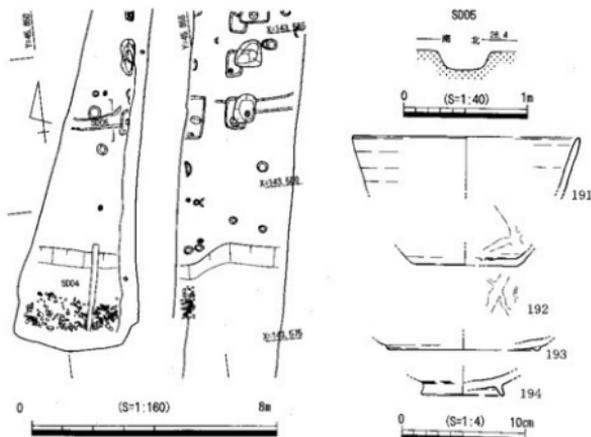


図37 CトレンチSD05平・断面及び出土遺物

出土遺物の様相は、8c段階かそれ以前と考えられる191,193などに加えて、192の平高台の須恵器杯は9c末～10c前葉の可能性がある。194の黒色土器椀の11c代の所産と考えられ、かなりの時間幅が認められる。また、本溝は、8c後半～9c代の所産と推定したSB 05に切られることから、出土遺物の帰属時期と矛盾が生じるものとなっている。ここでは、SB 05の帰属時期を優先させ、192,194を混入品と理解し、本溝を8c後半段階の所産と推定しておく。

SK 01

Bトレンチ南部のX=143.552.4 Y=45.844.6付近で検出した土坑である。長軸0.9m、短軸0.7mの楕円形を呈し、残存深度0.4mを測る。断面形は逆台形であり、196の須恵器杯口縁、サスカイト製の剥片205が出土した。205は下層からの混入品であり、196の須恵器杯の形態から、本土坑は8c前半代に埋没したものと考えられる。

SK 02

Dトレンチ北側のX=143.599 Y=45.855付近で検出した土坑である。長軸1.6m、短軸1.0m程の楕円形を呈し、残存深度0.2mを測る。断面形は逆台形であり、8c前半の所産と見られる無蓋高杯脚部片197が出土している。

SK 03

Dトレンチ北部のX=143.598 Y=45.856付近で検出した土坑である。長軸1.1m、短軸1.0m程の不定形な平面形をもち、残存深度0.1mを測る。出土遺物には植物と考えられる圧痕を残す焼成粘土塊200と須恵器甕の頭部片201、半完形の土師器杯203が見られる。203の土師器杯は、口縁内面と見込み部に細い暗文と考えられるミガキが認められ、外面は底部を削った後ミガキ絡める。現状では赤色顔料の付着は確認できない。形態から8c初

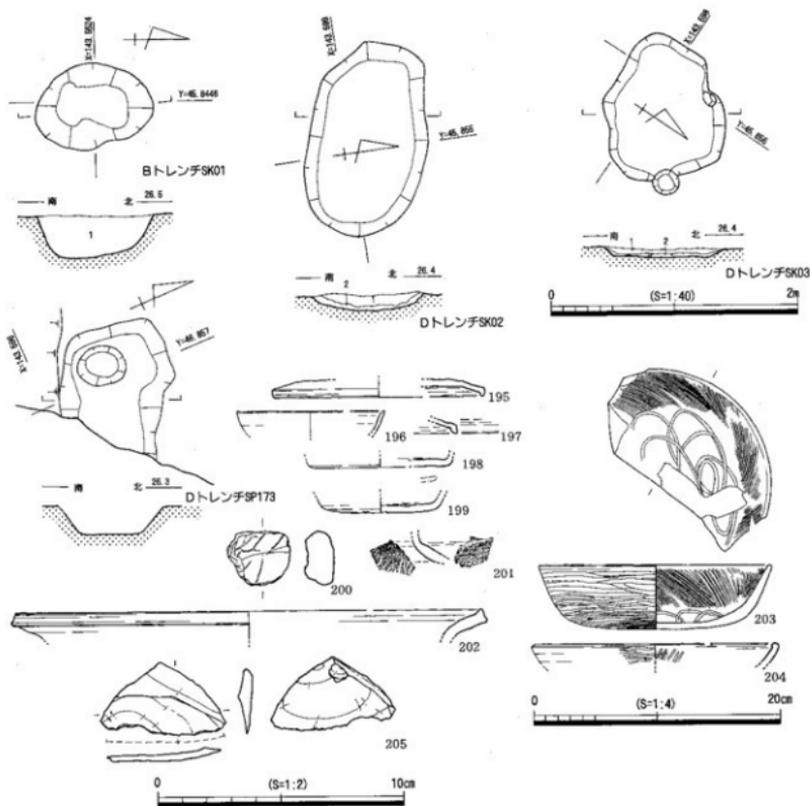


図38 BトレンチSK01、DトレンチSK02、03、SP173平・断面及び出土遺物

頭に位置づけられるものであり、この帰属時期を援用し本土坑が8c初頭に埋没したものと推定する。

SP 173

Dトレンチ北部のX= 143.596 Y= 45.857 付近で検出した柱穴である。一見土坑様に見えるが、柱痕と考えられる窪みを底面に残すことから、柱穴として取り扱う。現状で長軸1m以上短軸0.8 m程のやや歪な長方形を呈し、東側は既設の道路基礎によって破壊されている。断面の記録の作成ができていないが、柱痕と考えられる部分は、直径0.3 m深さ0.1 mを測る。

195.198.199.202.204は本遺構からの出土遺物である。195は須恵器蓋の口縁部、198.199は須恵器杯底部片である。202は土師器甕の口縁部片、204は口縁内面に右上がりの暗文と考えられるミガキが認められる土師器杯の口縁部である。

195の須恵器蓋や204の土師器杯形態から、本柱穴は8c前半に埋没したものと推定する。レイアウトミスで図

柱穴出土遺物

ここで報告する遺物は、建物として復元することができなかった柱穴から出土したものである。詳細な出土柱穴名については、観察表を参照されたい。

206～208は柱穴174から一括出土したものである。206は弥生土器広口壺の口縁部であり、内外面をミガキ縮め口縁端部下に刻み目をもつ。207は弥生土器広口壺の頸部片。外面には櫛描直線文間にへら状工具による列点文を認める。208は底部に見られる2孔一対の蓋受用と考えられる穿孔から、弥生土器無頸壺の底部片と考えられる。これらはいずれも弥生中期初頭の所産である。

209～211は、口縁内面にかえりをもたない須恵器蓋である。211は天井部に回転ケズリが辛うじて残存する。212～226は須恵器杯。213～215は高台付杯であるが、いずれも高台は矮小であり8c中葉～後葉の所産と考えられる。216～225は高台をもたない須恵器杯である。底部と口縁の境が明瞭なものが多く、213～215の高

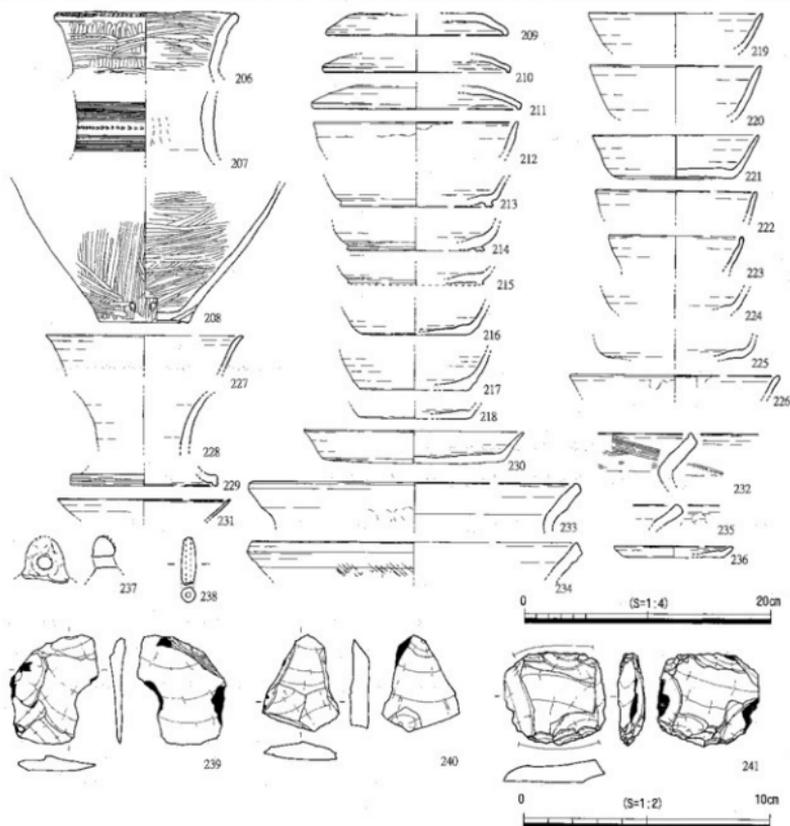


図39 柱穴出土遺物

台付杯とはほぼ同時期の所産と考えられる。227は形態から長頸壺の口縁部片と思われるが、口径がやや広いことから杯の可能性もある。228は長頸壺の頸部片である。229は無蓋高杯の脚端部片であり、8c前半の初期の集落に伴うものと考えられる。230は須恵器皿。231は土師器杯の口縁部片である。232～235は土師器甕の口縁部片。236は土師質土器皿であり、11c後半～12c前半の所産と考えられる。既往の調査で当該期の建物群が確認されており、本遺跡中では末期の集落に伴うものと思われる。237は土師器イダコ壺の吊り手部の小片である。238は管状土鉢。

239は発掘時の折損によって不明確であるが、自然面を打面とする剥片であり初期の段階に石核から剥がされたものと見られる。240は主要剥離面の上下端に二次加工と考えられる剥離面が見られる。241は上下縁に階段状剥離が見られることから、楔形石器と考えられる。これらの遺物は、下層から古代以降の柱穴に混入したものと見られる。

4. 下層遺構

S X 01

Bトレンチ北部で確認した落ち込みである。Bトレンチでは、主に黄灰色シルトを基盤として古代期以降の遺物を検出しているが、同トレンチ北部では締りの悪い淡黄褐色のシルトが不定形に分布している状況が見られた。最深部で0.2mを測るが、緩やかに落ち込む断面形から自然地形の窪地である可能性が高い。

埋没土中からは、弥生中期初頭の土器群とともに旧石器～縄文期の遺物が出土しており、混在した様相を示すが、弥生中期初頭の土器群がやや固まりを見せながら出土していることから、旧石器から縄文期の遺物は更に下層からの混入品と考えられる。

242～270は出土遺物である。242は弥生土器広口壺の口縁部片であり、頸部には櫛描直線文帯が残存する。243は弥生土器壺の胴部片と見られ、櫛描による波状文・直線文帯が見られる。244,245は弥生土器甕の口縁部の小片である。246はやや厚手の弥生土器壺底部片。247は胴部外面に回転台を使用しない櫛描による直線文帯と最下段に波状文帯を施す弥生土器甕の胴部片である。

248は胴部上半に複数の櫛描直線文帯と最下段に原体不明の列点文を施す弥生土器甕である。口縁部の形態は、中期中葉段階のく字状口縁甕に近い。249は胴長の形態をもつ弥生土器鉢の口縁・底部片であるが、出土状況と胎土から同一個体として図示した。口縁下には櫛描による3帯の直線文が確認できる。250～252は弥生土器甕の底部片である。

253は普通サヌカイトの横長剥片を素材とする二側縁加工のナイフ形石器である。側縁部の加工はすべて主要剥離面側から行われているが、加工途上で先端部を欠損していることから、a面右側の加工が先端部まで及ぶものかどうかは分からない。254～260はサヌカイト製の石鏃である。257の基部付近には加工が及んでいないことから、製作途中の可能性がある。261は普通サヌカイト製の横長剥片石核である。打面部には細かな打面調整が見られ、山形となった頂部を打撃しているが、打点部を中心に折損したものと見られる。

262は上下縁に連続する階段状剥離が見られる楔形石器である。263は主要剥離面の末端に使用痕と考えられる微細剥離痕をもつ剥片である。264は普通サヌカイト製の縦長剥片であり、主要剥離面右側縁部には微細剥離痕が見られる。265～267は普通サヌカイト製の剥片であり、二次加工は認められないが安定した打面をもつことから掲載した。帰属時期は不明である。269は普通サヌカイト製の横長剥片を素材とするスクレイパーであり、背面の一部に自然面が残存する。270は普通サヌカイトを素材とするスクレイパーである。

S D 09

Bトレンチ北半部の弥生中期初頭の落ち込みSX 01を調査終了後、その下層から検出した流路状の遺構である。

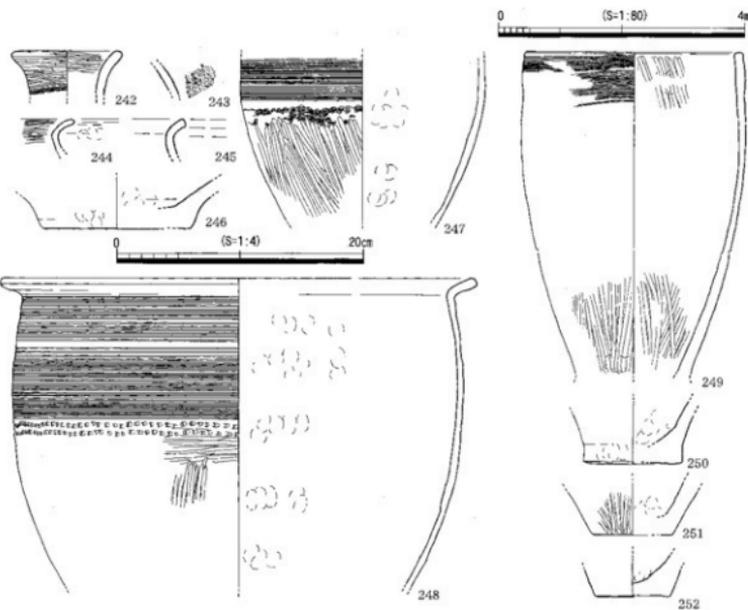
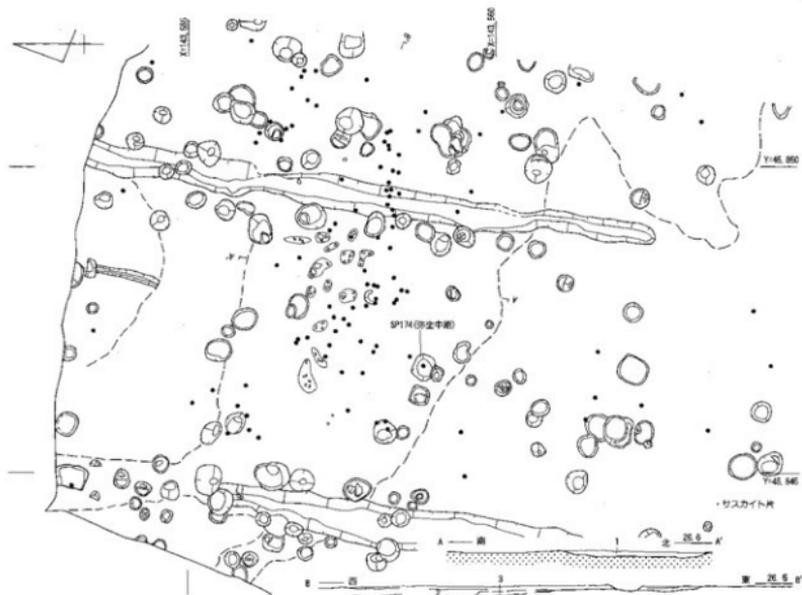


図40 BトレンチSX01平・断面及び出土遺物 その1

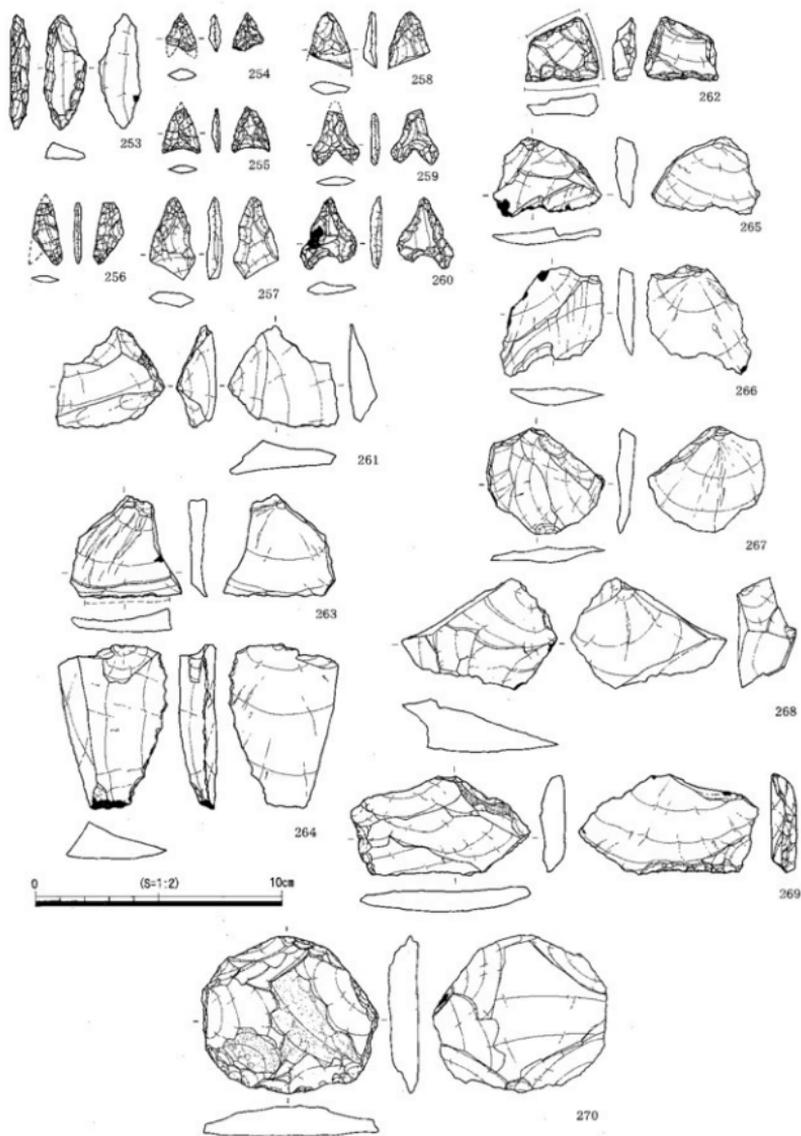


図41 BトレンチSX01出土遺物 その2

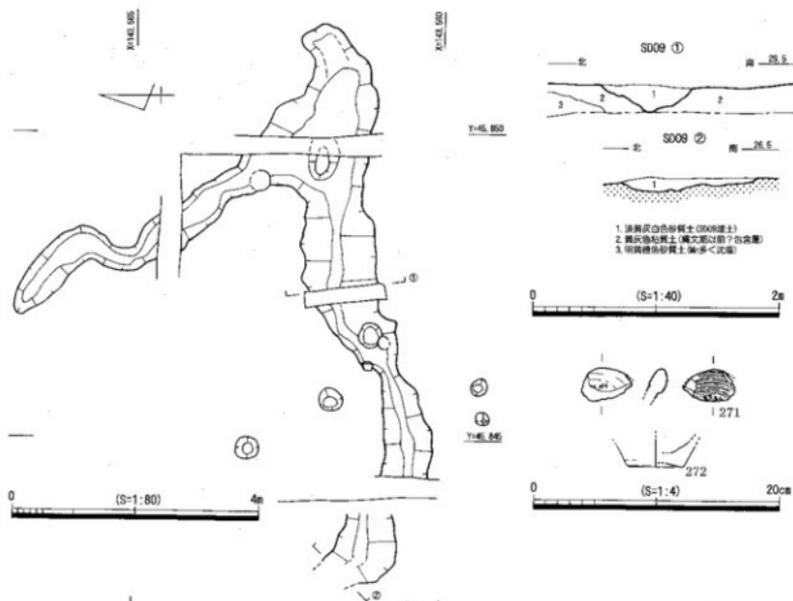


図42 BトレンチS009平・断面及び出土遺物

上面幅 0.7 ~ 1.2 m 残存深度 0.1 ~ 0.2 m を測る。平面形は二段に分かれ、位置的にはSX 01 とほぼ重複する。溝としての略号を与えているが、埋没土の状況から恒常的な流水が見られないことと、自然地形であるSX 01 とほぼ重なって見られることから、自然流路である可能性が高い。

271.272 は出土遺物である。271 は縄文土器深鉢の口縁部片。外面に緑帯文が見られ、細かな石英粒を多く含む。既往の編年では縄文後期前葉の彦崎KI式に比定される。272 は縄文土器深鉢の底部片であり、271 と同様に焼成が悪く石英粒を多く含む。

出土遺物の年代観から、本遺構は縄文後期前葉に埋没したものと推定する。

黄灰色シルト層出土遺物

ここで紹介する遺物は、弥生中期前葉以降の基盤層中から出土している一群である。調査中に、弥生中期前葉～古代期の遺構に旧石器を初めとした年代的に古層を示す遺物が見られたことから、下層確認として一部において面的な掘り下げを実施している。基本層序で見たように、下層における各層準には、鬼界アカホヤ火山灰が含まれることから見て、旧石器類は純粋な形で包含されていない。遺物の分布状況には一定程度のまとまりがあることと、SD 09 やSX 01 の状況を考慮すると、縄文期以降の遺構の存在が推定される。

273.275.276 はC-1 トレンチ中央部において集中が認められた一群である。273 は弥生土器壺の底部片。形態から弥生中期前葉の所産と思われる。275 は平基無茎式石鏃であり、基部の両面には研磨痕と見られる線状痕が確認できる。276 はスクレイパーである。

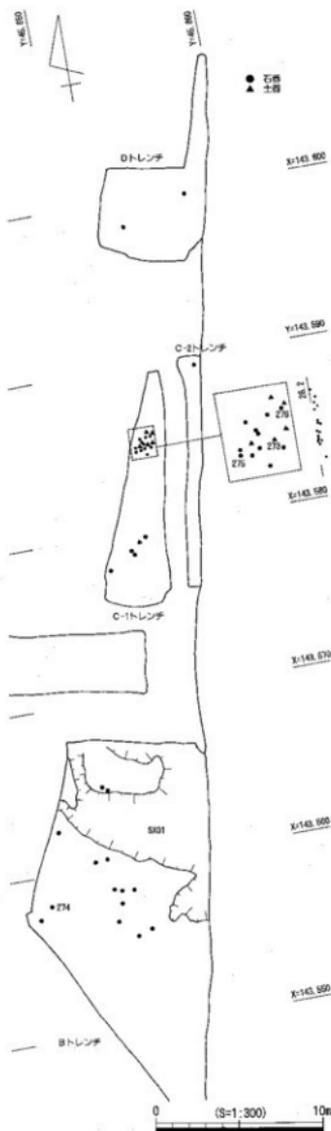


図43 下層遺物分布

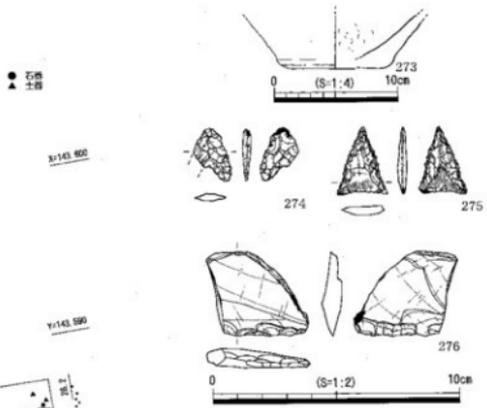


図44 下層出土遺物

274はBトレンチ中央部東寄りの部分から出土した凹基無茎式石鉢である。

他に出土位置が記されているものがあるが、図化していないものは小片の土器片かサヌカイトの剥片類である。

遺構外出土遺物

277～351は、表土層をはじめ弥生中期前葉以降の遺構検出面上位に見られる比較的近年の耕作土から出土した遺物である。

277は弥生土器広口壺の上半部。胴部外面には、楕円による直線文2帯と回転を利用しない波状文が1帯確認でき、弥生中期前葉の所産と考えられる。278～280は弥生土器甕の口縁部片であり、形態から弥生中期前葉の所産である。281～285は弥生土器甕の底部片である。286～292は須恵器蓋である。293～298は須恵器高台付杯の底部片。299～308は須恵器杯の口縁・底部片である。これらの大半は8c代のものと考えられるが、308は口縁部の内外面に明瞭な火燻痕が見られ、形態的には9c前半代の所産である。309は無蓋高杯の脚部片である。310～313は須恵器皿。310は内面の見込み部に火燻痕を留める。314は須恵器圓足硯の外堤部の破片で、僅かに硯部と脚部が残存する。315.316は須恵器長頸壺の脚台片である。317は突帯状の段部が剥落した須恵器甕の口縁部片。318は土師器杯であり、内面には右上がりの暗文が認められる。318～323は低平な器高をもつ土師器杯であ

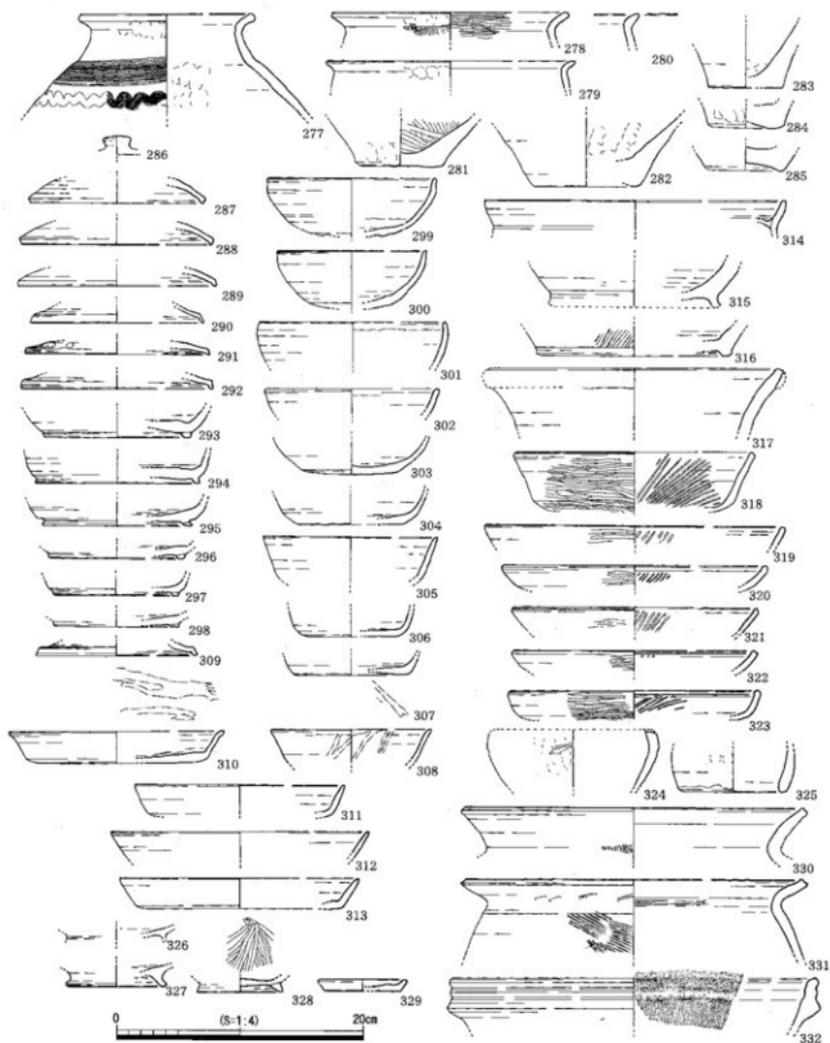


図45 遺構外出土遺物 その1

る。口縁内面に沈線状の窪みと右上がりの暗文が施される。324は口縁端部を欠損するが製塩土器の可能性もある。325はイダコ壺の小片である。326～328は内黒の黒色土器碗の高台片。形態から、11c後半～12c前半の所産と考えられる。329は土師質土器皿である。

330.331は土師器甕の口縁片。332は堺・明石産擂鉢の口縁部である。

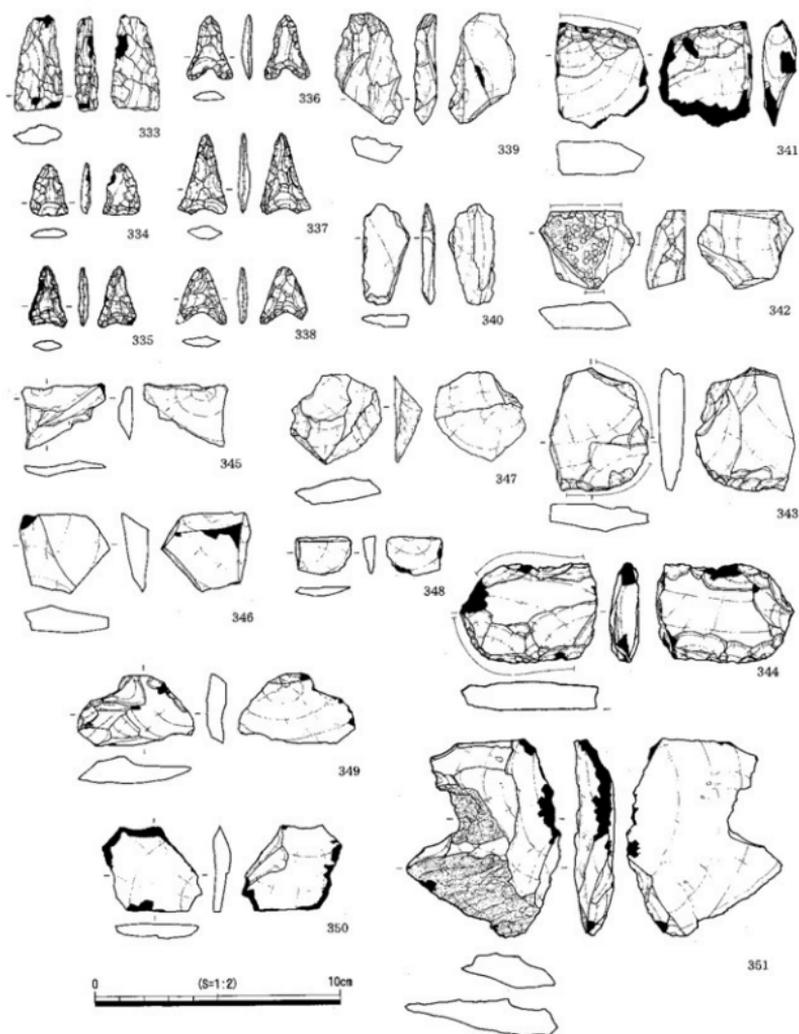


図46 遺構外出土遺物 その2

333は普通サヌカイトを素材とする尖頭器である。334は平基無茎式石鏃、335～338は凹基無茎式石鏃である。339は石理のきつい普通サヌカイトを素材とする横長剥片であり、背面と側面に自然面を多く留める。340は白色風化サヌカイト素材の横長剥片である。341～344は楔形石器、345～351は剥片である。

第3節 八幡遺跡

八幡遺跡は当初、香川都条里B地区として保存協議を開始している。調査対象地は、道路公団施工による同地区西半分のR区間である。平成10年度の予備調査結果を受けて、平成11年度～平成12年度に5857㎡の全面発掘調査を実施した。

調査区は遺構が確認された部分を中心として、都合上I～Ⅲ区に区分される。この調査区を中心として、トレンチ調査が終了した調査地も報告の対象とすることから、略称を与えている。

1. 基本層序及び地形

調査対象地はなだらかに北へ傾斜し、現地表面においては明瞭な微高地及び旧河道の痕跡は確認できない。下に堆積する基底礫層の観察からは、Ⅲ区トレンチ部分が旧中州に相当し、微高地上に位置することが想定される。土層図はトレンチ毎に作成しているが、ここで主に南西から北東方向の壁面土層を使用し説明を行う。

I b-1 トレンチ東壁 (図49)

調査前は二筆に分かれた水田であった。現地表面から遺構検出面まで、遺物包含層を介在させることはない。トレンチ北半部と南半部の検出面には、0.3m程の段差が見られ、比較的新しい段階に面的な削平が行われた可能性が高い。遺構は、(7).(20)層とした離水の進んだ黄褐色系の粘土層上面に設定している。これより下位は無遺物層であり、(7).(10).(20).(22)層の粘土層が1m程見られた後、これより下位は粗砂と砂礫となる。下位の砂礫層は締りが悪く、マトリックスに粗砂を交える。南方の中間東井坪遺跡などで見られたAT下位の広義の沖積基底礫層ではなく、基底礫層上面や低地を埋積する扇状地堆積物と見られる。旧石器段階の地形面は、これらの砂礫層が盛んに堆積する谷地形に相当すると考えられよう。また、テストピットを設定して調査を行ったが、下位からの旧石器類の出土は確認できなかった。

II b-1 トレンチ北壁 (図50)

調査前の地目は、トレンチ南西部が宅地、北東部が水田であり、標高22.3m前後を測る。トレンチ北西部の、現耕作土下位には、近世以降の遺物が極少量含まれる旧耕作土が0.2m程見られた後、遺構検出面である黄色粘土層が現れる。検出面は、断続的に削平を受けている見られるが、I b-2 トレンチのようなきつい状況ではない。断面図東側の検出面である11層上面に見られる窪みは、中世段階に測る畝間の溝である。ここでも、下層遺物の回収を目的としたトレンチを設定したが、旧石器等の出土は見られなかった。

III a-3 トレンチ北壁 (図51 上段)

調査前の地目の一筆の水田であり、標高22.5m前後を測る。0.2m程の現耕作土の下位には、近世段階の遺物を混じえる旧耕作土が0.1m程見られ、検出面である黄灰色系粘土に至る。本調査区では、中世後半期の掘立柱建物群を確認しているが、地表面は旧耕作土によって削平を受けているものと見られる。

検出面の4～6層の粘土層の下位には、8.9層とした砂礫層が比較的浅いレベルに存在している。この砂礫層は、I b-1 トレンチで見られたそれと比べて締まりがよく、広義の沖積基底礫層に対比されるものと考えられる。比較的浅い位置に基底礫層が見られることから、本調査区は埋没微高地と考えられるが、下位から旧石器等の遺物の出土は確認できなかった。

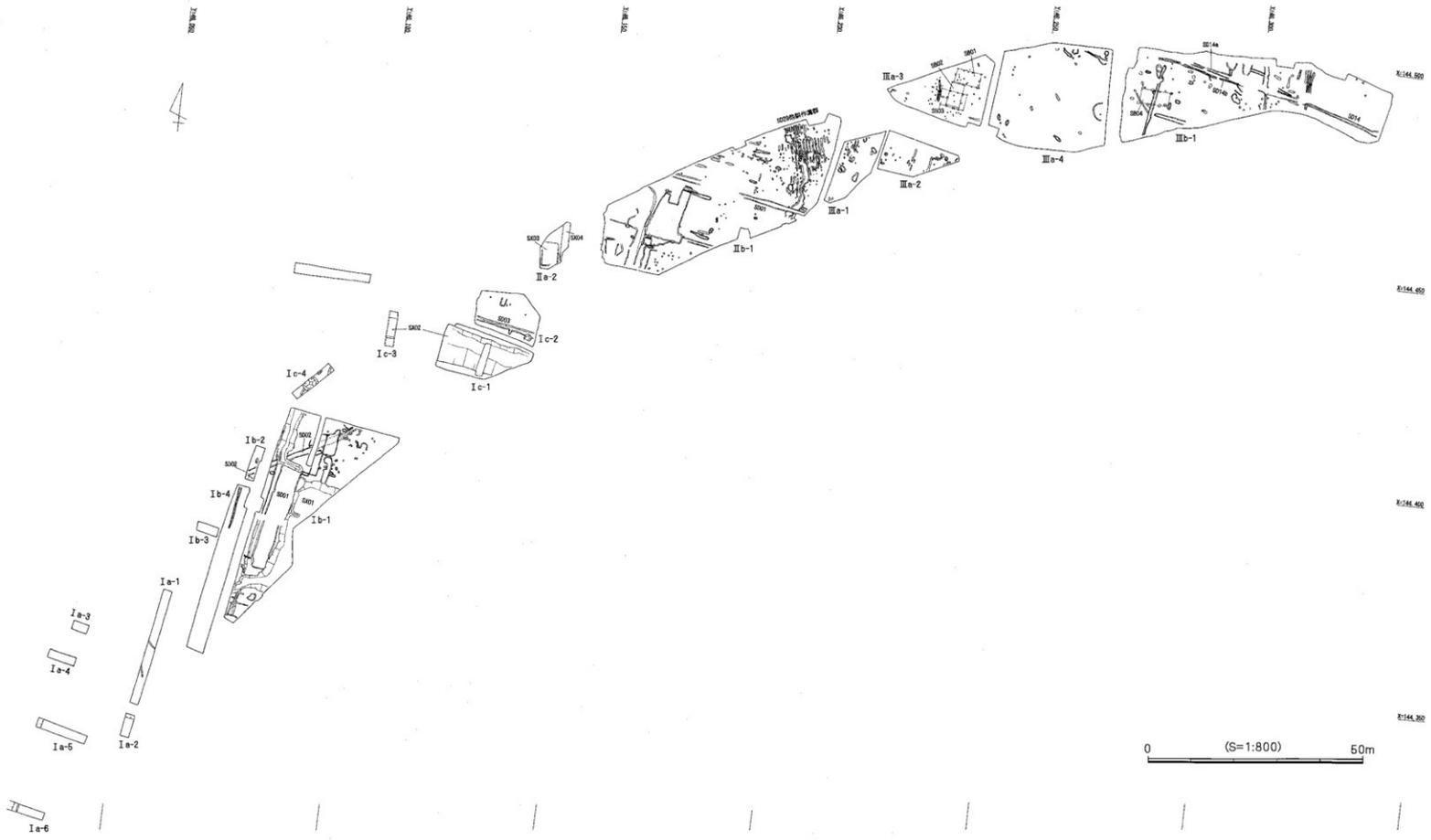


図47 遺構配置

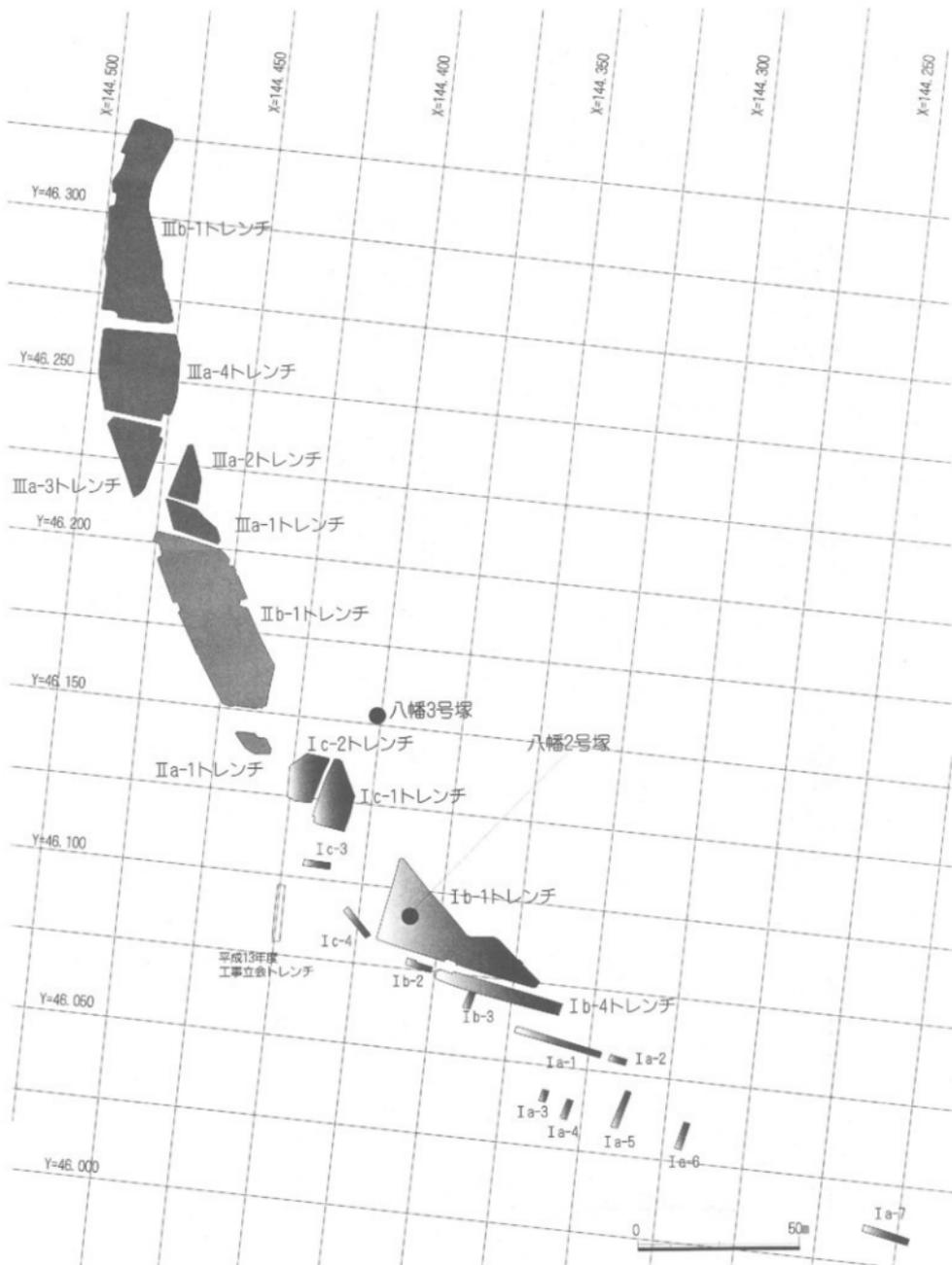
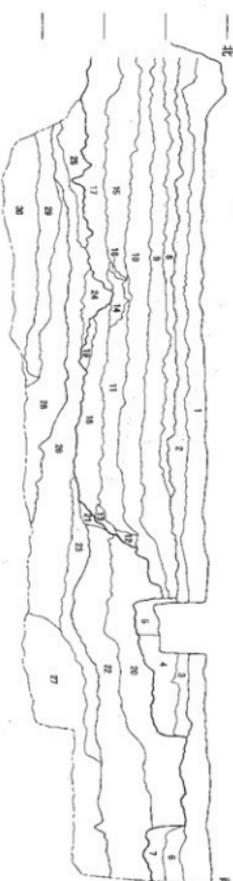


図 48 調査区割

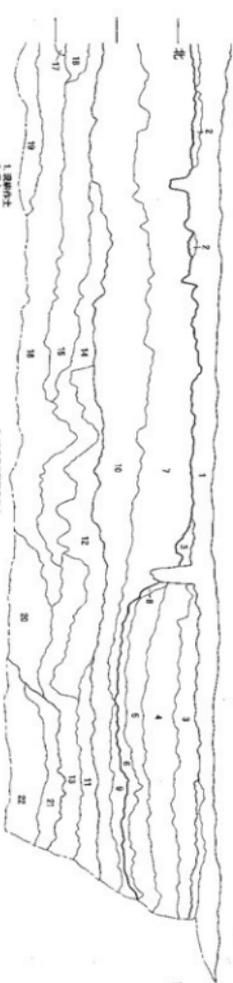
南 22.7

10-1 トンネル集積



- 1 表層粘土
- 2 2層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 3 3層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 4 4層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 5 5層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 6 6層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 7 7層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 8 8層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 9 9層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 10 10層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 11 11層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 12 12層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 13 13層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 14 14層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 15 15層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 16 16層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 17 17層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 18 18層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 19 19層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 20 20層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 21 21層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 22 22層の砂質粘土(厚さ約1.0m)

南 22.3



- 1 表層粘土
- 2 2層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 3 3層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 4 4層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 5 5層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 6 6層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 7 7層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 8 8層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 9 9層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 10 10層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 11 11層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 12 12層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 13 13層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 14 14層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 15 15層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 16 16層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 17 17層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 18 18層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 19 19層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 20 20層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 21 21層の砂質粘土(厚さ約1.0m)
- 22 22層の砂質粘土(厚さ約1.0m)



図49 土層断面 その1

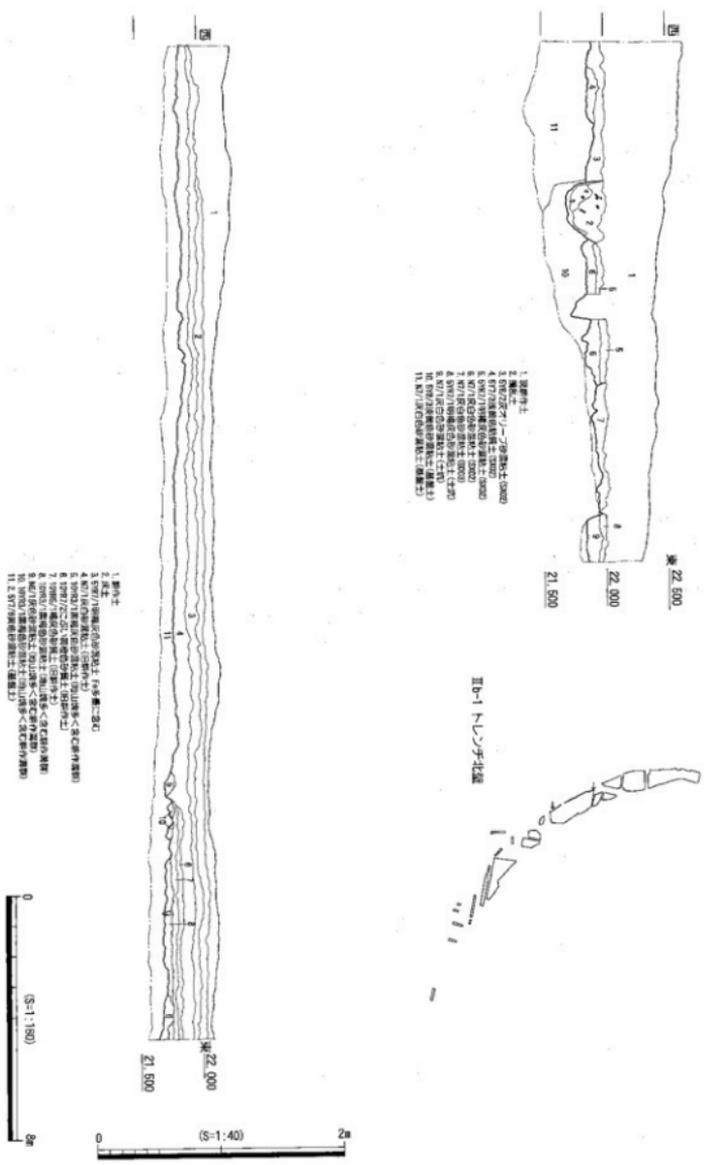


図50 土層断面 その2

Ⅲ a-4 トレンチ北壁 (図 51 下段)

調査前は国道に隣接した店舗跡地であったことから、1.5 m程の厚い盛土層が存在している。現地表面の下位の耕作土層の標高は22.2 m前後を測る。検出面である6層の上層には、近世段階の連続する耕作土2~4層が0.2 m程見られることから、検出面も一定程度の削平を受けている。この6層下位には、7層とした砂礫層が比較的浅い位置に見られ、調査区中央部ではこの砂礫層上面が遺構検出面となる。

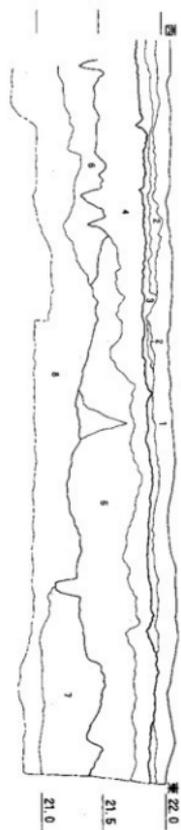
先に見た西側のⅢ a-3 トレンチと同様、本トレンチも旧微高地上に位置すると見られる。下層からの遺物の検出に努めたが、一切出土は確認できなかった。

Ⅲ b-1 トレンチ北壁 (図 52 上段)

調査前は国道に隣接した宅地であり、2m程の盛土が見られる。この盛土下位には遺構検出面が露出し、旧耕作土及び遺物包含層は一切交えない。検出面は相当削平を受けたものと推定される。検出面を構成する土層は一様ではなく、粘土からシルトの複数層位から成り、上位の盛土の影響を受けグライ化している部分も見られる。調査区西端部では、この下位に存在する砂礫層が露出するが、断面図では東へ傾斜する状況が窺えることから、本トレンチ西半部はⅢ a-3 トレンチから続く旧微高地の縁辺部と考えられる。

Ⅲ b-1 トレンチ南壁 (図 52 下段)

トレンチに西半部と同様、宅地造成に伴う盛土が厚く見られる。ここでも盛土から遺構検出面の間に旧耕作土及び遺物包含層が介在する状況は見られない。13層以下は、トレンチ西半部で見られた基底礫層に対比される層準であるが、上面が西へ傾斜する状況が見られる。この落ち込みは、トレンチ西半部で見られた東へ傾斜する礫層の落ち込みに対応し、トレンチ中央部が埋没旧河道に相当するものと見られる。



- 1 黒土
- 2 2 SV/硬面砂質粘土
- 3 2 SV/硬面砂質粘土
- 4 2 SV/硬面砂質粘土
- 5 2 SV/硬面砂質粘土
- 6 2 SV/硬面砂質粘土
- 7 2 SV/硬面砂質粘土
- 8 2 SV/硬面砂質粘土

直井-3 トンチ北壁



- 1 黒土
- 2 2 SV/硬面砂質粘土
- 3 2 SV/硬面砂質粘土
- 4 2 SV/硬面砂質粘土
- 5 2 SV/硬面砂質粘土
- 6 2 SV/硬面砂質粘土
- 7 2 SV/硬面砂質粘土

直井-4 トンチ北壁

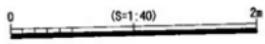
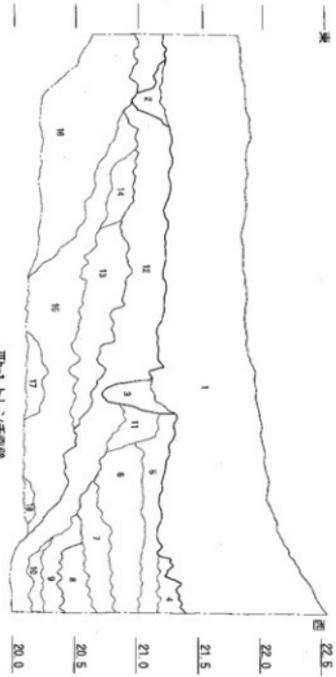


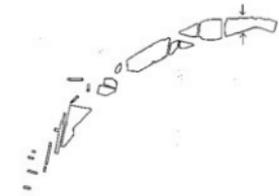
図51 土層断面 その3



北端



南端



- 1. 遺構1
- 2. 遺構2
- 3. 遺構3
- 4. 遺構4
- 5. 遺構5
- 6. 遺構6
- 7. 遺構7
- 8. 遺構8
- 9. 遺構9
- 10. 遺構10
- 11. 遺構11
- 12. 遺構12
- 13. 遺構13
- 14. 遺構14
- 15. 遺構15
- 16. 遺構16

- 1. 遺構1
- 2. 遺構2
- 3. 遺構3
- 4. 遺構4
- 5. 遺構5
- 6. 遺構6
- 7. 遺構7
- 8. 遺構8
- 9. 遺構9
- 10. 遺構10
- 11. 遺構11
- 12. 遺構12
- 13. 遺構13
- 14. 遺構14
- 15. 遺構15
- 16. 遺構16



図52 土層断面 その4

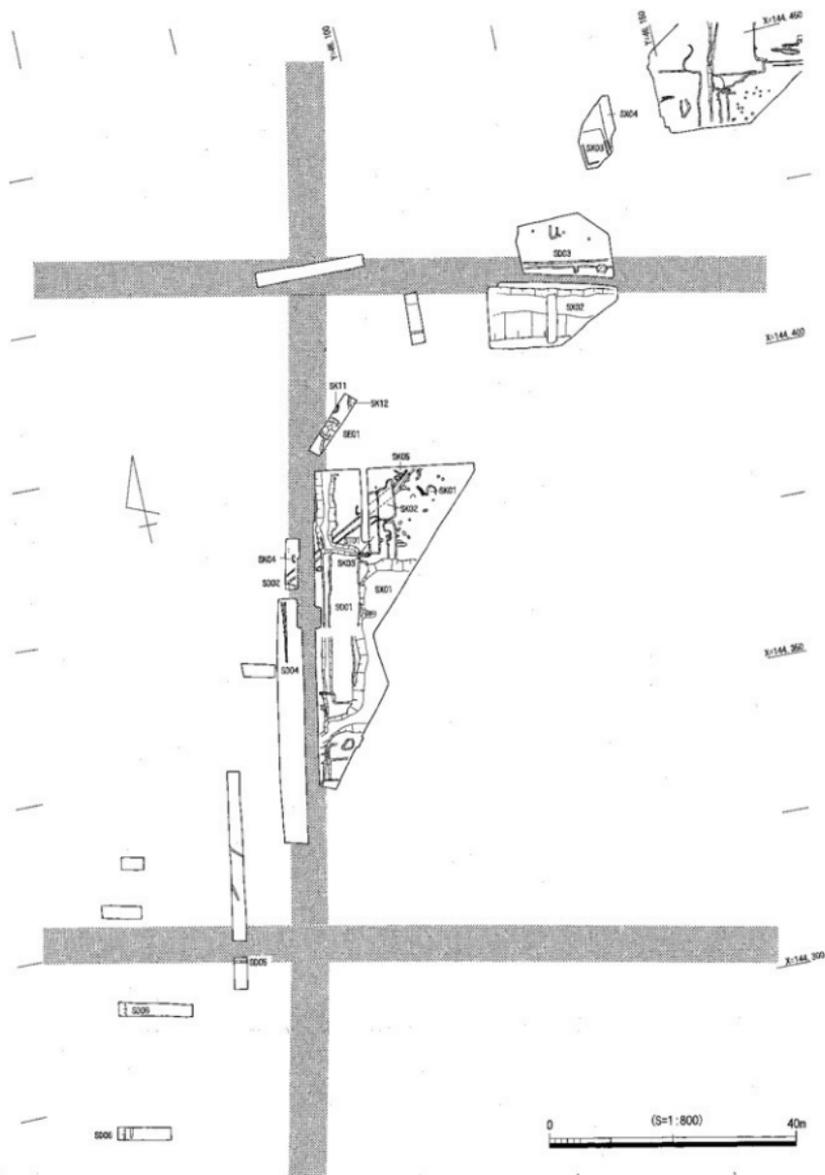


图53 I区遗构配置

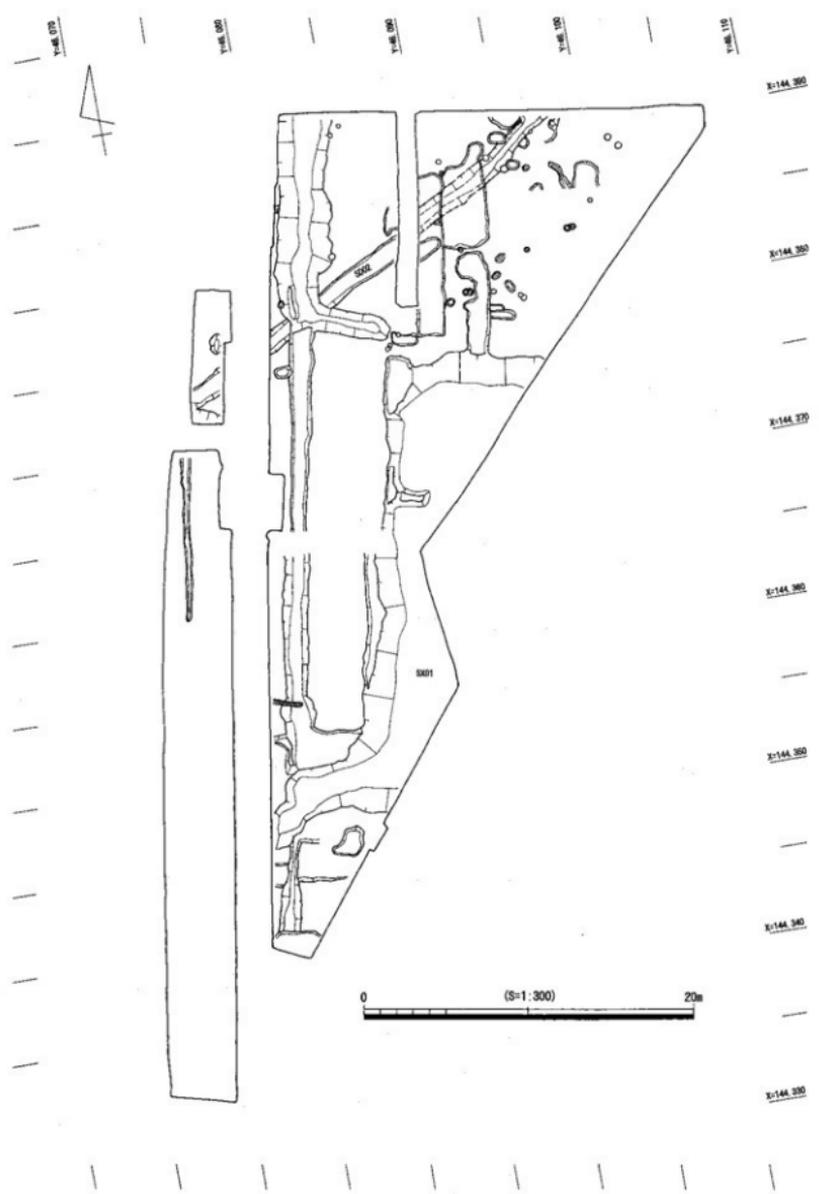


図54 Ib-1~4トレンチ平面

2. I区の概要

I区では主に弥生後期・古代・中世後半・近世以降の遺構を確認している。弥生後期後半段階のものとして、灌漑水路と考えられるSD 02が見られる。SD 02はII b-1トレンチのSD 76に接続するものと考えられ、集落関係の遺構は確認できなかったが、当該期の耕地開発の存在を想定できる。古代期の遺構としては、概ね8c代と考えられる土坑(SK04)を一基検出するに留まり、継続した土地利用の痕跡は確認できない。中世後半期では、条里型地

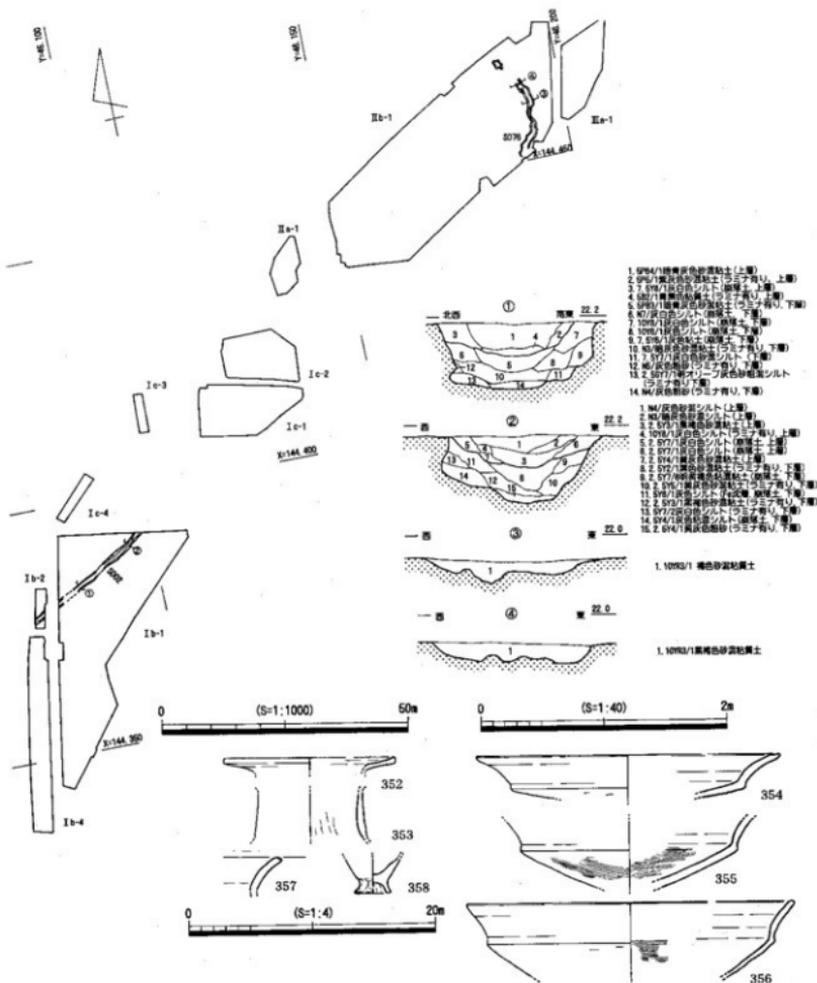


図55 I区SD02、II区SD76平・断面図及び出土遺物

割坪界溝 (SD01.03) と同時並存し、居館を囲郭する堀状の遺構がある (SX 01.02)。居館の経営主体は定かではないが、条里型地割溝の施工と同時に出現していることから見て、開発領主的な人物によって営まれた居館である可能性が高い。

SD 02. 76

SD 02 は I b-1.2 トレンチで検出した溝である。流下方向や埋没土の特徴から II b-1 トレンチの SD 76 へ接続するものと考えられる。SD 02 は、I b-1 トレンチ北半部を南西から北東方向に流下し、上面幅 1.1 ~ 1.2 m 残存深度 0.5 m を測る。断面形は U 字形を呈するが、底面の両側には流水による挟れや両壁面の崩落が見られる。底面には、粗砂を中心とした流水堆積層が凹凸を刻みながら広がっていた。底面レベルは、上流側の I b-2 トレンチと下流側 I b-1 トレンチ北壁で 0.2 m 程の比高差がある。埋没土は両側の崩落土を基準として上下 2 層に分かれ、下層崩落土の上位を切り込む形で上層の流水層が見られることから最低一回程度の改修が想定できる。

SD 76 は II b-1 トレンチ西部を北流するが、後世の削平行為がきつく、I b-1.2 トレンチで確認できた上層部は既に失われ、トレンチ北部では土坑状の窪地となり途切れる。残存が良好な部分において、上面幅 1.3 m 残存深度 0.2 m 程の規模を測るに過ぎない。最下層には I b-1.2 トレンチで見られた粗砂層は見られないが、黒褐色粘土中にラミナ状の粗砂が介在している。I b-1 トレンチ SD 02 との底面の比高差は 0.3 m 程を測り、出土遺物は見られなかったが、位置関係や巨視的な埋没土の類似から、両者は繋がるものと見られる。

流水堆積を示す埋没土の特徴や、改修行為の存在から、灌漑水路としての性格を想定したい。取水源としては、I b-1 トレンチ南西方向に位置する現古川が有力である。

352 ~ 358 は、I b-1 トレンチ SD 02 から出土遺物である。352 は下層から出土した弥生土器広口壺の口縁。353 は弥生土器広口壺頸部片であり、上層からの出土。354 ~ 357 は弥生土器高杯口縁・杯部片である。354 は上層、355 が下層から上層、356.357 は最下層の粗砂層から出土している。上層からの出土である 358 は体部の調整が判然としないものの、製塩土器の底部片の可能性がある。

上・下層間で出土遺物に顕著な時間差は認められず、本遺構は弥生後期後半段階に機能していたものと判断される。

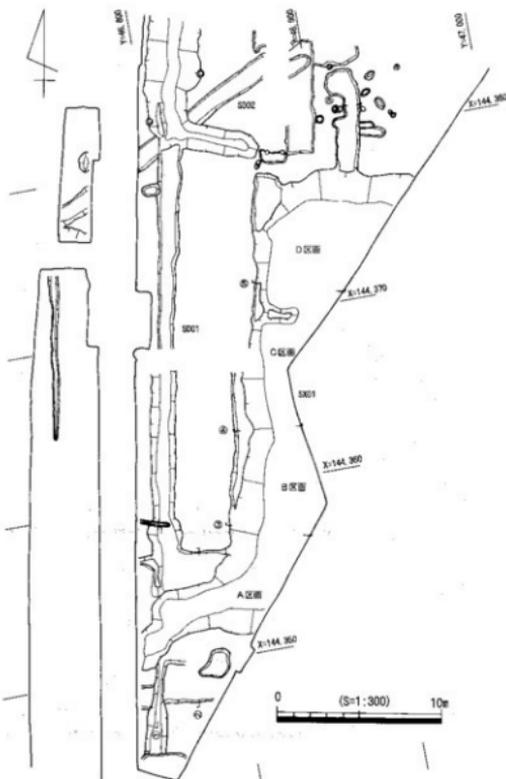


図56 I b-1 トレンチ平面

平面形

Ib-1トレンチ中央から南部にかけて検出した大形の落ち込みである。トレンチ南部からSD 01と併走する形で北へ35m程直線的に伸び、トレンチ中央部で東へ直角に折る。調査範囲では、東側の広がりを推定する材料は得られていない。条里坪界溝と推定されるSD 01との接点となる南部では、同溝との切り合い関係は見られず、同時埋没している状況が看取される。北半部では、西岸に取り付く形で検出した小規模な突堤状の掘り残しと、北岸には上面幅0.1～0.2m深さ0.1m程の溝状の張り出し部が付随する。断面形は大半が逆台形であり、底面はほぼフラットであるが、SD 01との共有部分では幅3m溝状を呈し、南北にテラス面が見られる。

堆積状況

SD 01との設定とするセクションでは、既に述べたように上層を共有し同時埋没しているが、下層はSD 01からの取水を想定させる細かな単位の流水堆積層が連続する。一方、トレンチ中央部から北半部の断面③～⑤の部分での下層の堆積状況は、長期間の滞水状況を示す極めて漸移的なものであることから、SD 01から取水された後、本遺構内で意図的に溜め置かれたものと見られる。下層において実施した花粉化石の分析では、スイレンやヒシ属などの浮葉植物やフサモ属などの沈水植物が多く見出されていることも、淀んだ状態で堆積環境を想定させる(第4章第3節参照)。

また、SD 01との接点から西へ延び、溝状を呈する部分がある。Ib-4トレンチでは、この延長を確認していないことから、未調査となった現水路下にSD 01とは別の条里坪界溝が存在し、そこからも取水されていた状況が想定できる。

断面③～⑥の上層は、下層とは明瞭に区別される。本層の下場が細かな単位で凹凸を見せることや、ラミナ状の自然堆積の痕跡が一切見られないことから人的な擾乱が及んでいると見られる。また、西岸部の上位を一部削り込むように見られることから、本遺構の埋没がかなり進んだ段階の耕作土と考えられる。

出土遺物

遺物は、セクション間に設定した任意の区画と層位毎に取り上げた。全体として出土量は乏しく、特に集中する箇所も見られない。遺物組成は、土師質土器足釜・鍋などの煮炊き具が主体である。

359～364は、SD 01との共有部分の上層からの出土遺物である。359は土師質土器杯である。360は土師質土器播鉢の底部片と見られ、底部外面には糸切り痕が見られる。361.362は土師質土器足釜の口縁部片、364は同脚部片である。363は土師質土器把手付鍋。

365～370はB区画下層からの出土遺物。365は口縁部があまり湾曲しない土師質土器鍋。366～368.370は土師質土器足釜の口縁・脚部片である。366は脚部が上向きに施される。368は脚部の形態から国分寺楠井窯産の可能性がある。369は土師質土器播鉢の底部片である。371～380は、B区画の上層から出土した遺物である。371～376.380は土師質土器足釜である。371の土師質土器足釜は、やや上向きに肉厚な脚部が施される。376は内面に密なハケ調整を留めるが、大半の足釜の内外面はナデ調整を基本とする。377.378は土師質土器鍋の口縁・体部片である。379は土師質土器播鉢であり、口縁形態や体部外面に残る接合痕の特徴から、国分寺楠井窯の製品と考えられる。

381～387はC区画下層から出土した一群である。381～384は土師質土器足釜である。385は把手部が失われているが、口縁部下の退化した鈎状の突起から土師質土器把手付鍋と考えられる。386は瓦質焼成に近い播鉢であり、口縁形態・体部外面の接合痕から国分寺楠井窯産と見られる。387は土師質土器鍋口縁。

388.389はC区画上層からの出土。388の土師質土器足釜は矮小な鈎部を施す。389は備前焼の底部片。

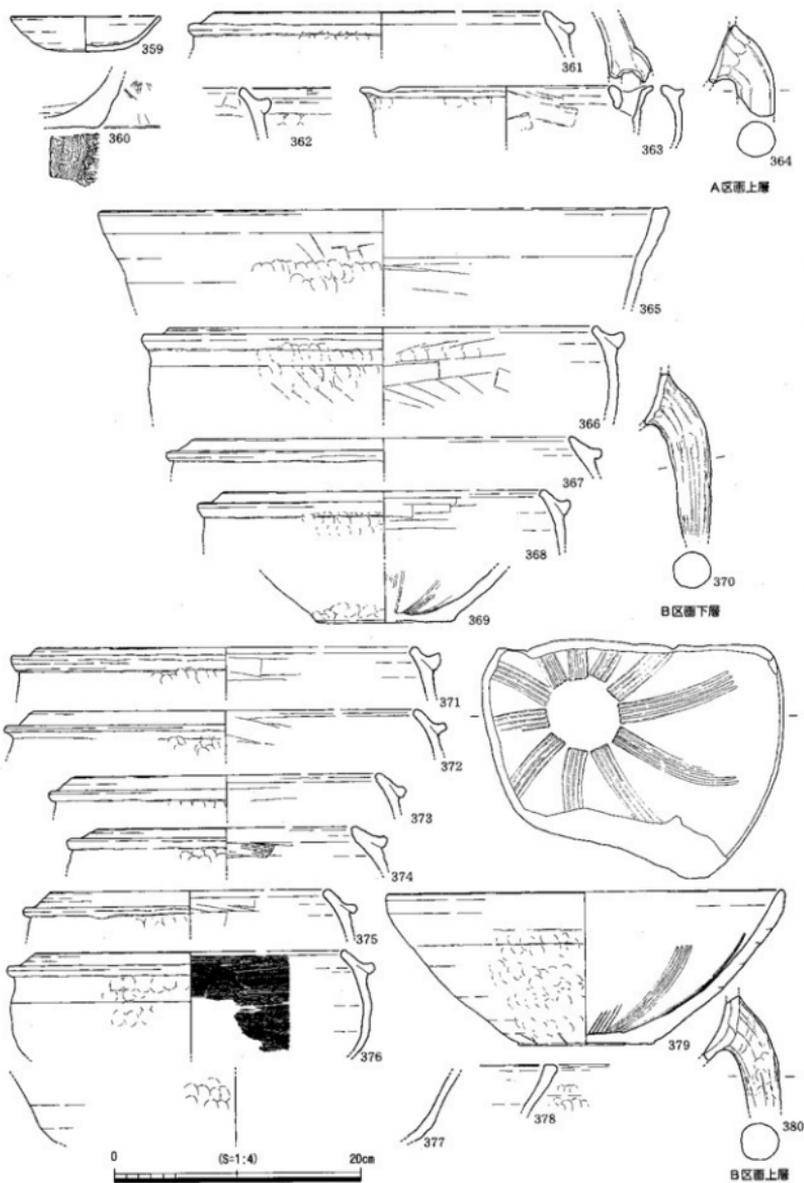


図58 I区SX01出土遺物 その1

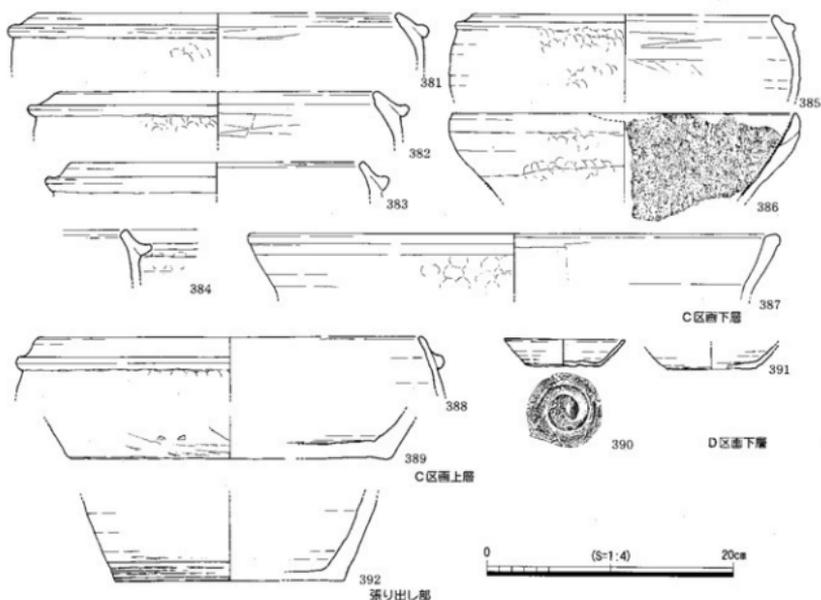


図59 I区SX01出土遺物 その2

390.391はD区画下層からの出土。390.391は土師質土器杯であり、390は底部外面に回転ヘラ切り痕と板状圧痕が見られる。392は、北岸の溝状張り出し部から出土した須恵器壺底部片である。底部に接した胴部外面にハケ状工具による掻き取り痕が見られることから、十瓶山窯産と見られる。

出土遺物の年代は、必ずしも層位に対応したものとは言えない。既往の編年と照合する際に基準となるものを列挙すれば、土師質土器杯 359.390は14c前葉の年代が想定される佐藤竜馬氏の空港跡地遺跡編年Ⅱ-5期（佐藤）に、桶井窯産の可能性のある土師質土器鉢鉢 379.386は、口縁部の稜線が退化した尖り気味の形態を示すことから、15c中葉～16cの年代間が想定される同氏の桶井窯編年Ⅲ期に比定されるものと考えられる。また、北岸の溝状張り出し部から出土した須恵器壺は、14c後葉の年代が想定される同氏の十瓶山窯編年Ⅲ-4期の所産である可能性が高い。363の土師質土器把手付鍋も15c頃の所産と考えられよう。

堆積状況から想定した、長時間に及ぶ埋没状況が出土遺物の時間幅に現れているものと考えられる。出土土器の帰属時期から、本遺構は14世紀前葉頃の埋没開始と、16c前葉の最終埋没を想定しておく。

SX02

平面形

Ic-1.3トレンチで検出した大形の落ち込みである。Ic-1トレンチでは、条里坪界線上に位置するSD03と3m程の間隔を保って東西方向に並走する。Ic-1トレンチ西方のIc-3トレンチにおいても確認されており、更に西へ延びるものと見られる。Ic-1トレンチでは、上面幅7.6m残存深度0.8mを測り、断面形は逆台形に近いが、最深部は北側へ偏った位置に設定され、テラス状の平坦面をもつ南側の立ち上がりには比べ北側の傾斜がきついのとなっている。

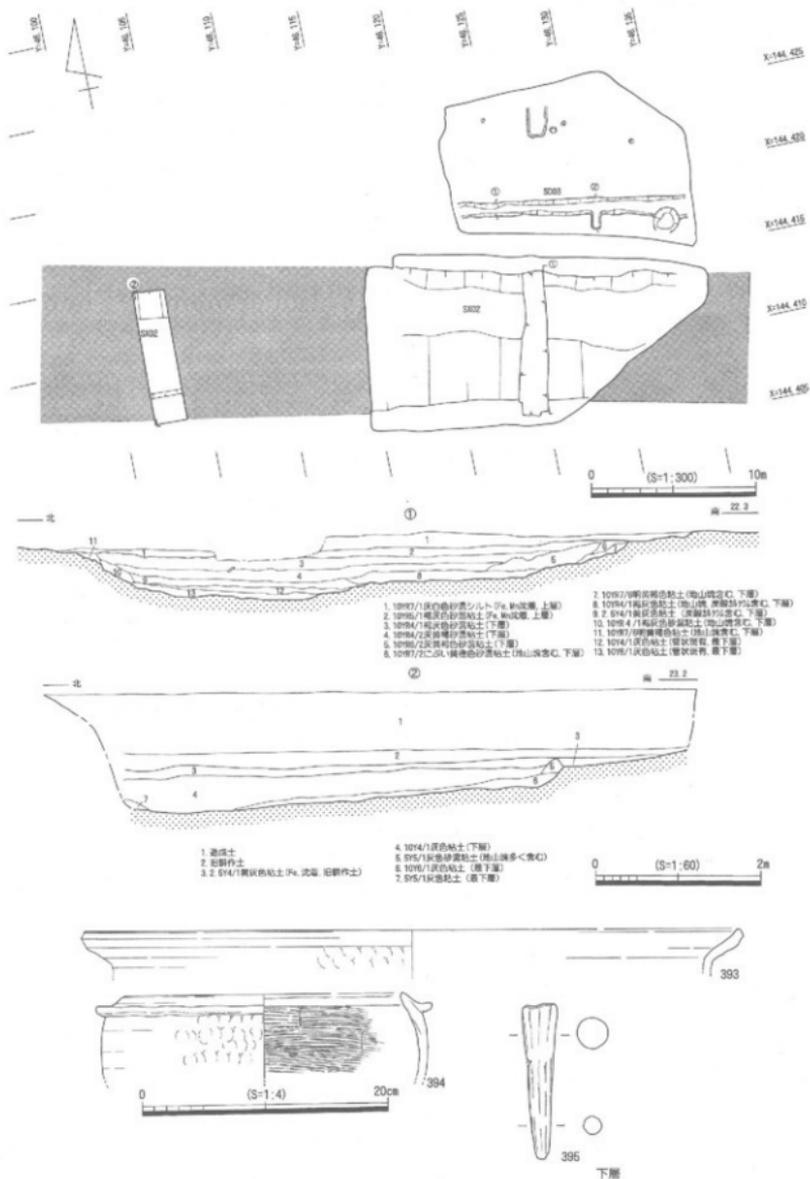


図60 I区SX02平・断面及び出土遺物 その1

I b-1トレンチから延びる条里坪界溝と考えられるSD 01との接点の状況は不明確なもの、現状地割の観察からはI b-1トレンチから西へ60m程の地点で90°南へ折れると想定される(第4章第3節参照)。

堆積状況

埋没土は上・下層に大別されるが、下層の中での層界は明瞭なものではない。灰黄色系の粘土が漸的に堆積しており、淀んだ滞水状況に長期間あったことが想定される。この堆積状況はI b-1トレンチのSX 01に酷似している。上層は、下層に細かな凹凸が見られること、層内に自然堆積を示すラミナを一切認めないことから、人的擾乱を受けた層準と見られる。この上層の状況もI b-1トレンチSX 01と酷似する。

出土遺物

393～395はI c-1トレンチの下層から出土した一群である。393は土師質土器鍋口縁、394は土師質土器足釜片、395は同脚部片である。393は口縁部形態から、国分寺楠井窯のⅡ-2期の所産と考えられ14c中葉～後葉の年代が想定される(佐藤1996)。394は、口縁形態と内面の横ハゲ調整の残存から、同窯のほぼ同時期のもの

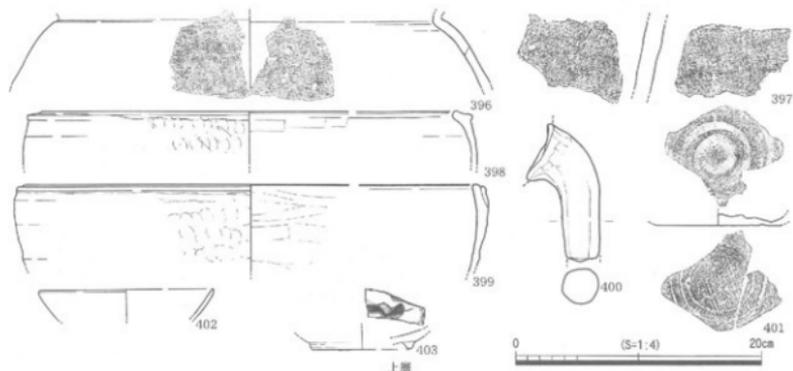


図61 I b-1トレンチSX02出土遺物 その2

のと考えられる。

396～403は上層出土遺物である。396,397は備前焼甕の胴部片、398,399は土師質土器把手付鍋の口縁部片、400は土師質土器足釜の脚部片である。401は土師器杯の底部片と考えられ、見込み粘土紐巻上げに伴う凹凸を明瞭に留める。類例に乏しく所属磁器については不明である。402は中国白磁皿の口縁片の可能性がある。403は肥前系磁器の皿であり、17c後半の所産と考えられる。

出土遺物の年代から、本遺構は14c中葉～後葉には掘開され、16c頃にはほぼ埋没が完了していたものと考えられよう。また、同様の堆積状況を示すI b-1トレンチSX 01とほぼ合致するものである。

SD 01

I b-1トレンチ西部を南北に延びる直線溝であり、現状の条里型地割の坪界線に合致する。トレンチ南半部ではSX 01と併走する形で北流し、SX 01が東へ屈曲する部分に対応して、東へ5m程突出する部分がある。この突出部の機能は不明ながらも、SX 01の平面プランと何らかの関わりをもって設定されたことがうかがえる。突出部北側では、上面幅が3mを超えるやや大形となっており、突出部の機能と関連するものと見られる。トレンチ南部ではSX 01と接する箇所が存在する。堆積状況からは、本溝からSX 01へ導水していたことが推定されるが、この共有部を越え

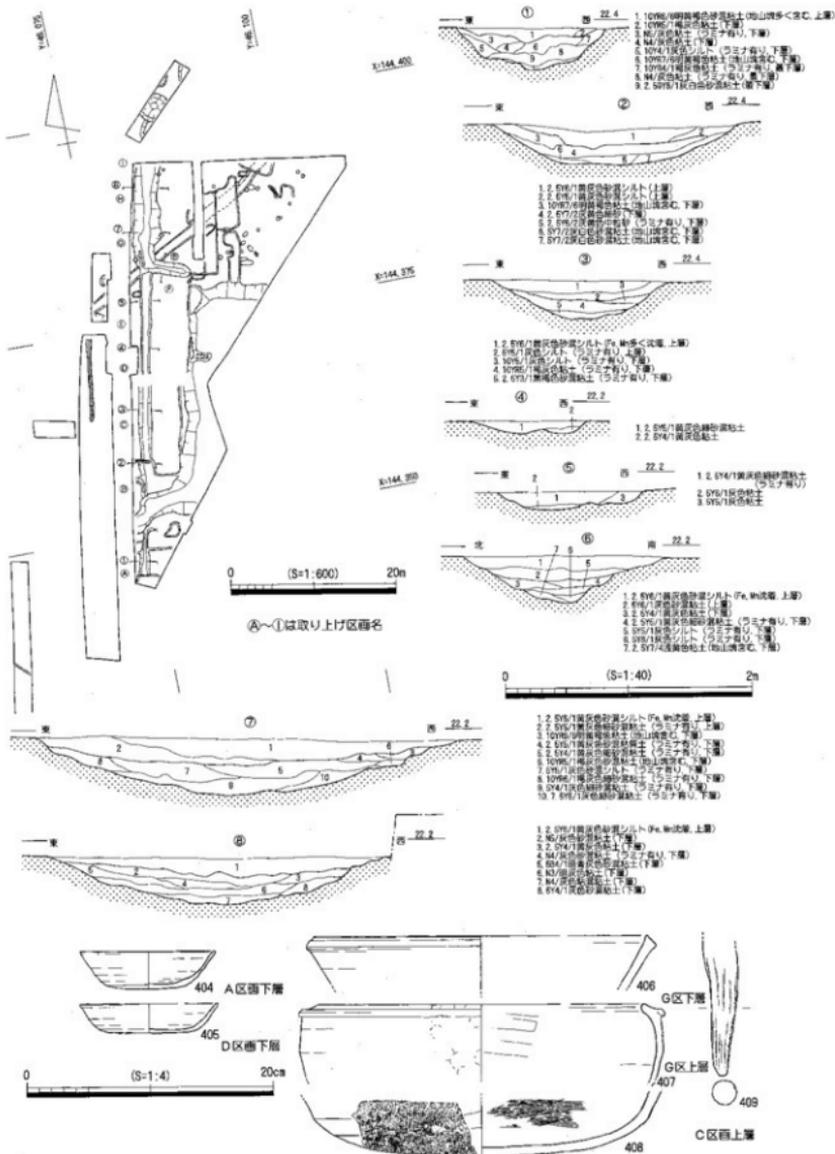


図62 I区SD01平・断面図及び出土遺物 その1

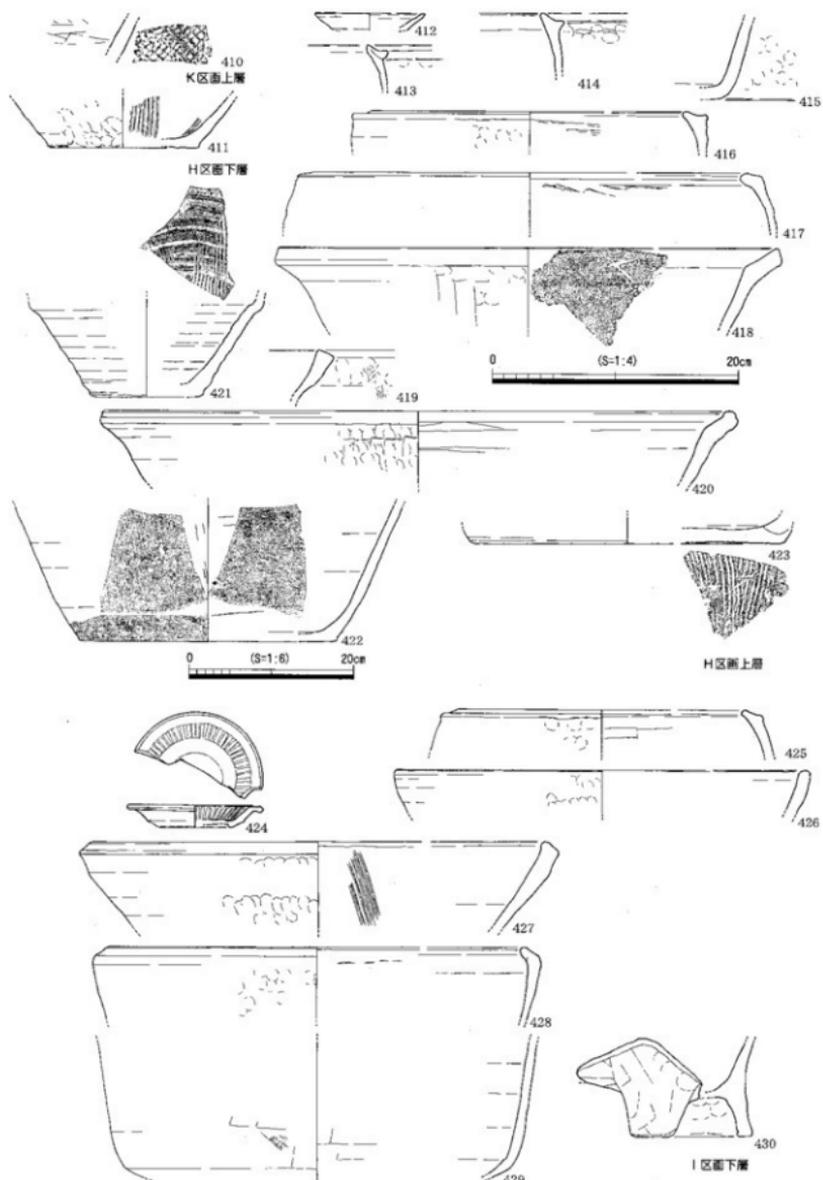


図63 I区S001出土遺物 その2

て本溝が更に北へ伸びることから、木樋状の施設が存在していた可能性が高い。

本溝の北側延長は、I c-4トレンチで確認された他、平成13年度の果道太田上町国分寺線改良事業に伴う県文化行政化課の工事立会でも確認されていることから、現状の桑里型地割に沿って事業地外の北へ延びるものと考えられるが、I c-1トレンチから西へ延び同時並存の可能性が高いSX 02との関係は明らかにできなかった。

堆積状況は、SX 01との共有部南側のAラインの断面で上層に地山塊を多く含む埋戻しが見られる以外は、基本的に流水堆積層で埋没している。また、大別して上下2層に分割されるが、上層には顕著なラミナの発達が見られないことから、廃絶時に漸移的な自然埋没が生じていたものと考えられる。

遺物は、断面間の区画で層位毎に取り上げた。404はA区画下層から出土した土師質土器杯である。法量・形態から空港跡地遺跡における佐藤電馬編年Ⅱ-5期（佐藤2000）に相当し、14c前業の年代観が想定されている。機能時の流水堆積層から出土していることから、本溝の開削年代を示すものと考えられる。405はD区画下層から出土した土師質土器杯。年代的には404と同様の14c前業～中業の所産と考えられる。406はG区画下層から出土した須恵器捏針であり、須恵器質の焼成と口縁形態から十瓶山窯産の可能性が高く、同氏編年Ⅱ-5期14c前業に比定される。407はG区画上層から出土した土師質土器把手付鍋の口縁片。408は内面に横ハケ調整をとどめることから、土師質土器足釜の底部片と考えられる。409は同足釜の脚部片である。

410はK区画上層から出土した須恵器釜の体部片である。411の土師質土器播鉢底部はH区画下層からの出土である。412～423はH区画上層から出土した一群である。412は土師質土器杯口縁片であり、口縁端部外面には「口縁一体部ナデ手法」（佐藤2000）が見られ、扁平な体部から15c以降の所産と考えられる。413.414.416は土師質土器把手付鍋口縁部。415.417は脚台付の土師質土器火鉢の体部・口縁片と見られる。418の土師質土器鍋の口縁部内面には「×」のヘラ記号が見られる。419は形態から国分寺楠井窯産の土師質土器鍋と考えられ、同窯の編年による15c中業～16c前業の年代が与えられるⅢ期の所産と考えられる（佐藤1996）。422.423は備

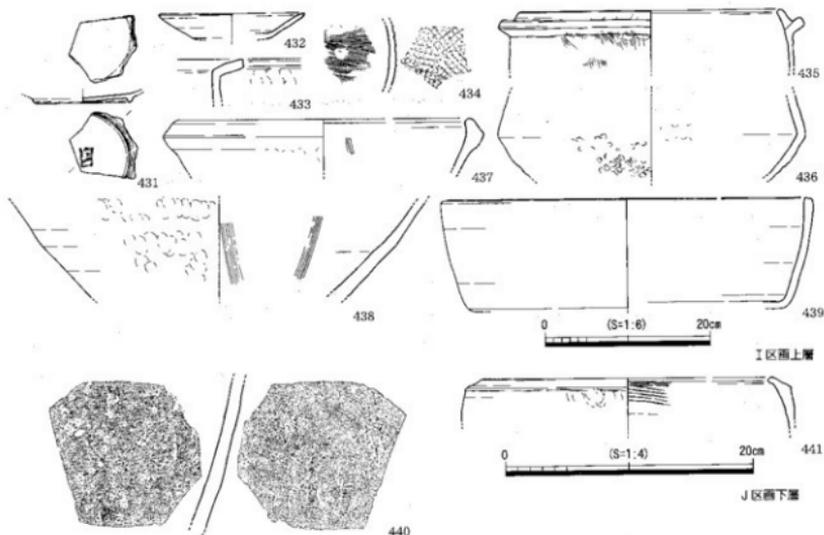


図64 I区SD01出土遺物 その3

前焼壺の底部片である。

424～430はI区画下層から出土した一群である。424は瀬戸美濃系陶器折縁皿であり、大窩IV期第7小期の所産と見られ、16c後葉～末の所産と考えられる(藤沢1993)。425は土師質土器把手付鍋、426.427は土師質土器播鉢の口縁部である。428～430の土師質土器火鉢は同一個体である可能性が高い。

431～439はI区画上層から出土している。431は中国産白磁皿であり、体部の折損面に漆接ぎの痕跡が見られる。高台内に銘の存在が確認できるが、判読できない。432は土師質土器皿であり、口縁端部には「口縁→体部ナゲ手法」(佐藤2000)が確認できる。433は土師質土器鍋口縁部片。434は龜山焼壺体部片である。435は土師質土器足釜であり、面取りされた方形を呈する鋳部の形態から14c前半代のもつと見られる。436は同足釜体部片である。437は土師質土器播鉢口縁片であり、確実に面取りした肉厚な口縁部形態から、14c代の所産と見られる。439は土師質土器火鉢の口縁から体部片である。

440.441はJ区画下層から出土した一群である。440は備前焼壺の体部片、441は土師質土器把手付鍋の口縁部である。

既往の編年と対照できる資料として、土師質土器杯404や瀬戸美濃系陶器皿424の年代観から、本溝の掘開が14c前葉に行われ、16c末葉にはほぼ埋没が完了したものと推定したい。また、密接な関連が想定されるSX 01.02とほぼ同時並存したものと考えられる。

SD 03

現状での条里型地割の境界線となるIc-2トレンチ南部を、SX 02と並走する形で検出した溝である。上面幅0.8m残存深度0.2m程の小規模なものであるが、上位にはかなり削平が及んでいる点を考慮する必要がある。SX 02との間隔は、現状で3m程を測る。トレンチ中央やや東よりの部分では、南側に短く突出する箇所が見受けられるが、

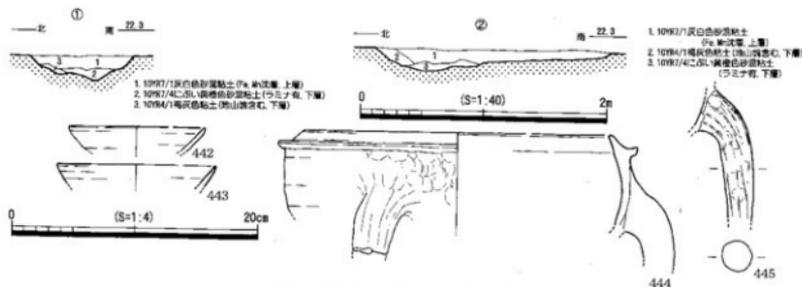


図65 I区SD03断面及び出土遺物

機能は不明である。埋没土はラミナが発達する下層と、それが顕著ではない上層に区分される。

出土遺物には、土師質土器杯(442.443)土師質土器足釜(444.445)が見られる。これらはすべて、上位の埋没土中より出土している。土師質土器の杯や足釜の形態から、圓分寺楠井窯におけるII-1期、空港跡地遺跡におけるII-5期に比定され、14c前葉には埋没が開始されたと考えられる。上層は削平が及ぶことから、下限は不明であるが、同じ条里坪界溝であるIb-1トレンチSD 01とほぼ同様に、16c末までには埋没が完了していたものと見られる。

SD 04

Ib-4トレンチで確認した上面幅0.5m残存深度0.1を測る小溝である。本トレンチは近年の耕地開発に伴う攪乱

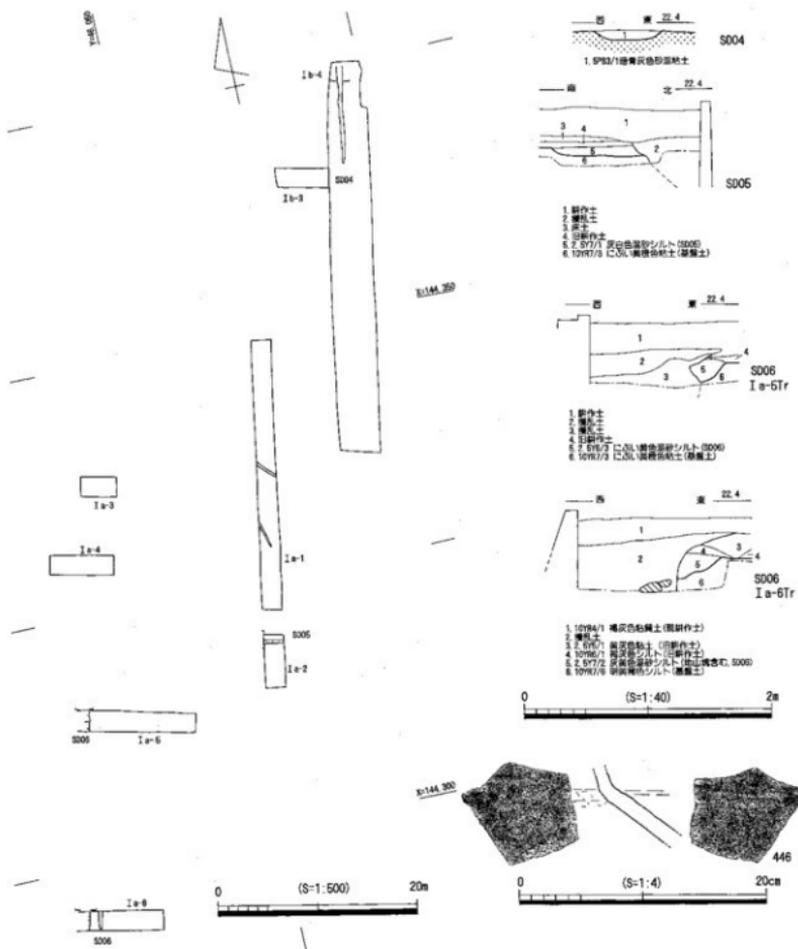


図66 I区SD04~06平・断面及び出土遺物

が多く見られることから、トレンチ北端から延長 11 m程を確認するに留まった。現状の条里型地割の坪界線に方向・位置が合致することから、条里坪界溝である可能性も残る。出土遺物は皆無であったが、埋没土の特徴が中世段階の遺構と比べて、古相を示すことから、概ね古代期の所産と考えられる。

SD 05

I a-2トレンチで確認した溝である。予備調査時のトレンチ調査で終了しているが、近世以降の耕地化や現水路に伴う攪乱を免れて、幅 0.6 m深さ 0.1 mの溝状の落ち込みが辛うじて確認できる。位置的には、I c-2トレンチSD

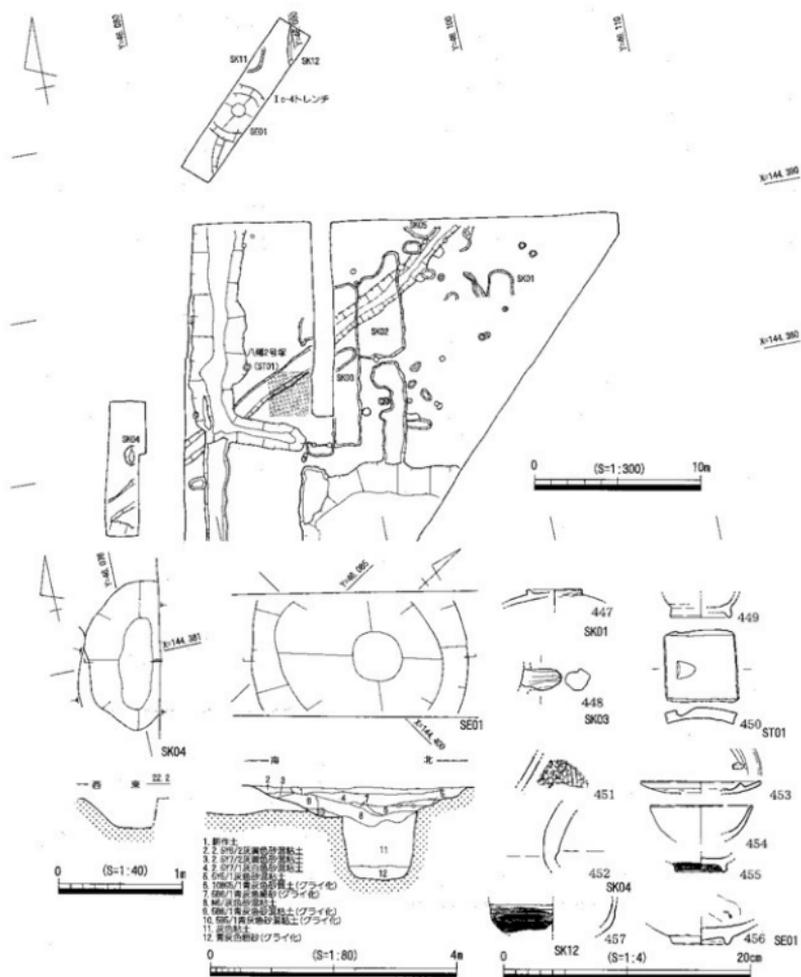


図67 I区SK04、SE01他平・断面及び出土遺物

03より一町分南の東西方向の条里坪界線上に位置することとなる。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴が同じ条里界溝であるI b-1. I c-2トレンチSD 01・03と同様の特徴を示すことから、14c前葉～16c末頃に機能していたものと考えられる。

S D 06

I a-5.6トレンチで確認した溝である。予備調査段階のトレンチ調査で保護措置を終了しているが、南北方向の条

里型地割坪界線であるIb-1トレンチSD 01 西側の現水路より33 m程西側に離れた位置を、条里型地割に合致する方向で南北に流れる現水路に重複した状態で検出している。近世以降の耕土層や現水路に伴う攪乱を受けているが、幸うじて溝東肩部と考えられる残存深度 0.2 m程の落ち込みを確認している。

出土遺物には、備前焼裏の肩部片が出土しているが、詳細な時期決定に耐えられるものではない。埋没土の特徴の類似から、他の条里型地割に伴う溝と同様に14 c前葉～16c末に機能していたものとする。

SK 04

Ib-2トレンチで検出した土坑である。東側は現水路に伴う攪乱により消滅しているが、現状で長軸 1.2 m短軸 0.6 m以上残存深度 0.3 mを測る。出土遺物には、榎格子目タタキが残る須恵器甕胴部片(451)須恵器甕頸部片(452)がある。これらの遺物は概ね8～9世紀の所産と考えられ、本遺構の埋没を同時期に推定する。

SK 01. 02. 03. 05. 11. 12(近世土坑群)

Ib-1. Ic-3トレンチでは、近世期土坑の土坑群を検出している。これらは、壁面が垂直に落ち底面が平坦なもので遺物の出土が少量にとどまることから、粘土採掘に伴う土坑群である可能性が高い。出土遺物にはSK 01より軟質施軸陶器蓋(447)、SK 03から型合わせとキラコの塗布が認められる土製人形片(448)、SK 12より瀬戸美濃系陶器腰鍔碗(457)がある。

SE 01

Ic-4トレンチで検出した井戸である。直径 3.4 mの円形を呈し、残存深度 1.6 mを測る。断面は2段に落ち込み、テラス下の垂直に落ちる中央部は直径 1.2 mを測る。また、井側等の施設は確認できなかった。

453～456は下層から中層のテラス部分にかけての埋没土中から出土した。出土遺物には、備前焼灯明皿(453)肥前系磁器小杯あるいは仏飯皿(454)瀬戸美濃系陶器腰鍔碗(455)肥前系磁器碗(456)が見られる。これらは、概ね18c～19c初頭に位置づけられるものであり、この年代観を援用して本遺構の廃絶年代を推定しておく。

ST 01(八幡2号塚)

Ib-1トレンチ内には、周知の遺跡として八幡2号塚が含まれる。明治19年段階の地籍図には、現状より10 m程西側の部分に存在していたことが表現されている。調査前の現況は、コンクリート製の祠となっており、この祠撤去後に下部遺構の調査を行っている。祠下部には、近年の所産と考えられる旧表土層と、その下位に基盤層である黄褐色粘土が露出する状態であり、遺構の存在は確認できない。周囲の検出面と比較して、基盤層は祠のあった2m四方の部分が0.3 m程削り残されていることから、周辺の弥生～中世期の諸遺構も最低0.3 mの削平を被っていることとなる。

449.450は、祠下部に残る近年の所産と考えられる耕作土から出土した遺物であり、厳密には伴うものとは断定できない。449は肥前系磁器瓶であり、19c初頭～幕末の所産である。450は瓦質土器七厘の引き戸で明治以降の所産と考えられる。



图68 II区遺構配置

3. II区の調査

概要

II区では大別して中世後半期・近世後半～明治期の遺構を確認している。II b-1トレンチでは、調査区北東部で中世後半期と考えられ耕作溝群を、トレンチ南西部では18c後半を主体とした溝・落ち込みを検出した。これらの溝や落ち込みには、当該期の陶磁器類が多く含まれることから、集落あるいは屋敷に関連したものと考えられるが明確にはできない。II a-1トレンチでは、焼土塊や土師質土器を多く含む大形土坑を2基検出している。また焼土塊には、窯壁片と考えられるものが含まれる。

耕作溝群

II b-1トレンチ北東部で確認した小溝群である。検出段階で幅は0.1 m以下残存深度0.1 m以下のものが多く、検出面の上位は近世以降の耕作土によって削平されている。埋没土の中に地山塊と考えられる小規模な粘土ブロックが多く含まれること、規模・平面・分布状況から畝間の溝であると考えられる。方位は、現在の条里型地割の方向とは合致せず、17°西偏したものにほぼ統一され、遺跡周辺に見られる条里型地割の方向と異なっている。

出土遺物には、須恵器壺胴部片(458)須恵器平瓶胴部片(459)が見られる。これらの概ね古代と考えられる出土遺物の年代観と、遺跡周辺の条里型地割が14c代以降に施工された可能性が高いことから、古代から中世前半期の所産であると考えたい。

SD 01

II b-1トレンチ中央を東西方向に32 mにわたって検出した溝である。上面幅0.6～0.9 m深さ0.1 m以下を測りトレンチ中央部では、削平がきつく消滅している。流下方向は条里型地割に合致し、南方のI c-1トレンチに想定される坪界線より北へ51 m程離れた部分に位置し、ほぼ一町を2分することとなる。

出土遺物及び切り合い関係等の、機能していた時期を推定する材料はないが、近世以降の耕作土に削平されていること、埋没土の特徴がI区SD 01.03に類似することから、14c前葉～16c末にかけて機能していたものと推定したい。

SD 03

近世後半期の遺構が、まとまって見られるII b-1トレンチ南西部で検出した溝である。上面幅2.2 m残存深度0.4 m程を測り、北側に存在する大形落ち込みであるSX 02に接続する。埋没土の特徴は地山塊を少量含む粘土層を主体としラミナの発達は認められない。大別して上下2層に分割されるが、下層には陶磁器類とともに板状の安山岩礫が多く認められる。集落に伴う溝と考えられるが、調査範囲内では建物等は復元できない。

遺物は上下2層に分けて取り上げているが、上下層間で接合する個体も多く見られた。このような個体については、下層に帰属させることを優先し提示している。

下層出土遺物には、陶磁器類として土師質土器小皿(460)京信楽系陶器碗(461)肥前系陶胎染付火入れ香炉(462)肥前系陶胎染付碗(463.464.476)瀬戸美濃系陶器腰鍔碗(465～470)瀬戸美濃系陶器壺茶碗(471)肥前系陶器刷毛目鉢(472.473)瀬戸美濃系陶器鉢(474.475)施釉陶器瓶(477)瀬戸美濃系陶器瓶(478)肥前系磁器瓶(479)肥前系磁器猪口(480)肥前系磁器油壺(481)瀬戸美濃系磁器皿(486)肥前系磁器皿(487～490)備前焼瓶(482.483)産地系統不明の焼締陶器(484.485)堺・明石産播鉢(491～493)がある。

これらは、高松城跡西の丸地区の様相編年(佐藤・松本 2002 松本 2003)を参考にすると18c後半～19c前

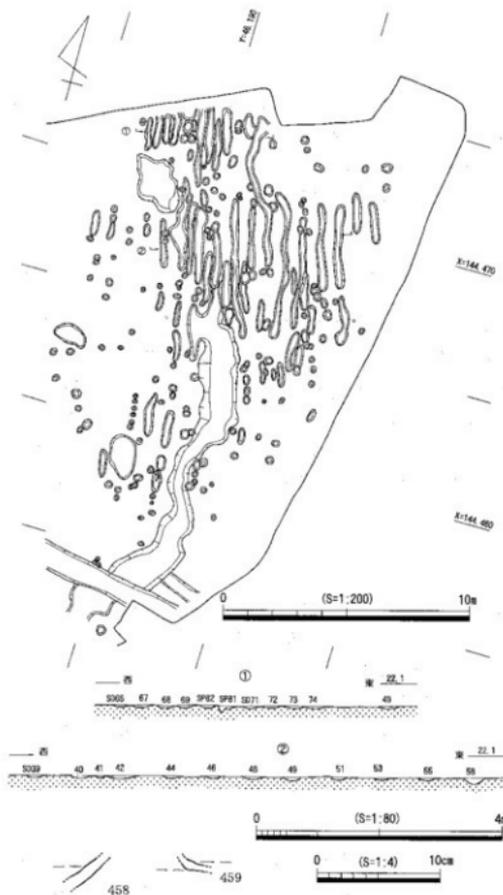


図69 SD29他耕作溝群平・断面及び出土遺物

半のものを主体とするが、477の施軸陶器瓶のみ明治以降に下る可能性がある。

土師質土器には、火鉢(494.495)甕(496)焙烙(497～500)井戸側(501.502)風呂釜(503)が見られる。土師質土器焙烙(500)には型成形が認められ明治以降の所産である。

瓦類には、丸瓦(504.505)平瓦(506.507)がある。508～510は瓦質焼成の土管である。

511～526は上層出土遺物。陶磁器類には、瀬戸美濃系陶器腰鑄碗(511)肥前系陶胎染付碗(512.513)肥前系磁器皿(514)備前焼灯明皿(515)肥前系陶器鉢(516)が見られる。高松城西の丸地区の様相編年(佐藤・松本 2002, 松本 2003)を参照するとこれらは18c前半～19c前半の所産と推定される。

火鉢焜炉類では、瓦質焼成の(517～521)が認められ、517の外面には「千」?、518には判読不明の刻印が見られる。いずれも外面をミガキ締めているが、胎土中に角閃石は認められない。

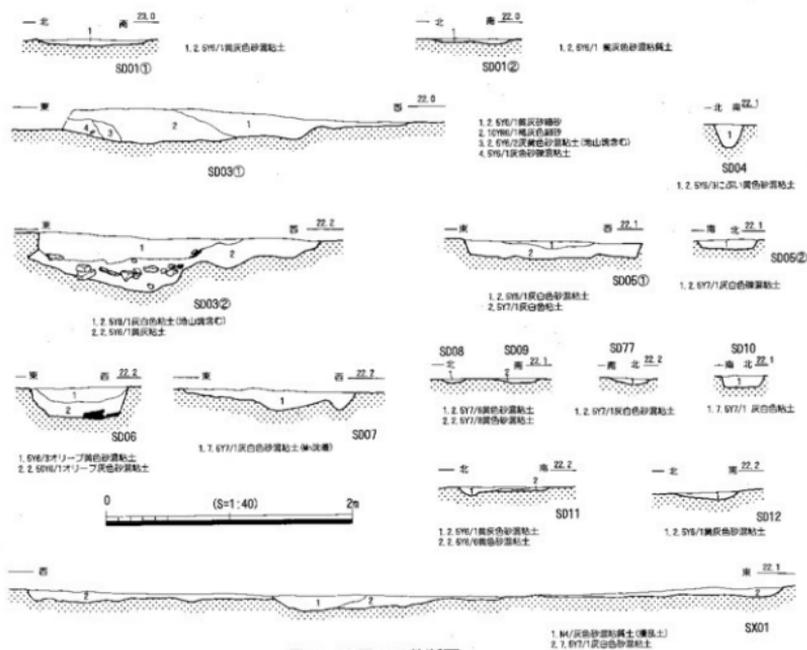


図70 II区SD01他断面

522 ~ 525 はキラコの塗布と凸面に粗い格子目状のタタキが認められる椀瓦である。526 は凝灰岩製の石白であり、肉眼観察では豊島産の可能性がある。

出土遺物の年代観が層位関係と対応していないが、陶磁器類と焙烙の形態から、本遺構は 18c 後半に埋没が始まり、明治期には完了していたものと推定したい。

SD 04

II b-1 トレンチ南西部で検出した小溝である。上面幅 0.2 m 残存深度 0.2 m を測り、U 字形の断面をもつ。東側の SX 01 と切り合い関係が認められ、本溝が先行する。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴や周辺遺構の状況から 18c 後半 ~ 明治期の所産であると考えられる。

SD 05. 10

II b-1 トレンチ南西部で検出した溝である。上面幅 1.4 m 残存深度 0.2 m 程を測り、トレンチ南壁から 6 m 程北へ伸び、東へ直角に折れる。この屈曲部分では枝状に小溝が派生し、調査時に小溝に対して SD 10 の遺構番号を与えているが、切り合い関係はなく同時並存するものと見られる。

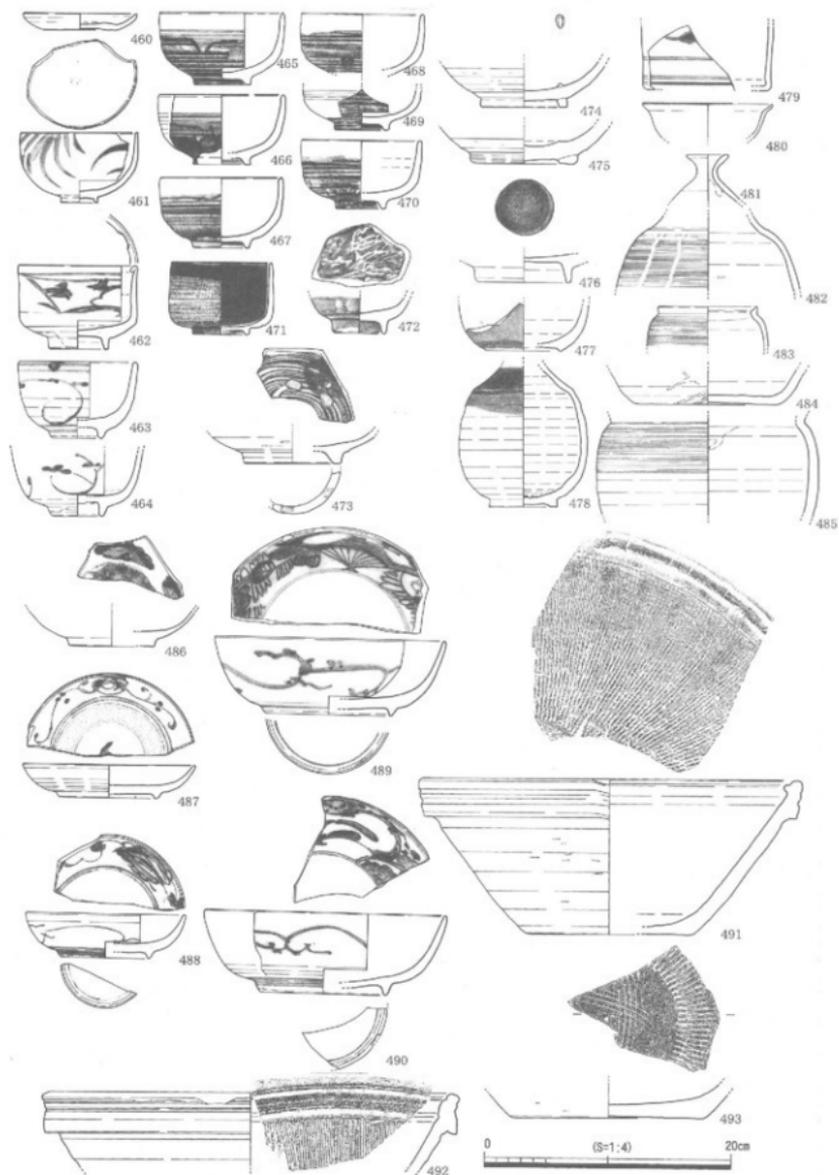


図71 II区SD03下位出土遺物 その1

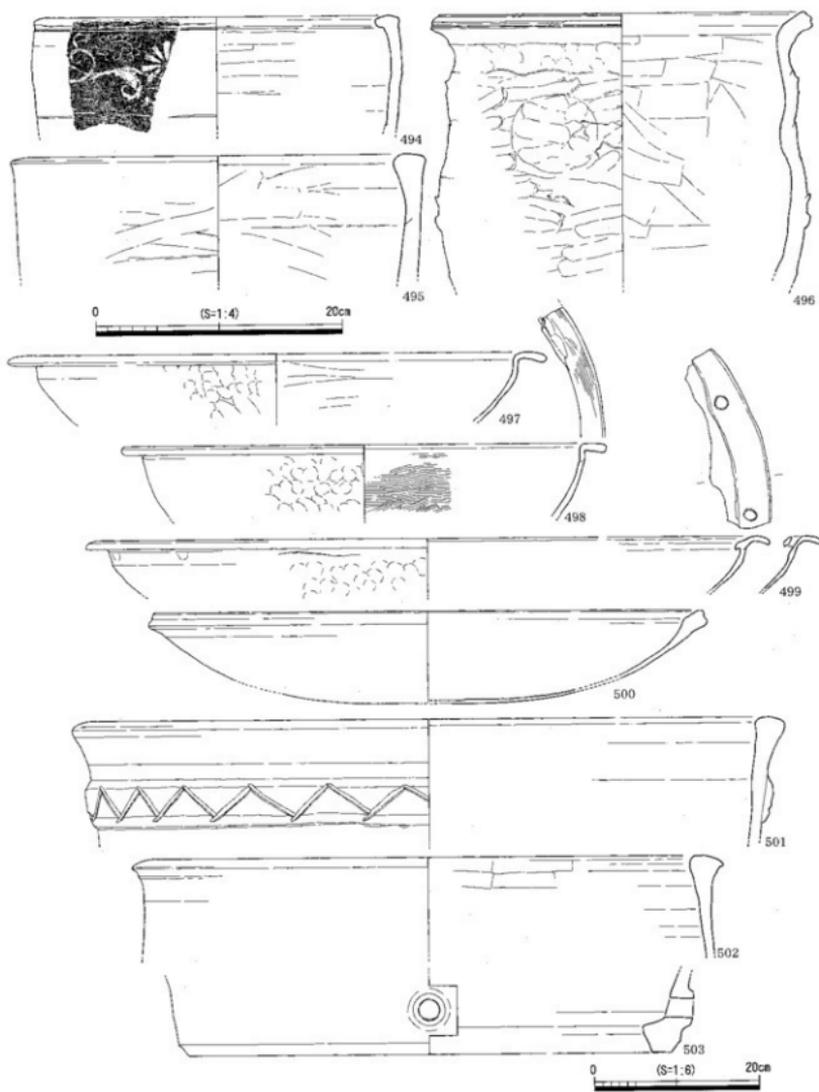


図72 Ⅱ区S003下位出土遺物 その2

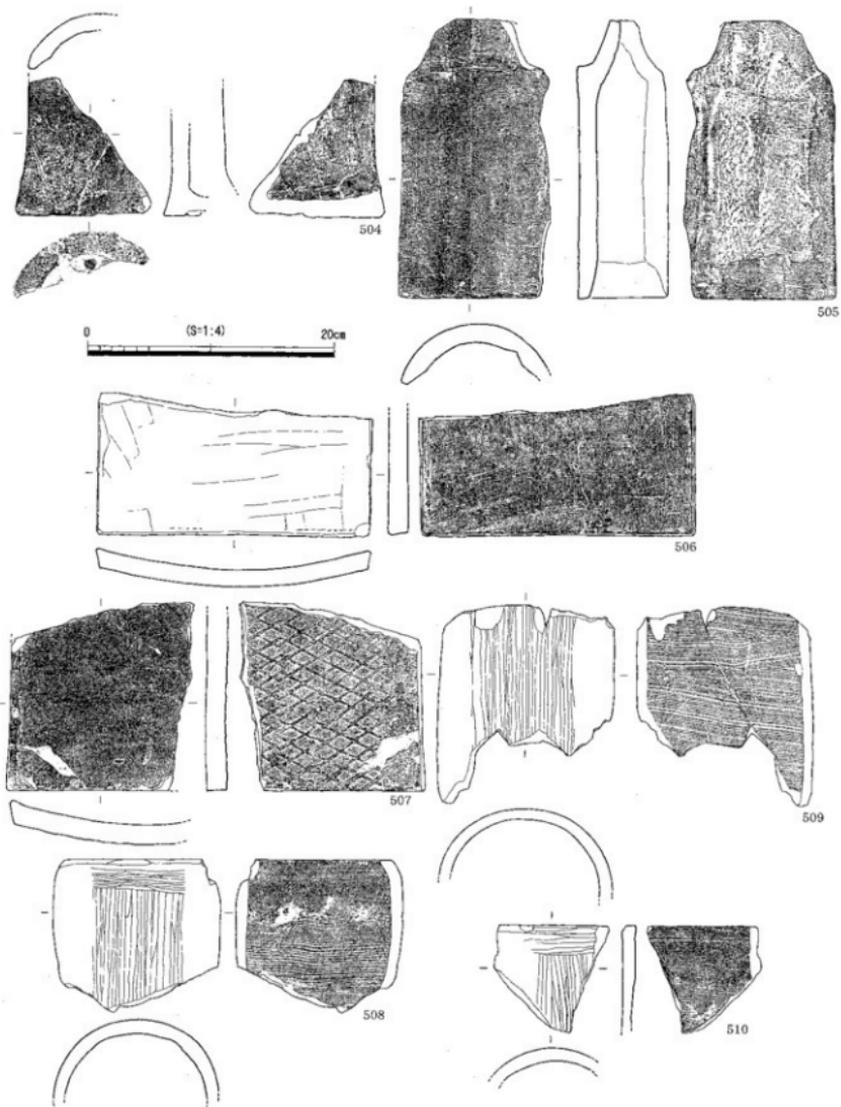


図73 II区S003下位出土遺物 その3

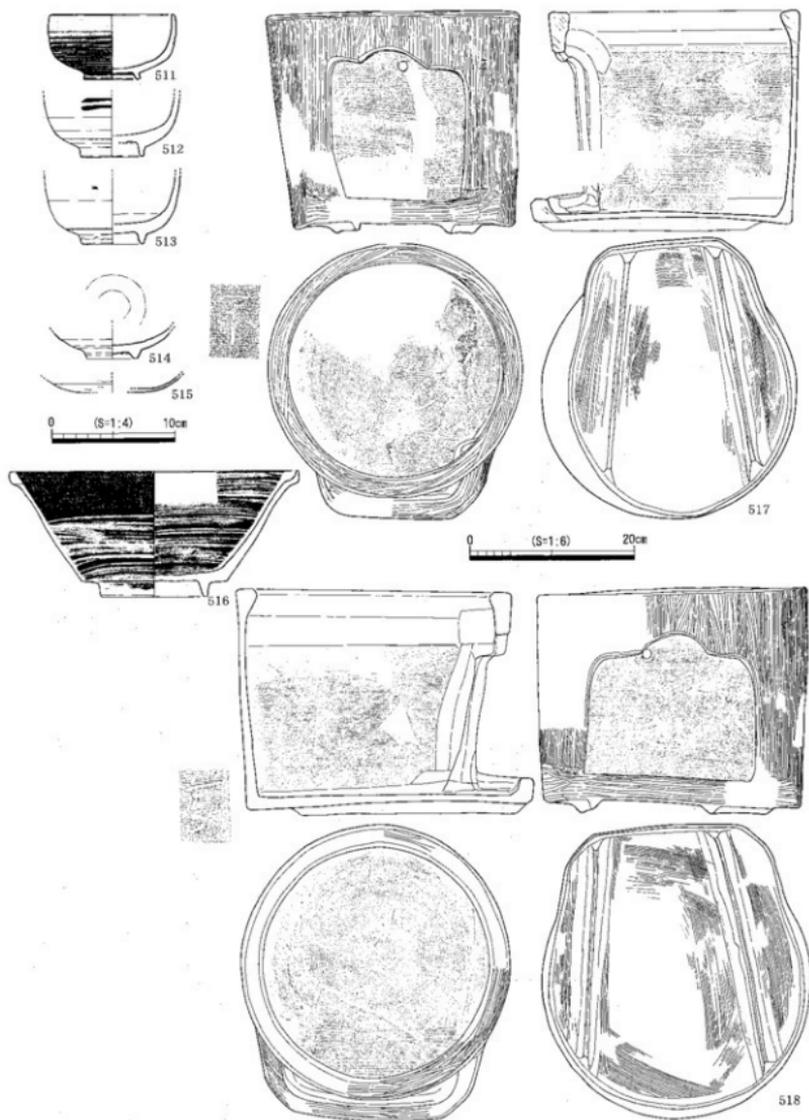


図74 II区S003上位出土遺物 その1

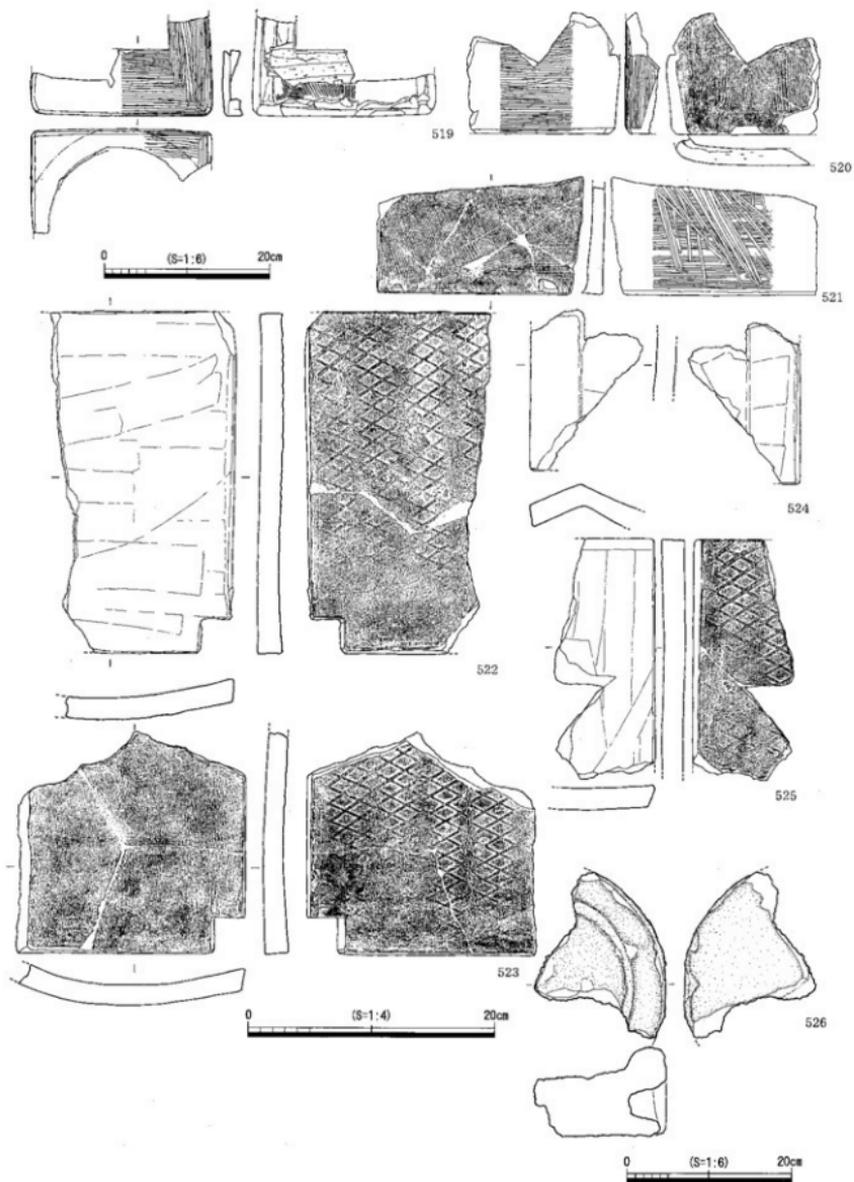


図75 II区S003上位出土遺物 その2

時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴や周辺遺構の状況から18c後半～明治期の所産であると考えられる。

SD 06

II b-1トレンチ南西隅で検出した南北方向の溝である。西側の肩部は未調査部分である現道へ向って伸びるが、現状で上面幅0.8m以上残存深度0.25mを測る。埋没土中には、細かな地山塊が認められる。

出土遺物には、瀬戸美濃系陶器腰鍔碗(527)肥前系陶胎染付碗(528)肥前系磁器蓋(529)軟質施釉陶器片口鉢(530)土師質土器焙烙(531)棧瓦(538)が見られる。陶磁器類は概ね18c後半～19c前半の所産と考えられるが、棧瓦(538)は時期的に下る可能性が高い。また、瓦質土器火鉢片が西側のSD 03から出土した(517.518)と接合した。

SD 07

II b-1トレンチ南西部で検出した南北方向の溝である。上面幅0.6～1.4m残存深度0.2m程を測り、南北両端は攪乱坑によって失われている。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴や周辺遺構の状況から18c後半～明治期の所産であると考えられる。

SD 08.09

II b-1トレンチ中央部で検出した小溝である。両溝とも大形落ち込みであるSX 01を切り込む形で検出していることから、明治期に下る可能性が高い。

SD 77

II b-1トレンチ南西隅で検出した小溝である。西端は未調査部分となるが、現状で上面幅0.2m残存深度0.1mほどを測り、SD 06をきる形で検出している。時期決定可能な出土遺物は見られないが、切り合い関係から明治期の所産と推定される。

SD 11

II b-1トレンチ南部で検出した溝である。大形落ち込みのSX 01と切り合い関係が認められ、本溝が先行する。近世以降の連続耕作によって、現状で上面幅0.7m残存深度0.1m程の規模を留めるに過ぎないが、埋没土の特徴は中世後半期の溝に酷似するものである。

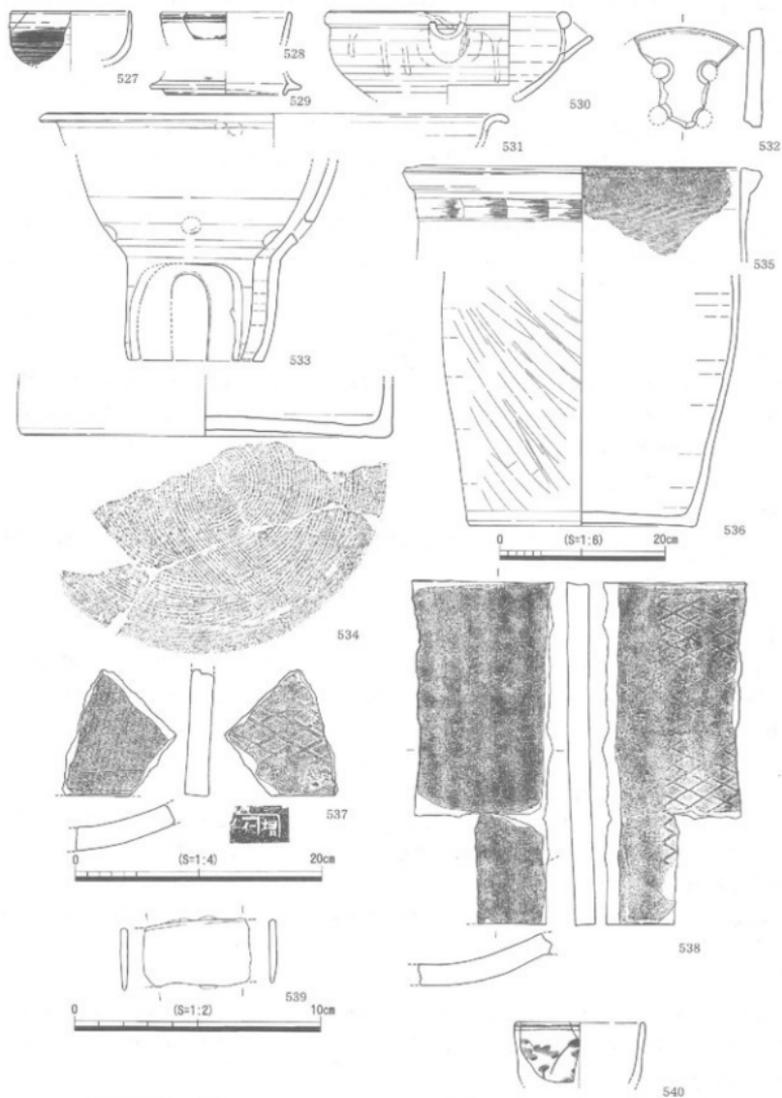
時期決定可能な出土遺物は見られないが、切り合い関係や埋没土の特徴から、中世後半期に属する可能性が高い。

SD 12

II b-1トレンチ南部で検出した小溝である。上面幅0.5m残存深度0.1mを測り、東西方向に延長4mに亘って検出している。出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴が周辺の18c後半から明治期の遺構に類似することから、同時期の所産と推定する。

SX 01

II b-1トレンチ南西部で確認した大形の落ち込みである。北側と南東隅の部分が張り出す東西10m南北12mの長方形の平面プランをもち、残存深度は0.1m程と浅い。立ち上がりは垂直ではないが、平面プランから土取りに



527~531·538 S006
 533~537·539 SX01
 540 SX02

图76 II S006、SX01、02出土遗物

伴うものかもしれない。

出土遺物は少量確認されているが、主なものに土師質土器罎(533.535)土師質土器さな(532)土師質土器壺(534.536)平瓦(537)不明鉄器片(539)が確認できる。537の端面に刻印を認め「檀紙」と読める。

土師質土器の帰属年代は不明確であるが、平瓦(537)から本遺構の埋没を明治以降と推定しておきたい。

S X 02

IIb-1トレンチ南西部で検出した大形落ち込みである。前述したSD 03に接続し切り合い関係はない。残存深度は0.1～0.2m程を測り、北・西側は未調査部分となり平面規模は不明である。土取りと見なしたSX 01と同じ落ち込み状を呈する。SD 03のような溝が取り付くことから、SX 01とは異なった機能をもつものと推定されるが詳細は明らかにできない。

図化可能な出土遺物として肥前系陶胎染付碗(540)が見られるが、SD 03の年代観を援用し18c後半～明治期の所産と推定しておく。

S X 03

II a-1トレンチで検出した大形廃棄土坑である。現代の盛土層直下で検出していることから、当初攪乱土と見誤りトレンチ北側の遺構埋土を掘り下げてしまうという調査ミスを犯している。トレンチ西壁からの推定を交えるならば、長軸5m短軸3.6m程の長方形を呈する大形土坑となる。

壁面はほぼ垂直に落ち、埋没土中には、大形焼土塊や火鉢や焙烙などの土師質土器が多量に含まれる。底面や壁面に被熱痕を一切認めないことから、大形の焼土塊は他所から搬入され廃棄されたものと考えられる。埋没土は、上下2層に分層されているが、巨視的には同一層と見做されるものである。概報時には大形の焼土塊に混じって、かなりの熱変を受けたレンガ状のものが含まれることから、近隣の窯業生産に伴う廃棄土坑と考えられていた。しかし、これらに混じって陶磁器や土師質土器などの日用雑器も存在することから、窯業生産に直接的に関係した廃棄土坑ではないと考えられる。

541は色絵を認める瀬戸美濃系磁器碗であり、明治以降に属するものと見られる。542は肥前系陶器瓶であり、高松城跡西の丸地区の様相編年(佐藤・松本2002、松本2003)を参照すると18c代の所産と推定される。543～545の焙烙は型成形であり、口縁端部の形態が19c前半の年代が想定されている薬王寺遺跡SE 04出土の焙烙(廣瀬編1994、佐藤・濱野1995)と比較して更に後出する要素が見られることから、19cでも更に下の所産である可能性が高い。546～548は土師質土器五徳であるが、現状で使用痕は認められない。549は同さな、550～552は同蓋である。551.552には型成形が認められる。

553～560は土師質土器火鉢。553～557は頸部を突帯状に仕上げ、その上面をハケ状工具で撫で付けたもので、内面には密な横ハケ調整が認められる。554.559の口縁部上面には「谷」の刻印が見られる。560は胴部外面を並行タタキによって成形しており、本遺構出土資料のなかでは異質な存在である。561は器種不明の土師質土器である。562は土師質土器裏底部。以上の土師質土器中には雲母片が多く認められる。

563～573は土管である。563の口縁部上面には刻印が認められるが、判読は不可能である。564～573は外面を粗いハケ調整で仕上げるが、内面調整に差異が見られる。径が8cm前後である564～571.573の内面には、ハケ目状の擦痕が見られるが、施した単位が把握できずに連続して見られることから、機械的な押し出しによって成形された可能性が高い。565.572.573の外面には固定された痕跡を示すと考えられる粘土と植物繊維の圧痕が認められる。574～581は器種不明の一群である。574.576はやや厚みのあるレンガ様を呈し、576には刻印が認められる。577は側面形に反りが認められ、二次焼成を受けた可能性がある。578は一側面に著しい被熱痕がある。



図77 II区SX03平・断面及び出土遺物 その1

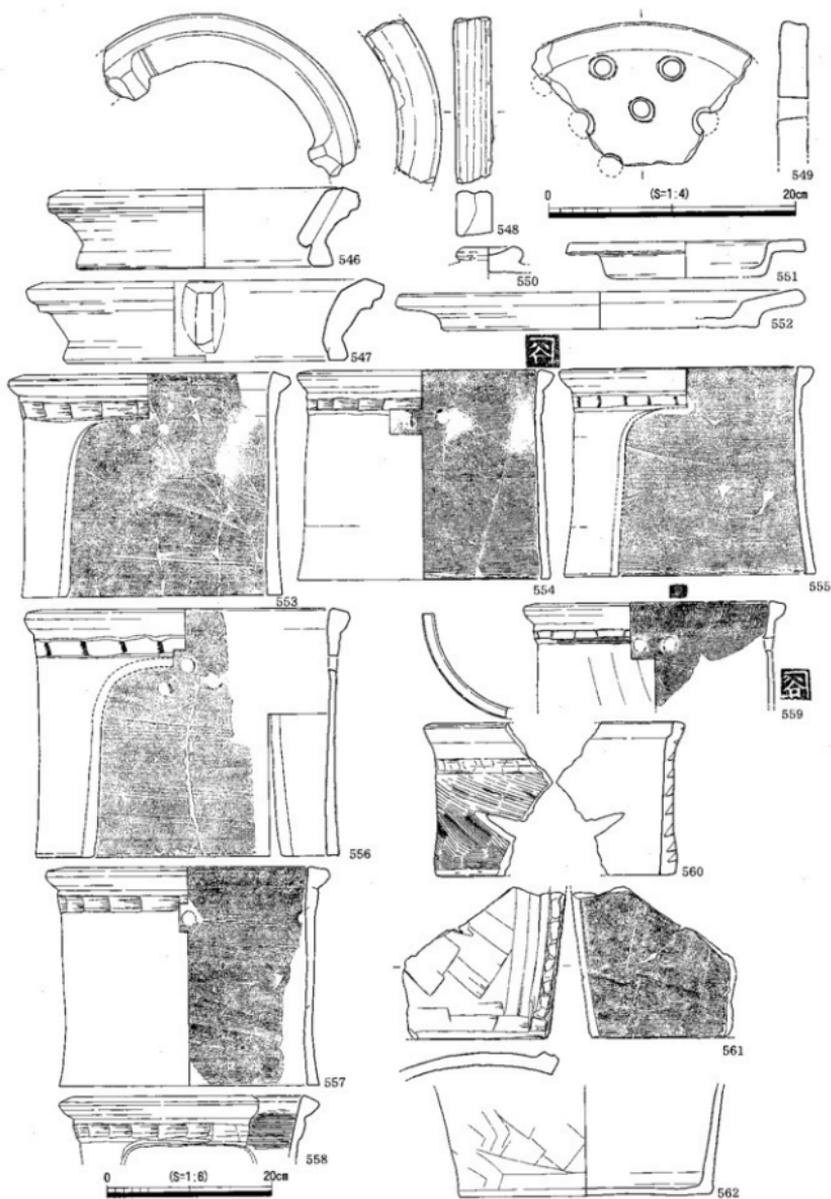


図78 II区SX03出土遺物 その2

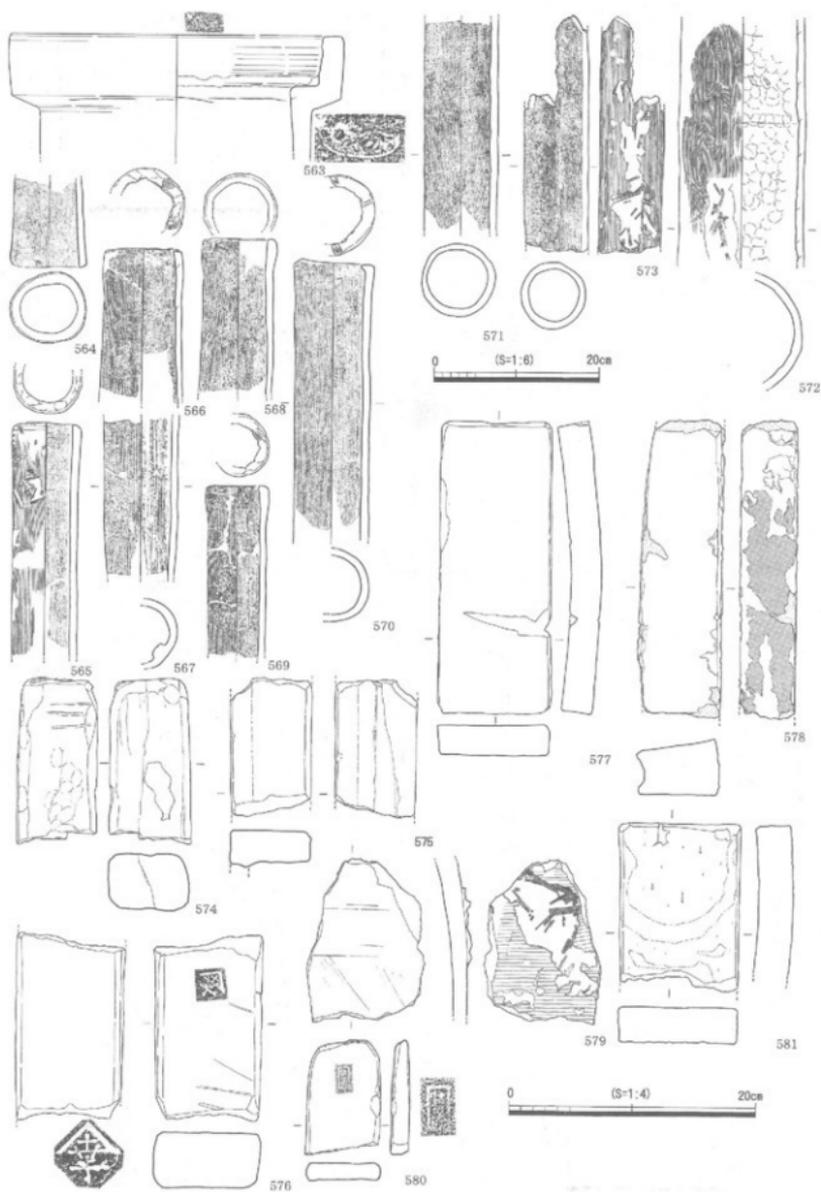


図79 II区SX03 出土遺物その3

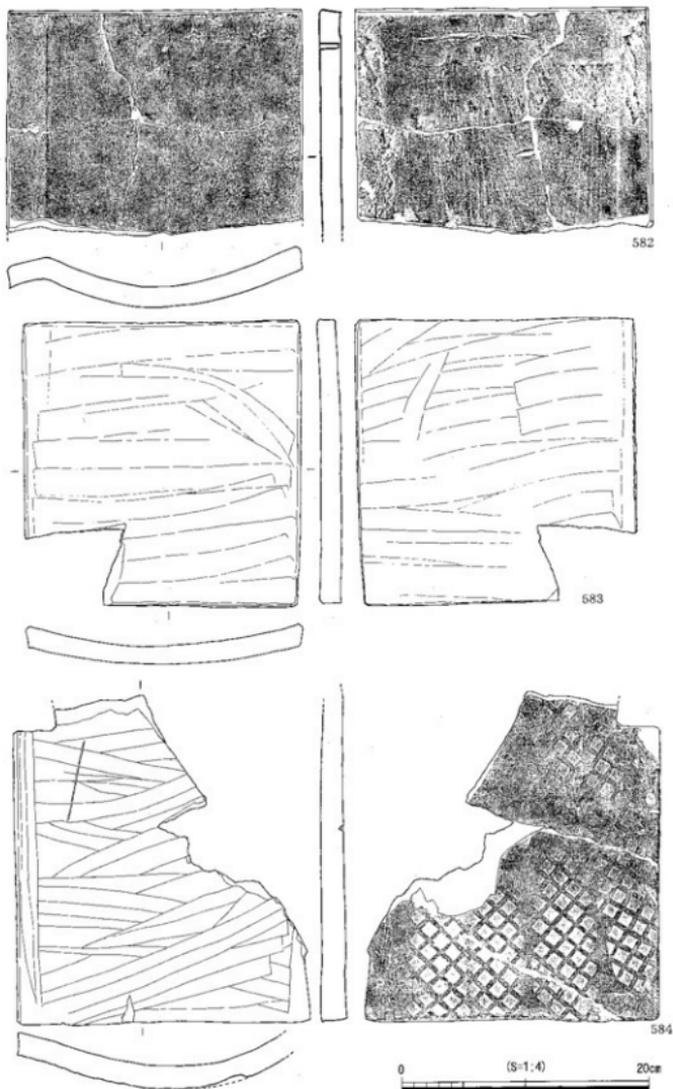


図80 II区SX03出土遺物 その4

579は土師質土器の甕の胴部片と見られるが、固定された痕跡と見られる粘土と植物繊維の圧痕が認められる。580は舌状を呈し、片面に刻印が認められるが判読は不可能である。581は577と同様に、側面に反りが認められ平面に焼けムラ痕と見られる二次焼成の異なった輪状の痕跡が認められることから、置き台の可能性も考えられる。

582～584は平瓦である。585はレンガ状のものに被熱の著しい粘土が付着しているが、現状で窯業関連の遺物かどうか判別し難い。

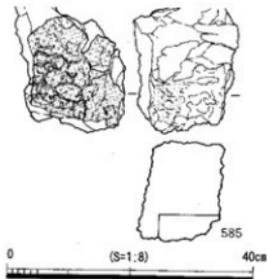


図81 II区SX03出土遺物 その5

S X 04

II a-1 トレンチ東部で検出した大形の廃棄土坑である。

西接するSX 03と同様、北半部を攪乱土と誤認し掘り下げてしまっているが、北・東壁面から復元して長軸9m以上短軸1.5m以上の長方形の大形土坑と考えられる。埋没土には、大形の焼土塊や土師質土器片が多く含まれるが、底面・壁面に被熱痕は認められないことから、SX 03とほぼ同様二次的に廃棄されたものと考えられよう。なお、本土坑にも窯業生産の関連遺物と考えられるものと、土師質土器等の日用雑器類が混在して見られる。

586～588は土師質土器七厘と考えられ、胎土中に雲母片を多く含む。589は土師質土器火鉢、590の土師質土器は器種を想定できない。591は土師質土器さな、592は同五徳である。593～596は土師質土器焙烙であり、すべて型成形が認められ、胎土中に雲母片を多く認める。口縁部形態から、SX 03出土の焙烙と同様に、19c代でも時期的にかなり下るものと見られる。597～601は土師質土器火鉢であり、597～600の口縁部上面には刻印が認められる。597は「一尺四寸モ一」598は「九口モ一」599は「八寸モ一」600は「尺三寸口」と読める(図85に拡大表示)。603.604は土管である。605は瓦質土器炬礎606瓦質土器火鉢である。607の口縁部上面には刻印が認められ、「みまや口口」と判読される。608は土師質土器甕。610.611は土師質土器井戸側であり、610の頭部には植物質の圧痕が認められる粘土が付着する。612は土師質土器甕。613は土師質に焼成されているが、器種不明である。614.615はレンガ状を呈し、615は2面にわたって植物質の圧痕が見られる粘土が付着する。616は舌状を呈し、片面に刻印が認められ、「吉井」と読める。617.618は上下面と片面を除き、3面に著しい被熱痕を留めることから、ロストル状の窯の部材である可能性が高い。

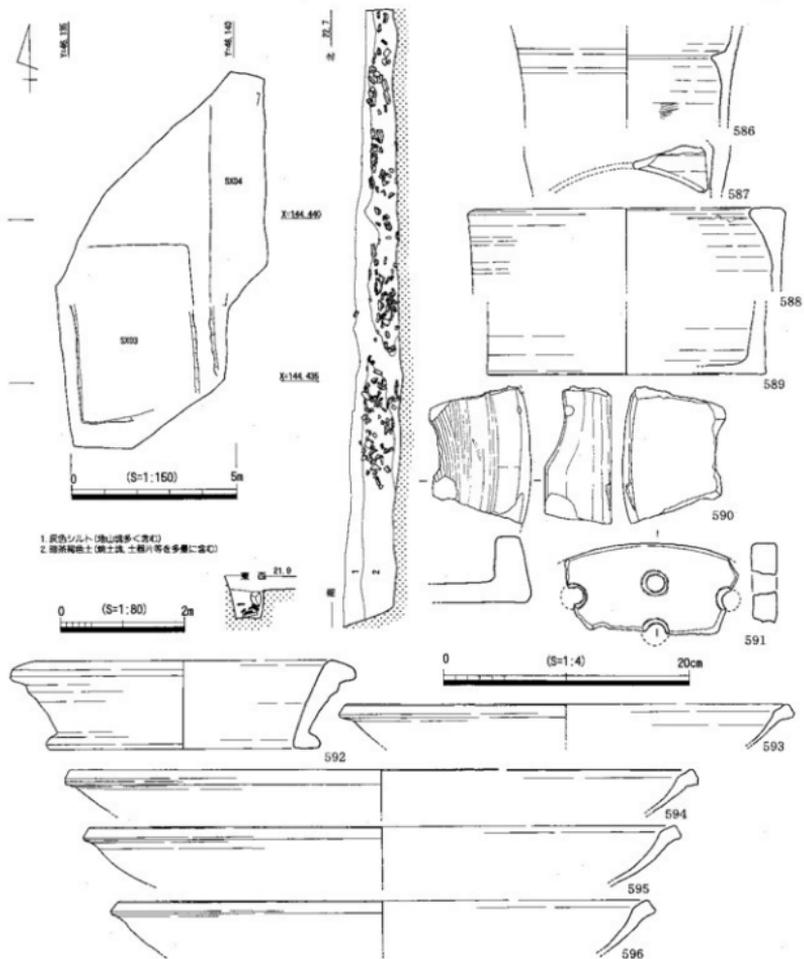


図82 II区SX04平・断面及び出土遺物 その1

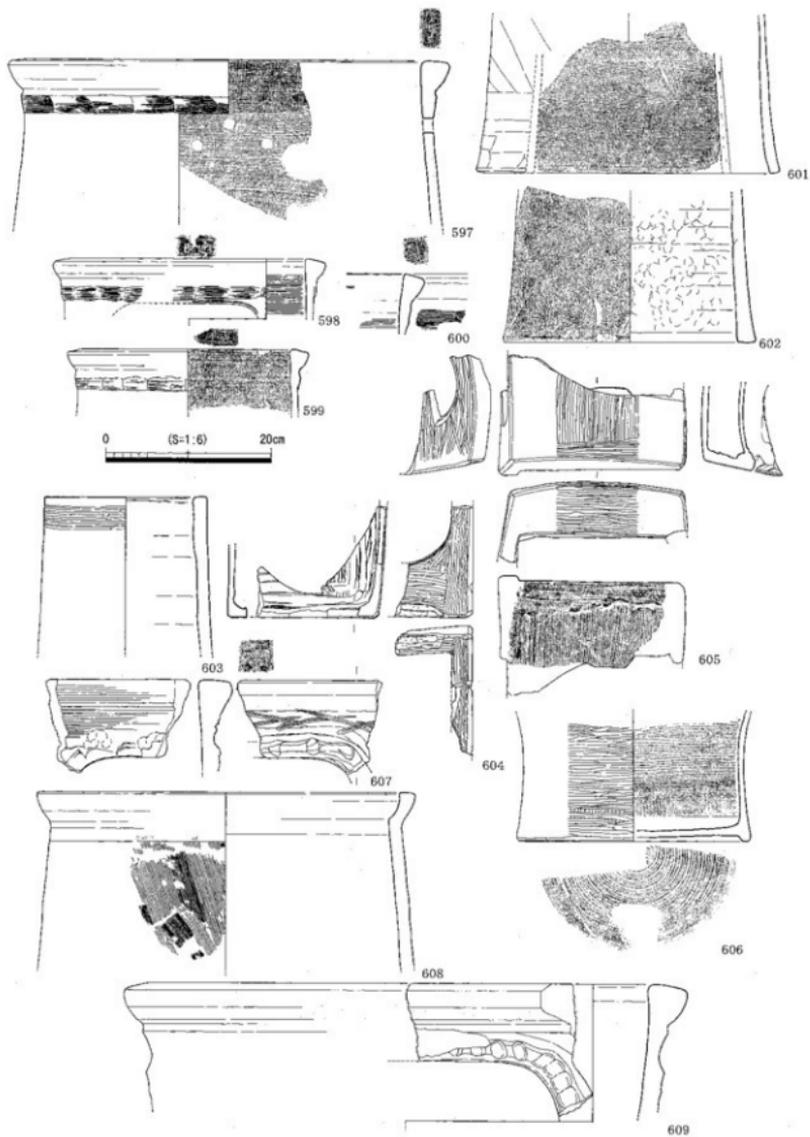


図83 II区SX04出土遺物 その2

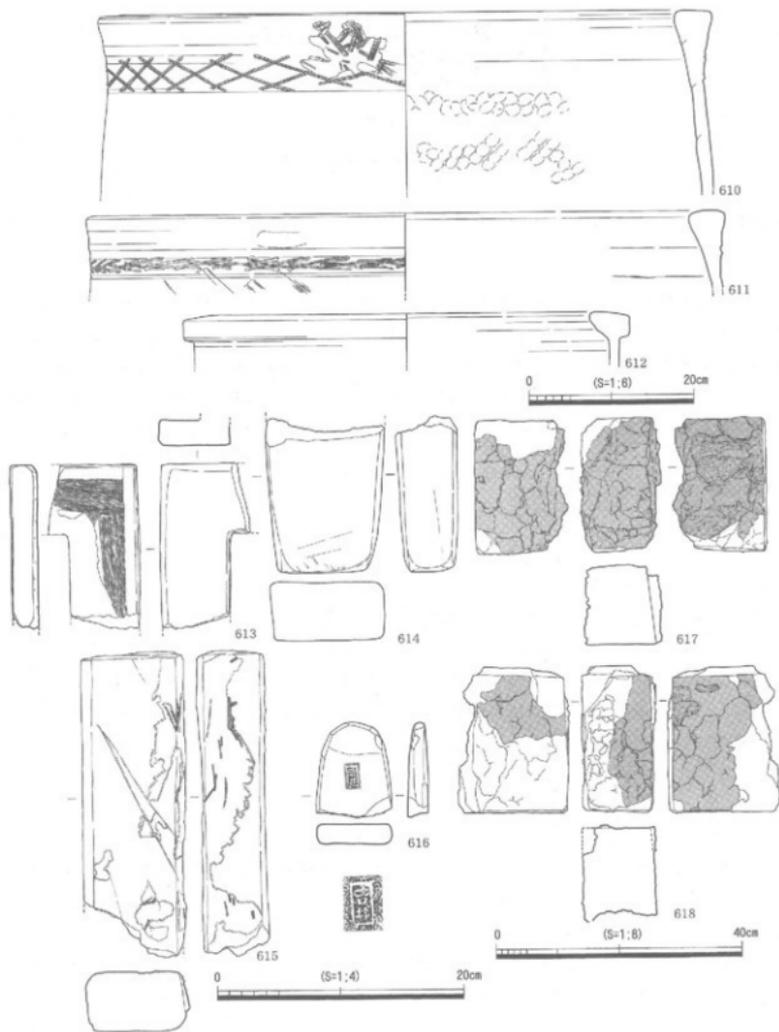


図84 II区SX04出土遺物 その3



図85 II区SX04 出土遺物の刻印(原寸)

4. III区の調査

概要

本調査区では、中世後半～近世末期にかけての掘立柱建物・溝を中心とした遺構を検出している。Ⅲ a-3トレンチでは、14c後葉段階の掘立柱建物を3棟確認しており、小規模な集落の存在が想定される。Ⅲ b-1トレンチでは、東西方向の条里型地割坪界線上に位置する溝を検出した。出土遺物には、少量の中世後半期の遺物を含むが、主体は近世後半から末葉のものが主体となる。本トレンチは、旧中州と考えられる微高地上に位置していることから、旧石器類の出土を確認することを目的とした下層確認調査を実施しているが、遺物の出土は見られなかった。

Ⅲ区西半部の調査

SB 01

Ⅲ a-3トレンチ東部X=144.485 Y=46.228 付近で検出した1間×3間(3.2×6m=19.2㎡)の掘立柱建物である。北側桁行の1基の柱穴が欠落するが、柱穴筋が比較的良好であることと、埋設土の特徴を優先させ、報告書作成段階で復元している。建物主軸は座標北から97°東へ振った東西棟であり、周辺の条里型地割に合致する。厳密に柱筋に合致するものではないが、東西梁間中央に柱穴が存在することから、梁間2間の可能性も考えられる。

出土遺物には、土師質土器杯小片が見られるが時期決定に耐えられるものではない。建物周辺の遺構の状況から、14c代の所産推定しておく。

SB 02

Ⅲ a-3トレンチ東部のX=144.485 Y=46.225 付近で検出した1間×3間(3×5.5m=16.5㎡)の掘立柱建物である。建物主軸は座標北から11°東へ振った南北棟であり、周辺の条里型地割に合致する。桁行の柱間が一定していないが、柱通りが良い。柱穴の深度が0.15mと浅いのは、近世以降の耕作に伴う削平に起因するものと考えられる。

出土遺物は、西側の桁行のSP 68.94から出土した土師質土器杯(619.620.621)がある。法量や形態から、空港跡地遺跡編年中世Ⅱ-5期(佐藤 2000)より若干後出するものと考えられることから、14c後葉に比定されるものと考えられる。

SB 03

Ⅲ a-3トレンチ東部のX=144.485 Y=46.225 付近で検出した1間×3間(3.6×6m=21.6㎡)の掘立柱建物である。建物主軸は、座標北から98°東へ振った東西棟であり、周辺の条里型地割に合致する。南西隅柱が欠損するが、柱通りは良好である。周辺の掘立柱建物と同様に、削平行為によって柱穴は0.1m程の残存深度を測るに



图86 Ⅲ区西半部遗构配置

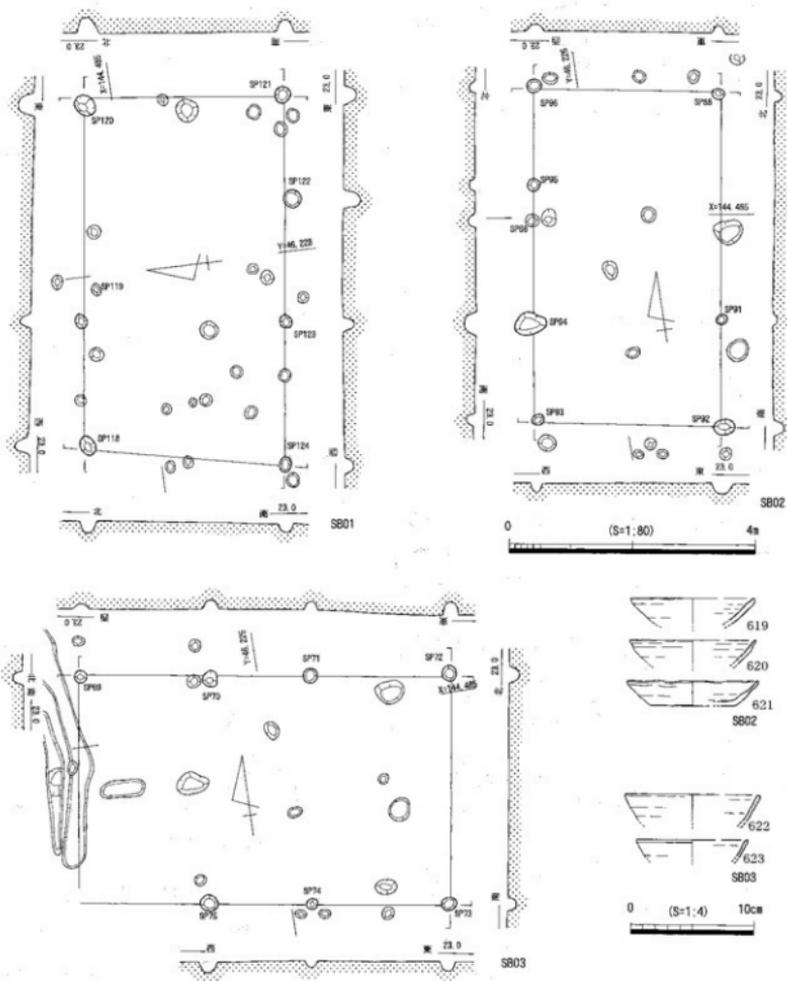


図87 Ⅲ区SB01～03平・断面及び出土遺物

過ぎない。

出土遺物は、SP 70.72 から出土した土師質土器杯(622.623)がある。法量・形態から、空港跡地遺跡編年中世Ⅱ-5期より若干後出するものであり、14c後葉の所産と考えられる。

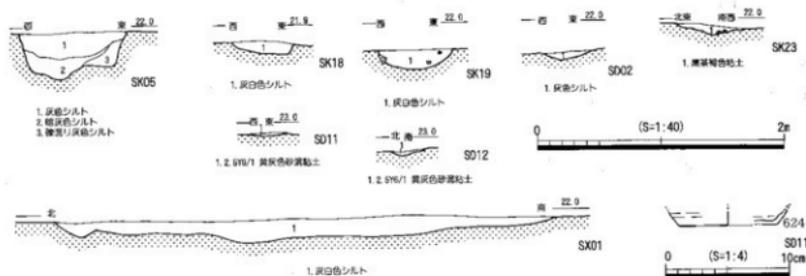


図88 Ⅲ区SK05他断面及びSD11出土遺物

SK 05

Ⅲ a-1 トレンチで検出した長軸 2.1 m 短軸 1 m 残存深度 0.4 m を測る土坑である。断面形は逆台形に近いが、底面に凹凸が著しい。時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、周辺の中・近世以降と比較して古相を示す埋没土をもつことから、古代以前に遡る可能性が高い。

SK 18, 19

Ⅲ a-4 トレンチで並列する状態で確認した土坑である。周辺に関連すると考えられる遺構の存在が認められないことから、具体的な機能は不明である。時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴が近世後半～末葉のものに類似することから、掘開時期を想定しておく。

SK 23

Ⅲ a-4 トレンチ北部で検出した土坑である。長軸 2.1 m 短軸 0.6 m 程の楕円形を呈し、断面形は緩やかな U 字状を呈する。残存深度は 0.1 m 程であるが、本トレンチは微高地頂部に位置することからかなりの削平を受けていることが予想される。時期決定可能な出土遺物は見られないが、埋没土の特徴から、近世後半～末以降の所産と推定される。

SD 11

Ⅲ a-3 トレンチの SB 01 ～ 03 と一部隣接して検出した溝である。延長 5 m に亘って検出しており、上面幅 0.2 m を測り、残存深度は 0.1 m 以下と極めて浅いが、削平を受けている可能性が高い。出土遺物に土師質土器杯底部片 (624) が見られる。法量・形態から 14c 世紀中葉～後葉の所産と考えられる。

SX 01

Ⅲ a-4 トレンチ東部で検出した性格不明の落ち込みである。東側は未調査部分となるが、直径 4 m 程のやや歪な円形を呈するものと推定される。底面や立ち上がりの状況が一様ではなく、竪穴住居の可能性はない。時期決定可能な出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴から近世後半～末以降の所産と考えられる。

Ⅲ区東部の調査

S B 04

Ⅲ b-1 トレンチ西部のX=144.490 Y=46.270付近で検出した1間×3間(3.2×7m=22.4㎡)の掘立建物である。建物主軸は、座標北から92°東へ振った東西棟であり、遺跡周辺に遺存する条里型地割の方向にほぼ合致している。柱穴は削平を受けているが、直径0.2m程の柱痕が確認できるものも見られる。

北側の桁行は柱筋が若干乱れるものとなっているが、現地調査の段階で埋没土の特徴や全体の柱穴配置から建物として復元している。

時期決定可能な出土遺物は見られないが、建物主軸や埋没土の特徴から、14c以降の中世後半期に属するものと見られる。

S D 14

Ⅲ b-1 トレンチ中央部を東西方向に貫く形で検出した溝であり、周辺に遺存する条里型地割の坪界線上に位置する。

トレンチ東半部では、上面幅0.9m 残存深度0.3m程を測る一条の溝であるが、西半部では2条に分岐するとともに、更に中央部で南北に分かれる形態をもつ。埋没土はシルト～粘土を基調とし、顕著なラミナの発達が見られないことから、恒常的な流水状態は想定できない。

陶磁器類には、備前焼灯明皿(625)京信楽系陶器灯明皿(626)肥前系陶器刷毛目丸碗(627)京信楽系陶器碗(628)肥前系陶器染付碗(629)肥前系磁器端反碗(630)肥前系陶器刷毛目鉢(631)が見られる。これらは、高

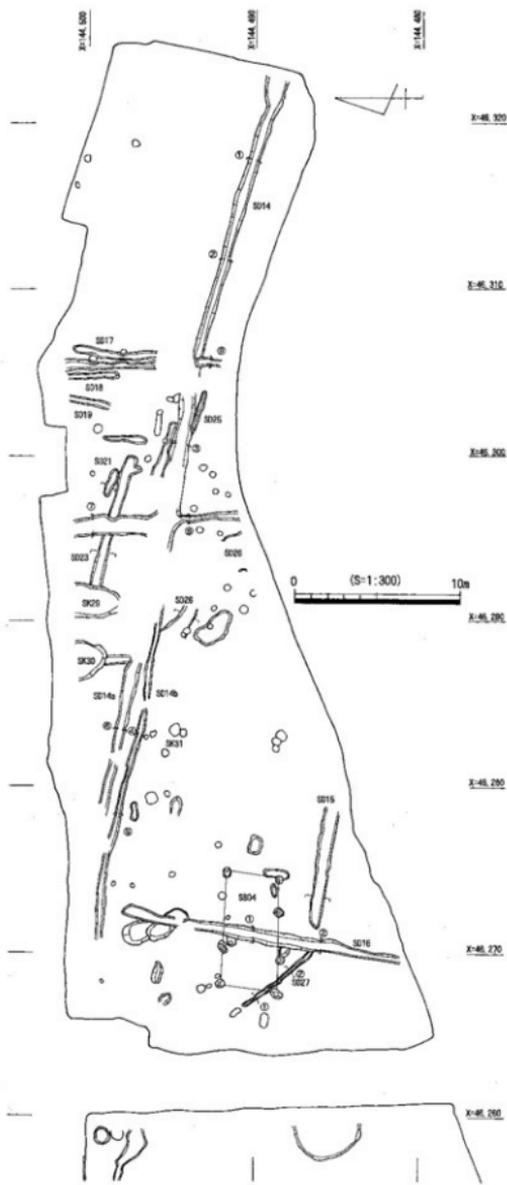


図89 Ⅲ区東半部遺構配置

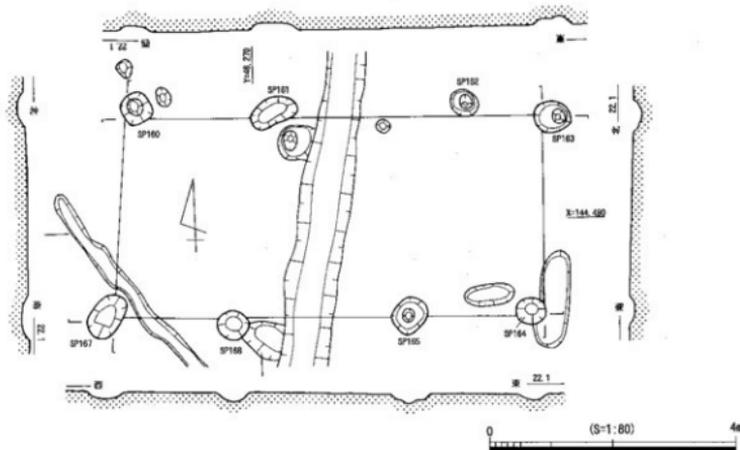


図90 III区SB04平・断面図

松城西の丸地区の編年（佐藤・松本 2002, 松本 2003）を参照すると、18c後半から19c代の所産と考えられる。

632は土師質土器足釜の脚部片であり、本遺構の中では数少ない中世期の遺物である。633は土師質土器火鉢であり、外面に印花紋が認められる。634は産地不明の施釉陶器甕、635は堺・明石産播鉢、636～639は瓦質焼成の焙烙である。640は土師質土器甕であり、胎土中に雲母片が多量に認められる。641.642は丸瓦、643は平瓦である。

出土遺物の様相は、土師質土器足釜（632）を除いて18c後半～19c代のものが主体と考えられる。土師質土器足釜は混入品と見られ、本溝は18c後半までに掘開され、19c代に埋没したと考えられる

SD 15

Ⅲb-1トレンチ南西部で検出した東西方向の溝であり、上面幅0.7m 残存深度0.1mを測る。溝の西端は、隣接し南北方向に見られるSD 16と接続せず、条里型地割の方向で東へ伸びる。出土遺物は見られなかったが、埋没土の特徴がSD 16に類似することから、15c中葉から16c前葉には埋没したものと想定しておく。

SD 16

Ⅲb-1トレンチ西部を南北方向に見られる溝である。上面幅0.7m 残存深度0.15mを測り、本トレンチ西半部が微高地となることから、後世の削平がかなり影響しているものが見られる。流下方向は座標北から19°前後東偏するもので、条里型地割に合致するものである。

出土遺物には、土師質土器足釜口縁片（644）土師質土器鍋口縁片（645）須恵器壺胴部片（646）が見られる。土師質土器足釜（644）は、小片ながら国分寺楠井窯編年Ⅲ期（佐藤 1996）の所産のものと考えられ、15c中葉～16c中葉に比定される。

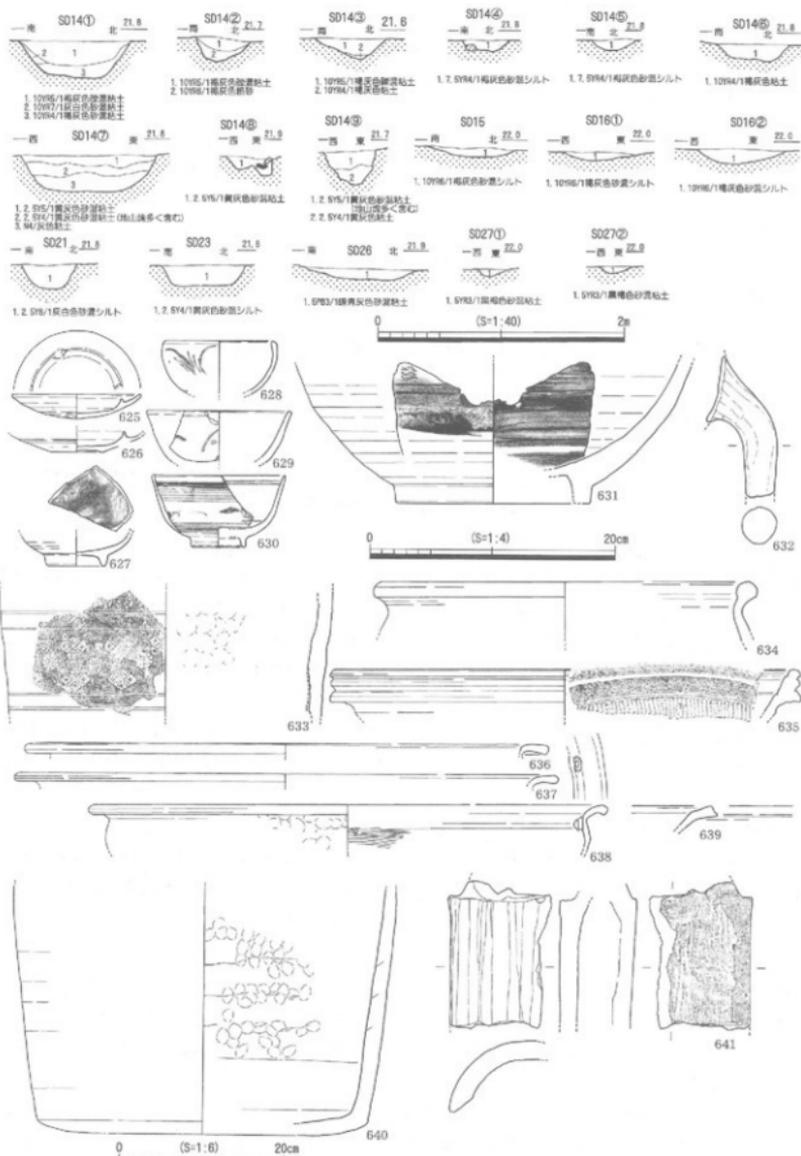


図91 Ⅲ区SD14他断面及びSD14出土遺物 その1

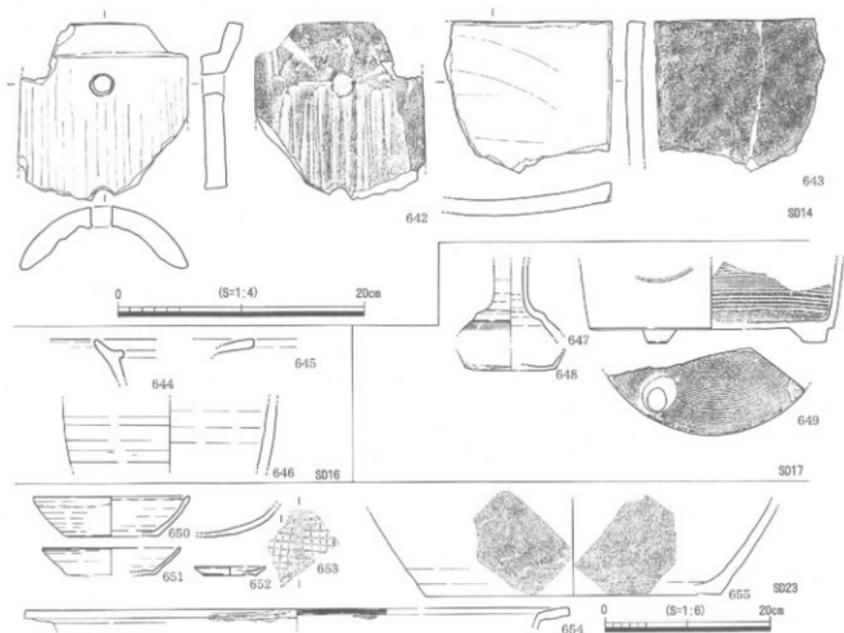


図92 Ⅲ区SD14、16、17、23出土遺物

SD 17

Ⅲb-1トレンチ東部で検出した小溝である。18c後半から19c代の年代が想定されるSD 14から派生した小溝に隣接する。延長5mに亘って検出しており、上面幅0.6m残存深度0.2mを測る。

出土遺物には、備前焼人形徳利(647)土師質土器杯底部片(648)土師質土器火鉢底部片(649)が見られる。土師質土器(648)は中世後半期の混入品であり、備前焼人形徳利(647)の年代観から18c後半の埋没を想定したい。

SD 23

Ⅲb-1トレンチ中央部で検出した溝である。近世段階のSD 14、SK 29に切り込まれる形で検出しており、検出範囲で上面幅0.7m残存深度0.2mを測る。出土遺物には、須恵器杯(650)土師質土器杯(651)土師質土器小皿(652)土師質土器足釜(653)土師質土器鍋(654)備前焼甕(655)が見られる。

年代決定の上で汎用性が高い土師質土器杯(651)や土師質土器小皿(652)は14c後葉～末葉に位置づけられることから、同時期に本遺構の廃絶時期を想定しておきたい。

SK 29

Ⅲ b-1 トレンチ中央部やや北よりのX= 144.490 Y= 46.291 付近で検出した土坑である。南北両側が擾乱や未調査部分となるが、現状で長軸 2.5 m 以上短軸 2m 程の規模を測る楕円形を呈し、0.3 m 程の残存深度が確認できる。埋没土が 5 層に分層されるが、全体に地山塊が多く含まれることから、掘開後の早期の埋め戻しが想定される。出土遺物には、瓦質土器羽釜 (656) 瓦質土器焙烙 (657) 平瓦 (658, 659) が見られる。

瓦質土器羽釜 (656) や焙烙 (657) の形態から、本遺構は 18c 後半頃に埋没したものと考えられる。

SK 31

Ⅲ b-1 トレンチ中央部で検出した土坑である。直径 0.5 m 程の円形を呈し、残存深度 0.2 m 程を測る。出土遺物には、明治以降の所産と考えられる瓦質土器焙烙口縁 (660) が見られる。

柱穴出土遺物

ここで報告する遺物は、建物等の復元に至らなかった柱穴からの出土遺物である。詳細な出土遺物名は観察表に記してあるので参照されたい。661 は土師質土器杯小片、662 は肥前系陶器皿の口縁部片である。663 は瓦質土

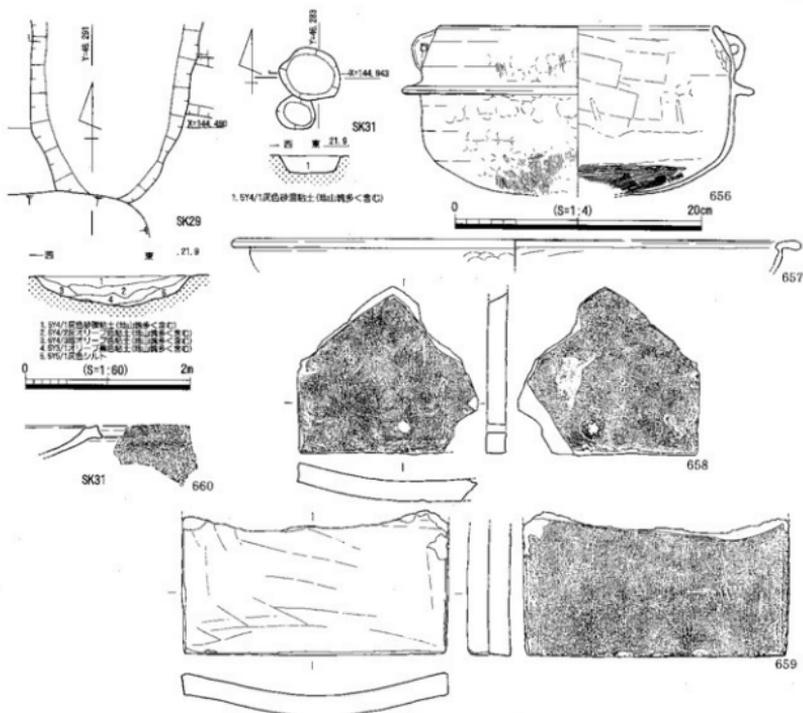


図93 Ⅲ区SK29、31平・断面及び出土遺物

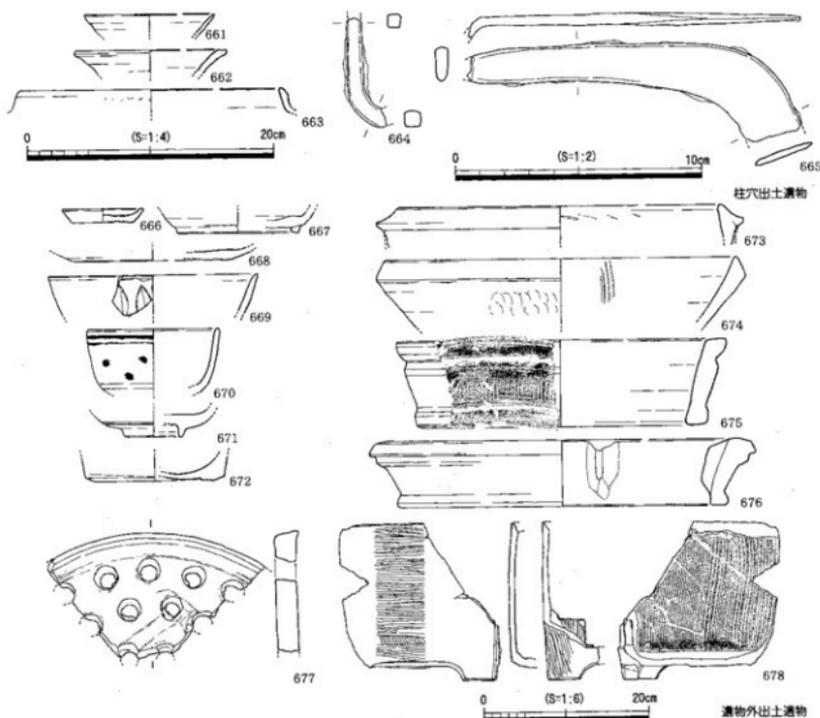


図94 柱穴、遺構外出土遺物

器羽釜の口縁部の小片。664は先端部を欠損する鉄製釘の身部片である。665は鉄鎌に見えるが、鎌とした場合に着柄穴が見られないことと、図左の先端部に折り曲げが確認できることから、不明鉄器として報告する。

遺構外出土遺物

666は土師質土器小皿、667は須恵器高台付杯の底部片である。668は須恵器皿の底部片、669は外面に鎗蓮弁をもつ竜泉窯系の青磁碗である。670.671は肥前系陶胎染付碗、672は産地・系統不明の施釉陶器瓶である。673は土師質土器足釜の口縁部片、674は瓦質焼成の播鉢口縁であり、形態・焼成から国分寺桶井窯産と思われる。675.676は土師質土器五徳、677は同さなであり、片面に剥離材と考えられる砂が付着する。678は瓦質土器火鉢・焔炉類と見られる。

出土石器

図96には、中世以降の遺構内や検出面上層の耕作土中から出土した石器をまとめて報告している。風化が進んでいない688～690を除いて、プライマリーに出土状況とは考えられず、混入品と理解される。詳細な出土遺構・層位は観察表を参照されたい。

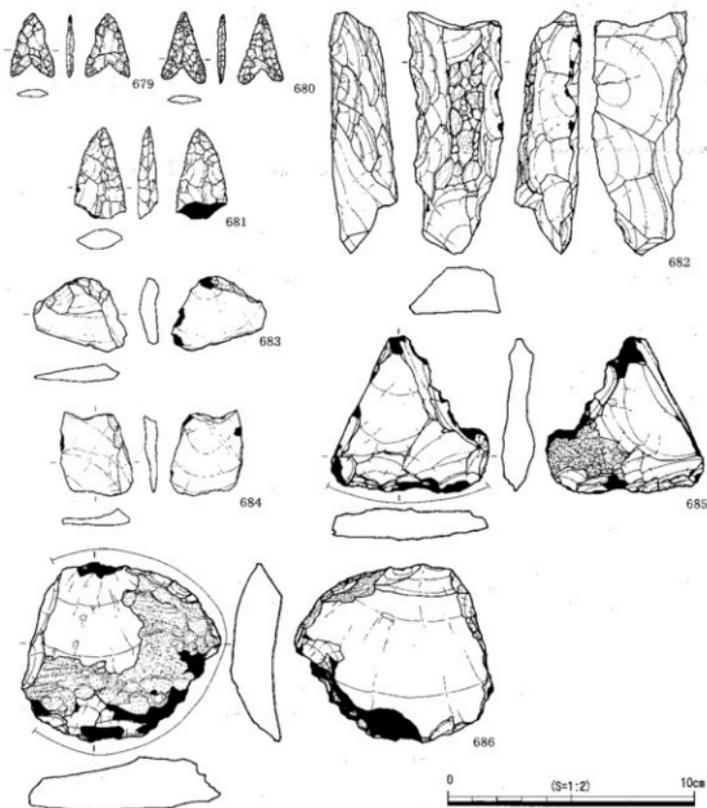


図95 出土石器 その1

679.680は凹基無茎式石鏃、681は尖頭器の身部から先端部片と見られる。682は周縁部を裏面側からの加工途中で折損している角錐状石器である。683.684は剝片類には、主だった加工は見られない。685.686は楔形石器である。687は石核と考えられるが、作業面と礫面の風化度に差が見られないことから、火打石等の供することを目的として、中世期段階に遺跡内に持ち込まれた可能性が高い。689は下縁に使用痕と考えられる微細剥離痕が見られるが、風化は進んでいない。690は周囲に細かな潰れが認められることから、サヌカイト製の火打石と考えられる。

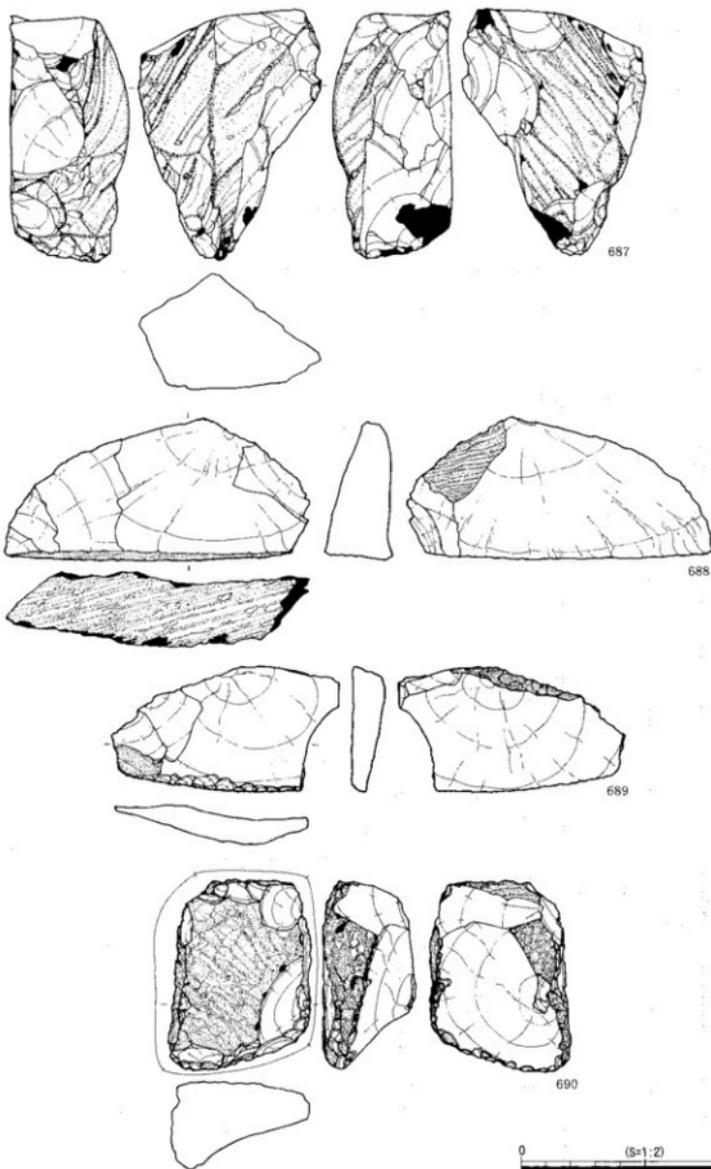


図96 出土石器 その2

第4節 自然科学分析

1. 中間東井坪遺跡・正箱遺跡土壤中火山灰抽出分析

1. 試料

今回の分析試料の採取地点は、正箱遺跡におけるB区下層北壁・C-2区北壁の2地点、および中間東井坪遺跡の1地点の合計3地点である。うち正箱遺跡では、(財)香川県埋蔵文化財調査センター担当者により層ごとにスポット的に合計10個(B区下層北壁6個、C-2区北壁4個)の試料が採取された。また中間東井坪遺跡では、1.耕作土から30.灰白色土にかけて採取された長さ1.00mの柱状試料のうち、下部50cmにあたる14.灰白色土～30.灰白色土層準の土層を5cm間隔で約60g程度10個を採取し、測定に供した。

2. 測定方法

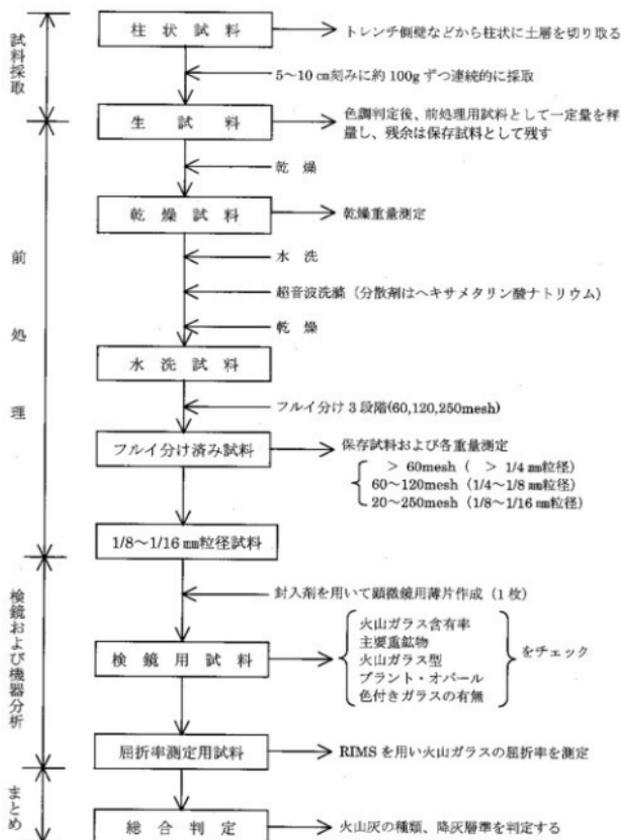


表4 土壤中火山灰(火山ガラス)抽出分析処理順序表

次に処理工程について説明を加える。

(1) 前処理

まず未処理試料 50 ~ 100g を白紙上にとり、新版標準土色帳（農林省農林水産技術会議事務局監修、1970）により判定表示する。

次に半湿潤状態の生試料を適宜採取秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、2ℓビーカー中で数回水替えしながら水洗し、そののち超音波洗滌を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度 1 ~ 2% 程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗滌水の交換を繰返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、3段階の篩別（60, 120, 250 mesh）を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた 120 ~ 250 mesh (1/8 ~ 1/16 mm) 粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤 (Nb=1.54) を用いて岩石用薄片を作成した。

(2) 火山ガラス含有率測定

前処理で作成された岩石用薄片を検鏡し、特に火山ガラスの含有率や特徴を中心に以下の各項目について測定・チェックを行った。

① 火山ガラス含有率

鏡下で火山ガラス・重鉱物・軽鉱物（土粒子やアモルファス粒子を含む）を識別し、各含有率を測定した。

② 火山ガラス型

吉川（1976）※（1）の分類に準拠して、含有される火山ガラスの形態を多いものから半定量的に求め表示した。なお吉川の分類に含まれないものについては、不規則型として一括した。

③ ブラント・オパール含有

鏡下でしばしばブラント・オパールが識別されるため、その有無と、比較的多い場合には全粒子に対するブラント・オパール含有率を半定量的に示した。

④ 色付ガラスの有無

淡褐～淡紫色を呈する色付ガラスの有無は、広域テフラの識別の際に特徴の一つとなる場合がある。そこで、色付ガラスの有無を示した。なおここでいう色付ガラスには、スコリア（塩基性火山砕屑物）中にしばしば含まれる赤褐、褐、黄、緑色などのガラスは含まれない。

(3) 重鉱物分析

主要重鉱物（カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母・アバタイト・ジルコン・イディングサイト等）を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に 200 個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有が少ないものは結果的に総数 200 個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の少ない試料は重液処理により重鉱物を凝集することが行われるが、風化による比重変化や粒径の違いが組成分布に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

(4) 火山ガラスの屈折率測定

前処理により調製された 120 ~ 250 mesh (1/8 ~ 1/16 mm) 粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置（RIMS）※（2）（3）を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として 1 試料あたり 30 個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

具体的な測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ、以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名 (Series および Sample Name) が印刷され、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。火山ガラスの屈折率 nd の式は浸液温度から対応する屈折率を換算するもの、 nd は屈折率、 t は温度を示す。

温度変化型屈折率測定法※(4)は火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた浸液温度と屈折率の換算式から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法である。(As. + De.)/2は液温制御の際の上昇時 (Ascent) と下降時 (Descent) の平均値を意味する。繁雑さを避けるためここでは測定温度を表示せず、各火山ガラス片毎の屈折率のみを表示した。

測定された屈折率値は最終的に Total の項にまとめられる。count, min, max, range, mean, st. dev, skewness はそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率の histogram の図は縦方向に屈折率を 0.001 きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。*一つが 1 個の火山ガラス片の測定結果を示す。

3. 分析結果および考察

今回得られた分析結果は集約され、前掲の図 1-1, 2, 3 に表示されている。これらの分析情報の中で考古学的に価値をもつものは、編年上意味のあるテフラ (広域テフラ) の降灰層準を合理的に認定する根拠を与える情報である。具体的には、テフラ起源物質として明確に同定される火山ガラスの特徴や含有量比の情報が最も重要となる。

一般に土壌中に含まれる重鉱物の分析が広く行なわれているが、重鉱物分析結果をテフラ降灰層準との関係で議論する場合には十分な注意が必要である。その理由は、土壌中の重鉱物は母岩起源のものを含むのが普通であり、必ずしもテフラ起源のみ特定することができないからである。しかも同一種類の鉱物でも組成上かなりの多様性をもつことが普通であり、純粋にテフラ起源の重鉱物のみを識別することは困難が多い。このため、今回の分析結果の考察においては、重鉱物分析結果から得られる情報は参考程度として低く扱わざるを得ないことをお断りしておきたい。

さて火山ガラスから得られる情報に注目すると、今回の試料中に少なくとも 3 種類の火山ガラスが識別される。それらは、各火山ガラスの特徴をもとに町田・新井 (1992) ※ (5) の火山灰アトラスと対照すると、降灰年代の古いものから順に給良-Tn(AT)、三瓶浮布 (SUP)、鬼界アカホヤ (K-Ah) 由来のガラスと判断される。このうち確度の高いものは AT および K-Ah の 2 火山灰のみで、他の 1 つは含有量が少なく詳細は不明である。各火山灰の特徴と分布層準は次ページ以下の表 1-1, 2, 3 に示す。

なお今回検出された土壌中の火山ガラスにつき、堆積過程において生じたと考えられるバイアスの存在を一言付記しておきたい。それは、1. 全体に軽石質のものが非常に少なく、2. 気泡の入ったガラスも非常に少ないことである。AT や K-Ah のようにバブル・ウォール型が特徴とされるガラスにはもともと軽石質のものが少ないのは当然だが、決して含まれないわけではない。風成火山灰の測定例から考えて、初生的には少なくとも 10% 以上の軽石質ガラスが含まれると推定される。しかし同じ火山灰が水成体積すると、ガラスが水中で比重分解され、軽石質のものや気泡の入ったガラスが選択的に除去される。そのため、再堆積層中の火山ガラスにはほとんど軽石質や気泡の入ったものが少なくなると考えられる。したがって今回の検出ガラスは再堆積された可能性が高く、降下層準を直接決定できるものではない。分析データを解釈する上でこの点に十分注意が必要である。以上の点を考慮した上で、次に各層の年代について考察する。

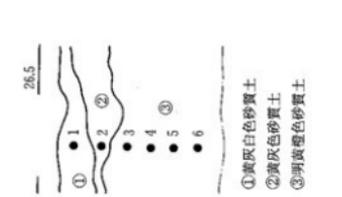
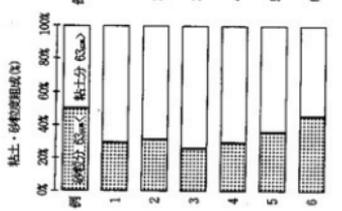
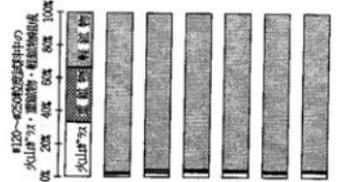
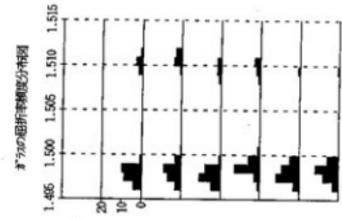
以上

火山ガラス換出層準			屈折率 (Nd)	主な火山 ガラス型	※(5) 対比される 広域テフラ	※(5) 降灰年代	備 考
分布層準 No. ①	最大濃集層準 No. ②	最大濃集層準 No. ③					
深度 No. ④	深度 No. ⑤	深度 No. ⑥					
No. ① ～ No. ⑥	No. ②	3. 黄灰色 粘質土	1.508 ～ 1.514 最頻値 =1.510	H 型 (扁平型)	鬼界アカボヤ 火山灰 (K-Ah)	6,300 B.P.	全分布層準で下位層準の火山ガラス(AT)と混在するが、うち上位層準に相対的な含有が多 く、3黄灰色粘質土で最も濃集。ただし濃集度 は低く、降灰層準に比較的近いと判断される。 ガラス形態はH型を主とし、濃い色付ガラス を含む。火山ガラスの屈折率が高いことも特 徴となる。
No. ① ～ No. ⑥			1.498 ～ 1.501 最頻値 =1.500	H 型 (扁平型)	結良 Tn 火山灰 (AT)	24,000 ～ 25,000 B.P.	今回の全分布層準で検出されるが、濃集度は 低く、また含有率変化もほとんどないことか ら、降灰層準を認識するのは困難。ただし分 析層準下部の⑤、⑥試料ではK-Ah ガラスの含 有が急減し、5明黄褐色粘質土下位の堆積時期 がK-Ah 降灰以前の可能性が高いことを示す。 無色透明な扁平(バブル・ウォール)型ガラ スを主とするが、亀ノ甲型と称する特異な形 を持つガラスを少量含む。

※(5) 町田 洋・新井勇夫(1992): 火山灰アトラス [日本列島とその周辺], 東京大学出版会。

表 5 正和湖跡 B 区下層北壁における火山ガラス濃集層準とその特徴

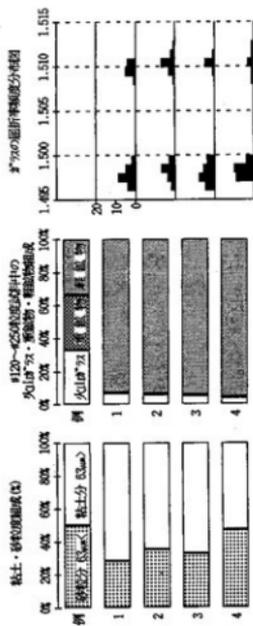
色付 X線 分析	*3 *4 主要火山岩 分類	*1 含有 成分 (%)	主要重鉱物および鑛物
+	Hb, Ch, Ha	Ghb, Opx, Zr	
+	Hb, Ch, Ca, Ha, It	Ghb, Opx, Zr	
+	Hb, Ch, Ha, Ca	Ghb, Opx, Zr, Opx	
+	Hb, Ch, Tb, Ha, It	Ghb, Opx, Opx, Zr, Bhb	
+	Hb, Ch, Ha, Ca	Ghb, Opx, Bli, Zr	
+	Hb, Ch, Ha, Tb	Ghb, Opx, Zr, Opx, Bli	



- ①黄灰色砂質土
- ②黄灰色砂質土
- ③明黄褐色砂質土

- *1 主要重鉱物の略称と鉱物名
 O1: カンラン石, Opx: 斜方輝石, GHo: 緑色普通角閃石, BHo: 褐色普通角閃石,
 Bl: 黒雲母, Gar: ザクロ石, Zr: ジルコニウム
 PO: プラント・オパール含有率 or 有無
- *2 主要ガラス型の名称 (吉川, 1976)
 Ha, Hb: 扁平型 (バブルウォール型)
 Ca, Ch: 中間型 (軽石型) Ta, Tb: 多孔質型 (軽石・纖維状型)
 SG: スコリア質ガラス It: 不規則型
- *3 正箱選跡B区下層北壁土塊試料分析 6 試料
 試料採取層準土層様式柱状図及び分析結果

*1 主要重鉱物および備考	*2 含有 (%)	*3 *4 主要火山岩類型 対称
Ghk, Opx>Opx, Cpx, Zr	+	Hb, Ch, Hs, Tb, It
Ghk, Opx>Zr, Opx, Bhb	+	Hb, Ch, Hs, Tb
Ghk, Opx>Opx, Bt, Zr	-	Hb, Ch, Hs, Tb, It
Ghk, Opx>Zr	-	Hb, Ch, Hs, Tb



- ① 耕作土
- ② 床土
- ③ 淡灰褐色粘質土
- ④ 黄灰色粘質土
- ⑤ 黄灰色粘質土
- ⑥ 黄灰色粘質土
- ⑦ 明黄褐色砂質土

*1 主要重鉱物の略称と鉱物名

O1: カンラン石, Opx: 斜方輝石, Cpx: 单斜輝石, GHo: 綠色普通角閃石, BHo: 褐色普通角閃石,
 Bt: 黑雲母, Gar: ザクロ石, Zr: シルコン, Id: イデインダグサイト, Opx: 不透明(鉄)鉱物,

*2 PO: プラント・オパール含有率 or 有無

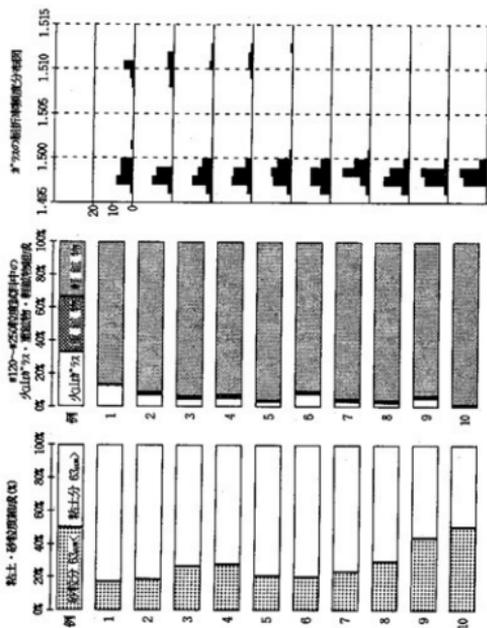
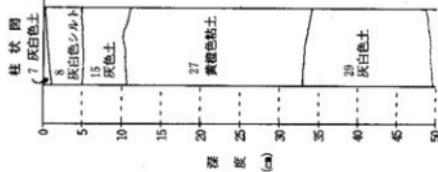
*3 主要ガラス型の名称 (吉川, 1976)

Ha, Hb: 扁平型 (バブルウォール型) Ca, Cb: 中間型 (軽石型) Ta, Tb: 多孔質型 (軽石・纖維状型)

*4 (吉川, 1976) 以外のガラスの略称

SG: スコリア質ガラス It: 不规则型

表7 正箱遺跡C-2区北壁土壌試料分析 4 試料
 試料採取層準土層模式柱状図及び分析結果



主要重鉱物および備考 (有)	PO-2 含有 (有)	*3 *4 主要火山灰 特徴
Ghb, Opx>Opx, Bhs, Zr	1.5	Hb, Ha, Ch, Ca, 亀甲Hg.L
Ghb>Opx, Opx>Zr	7.5	Hb, Ch, Ca, Ha, Tb
Ghb>Opx>Opx, Zr	9.0	Hb, Ch, Ha, Tb
Ghb>Opx>Opx, Zr, Opx	8.5	Hb, Ch, Tb, Ha, Ca
Ghb>Opx>Zr, Opx	5.0	Hb, Ch, Ha, Tb
Ghb>Opx>Zr, Opx	3.5	Hb, Ch, Ha, Tb
Ghb>Opx>Opx, Zr	0.5	Hb, Ha, Ch, Ca
Ghb>Opx, Zr	+	Hb, Ha, Ch, Ca
Ghb, Opx>Opx	+	Hb, Ha, Ch, It (硝子舎)
Ghb, Opx>Opx, Zr, Bi	+	Hb, Ha, Ch, Ca, Tb

* 1 主要重鉱物の略称と鉱物名

O1: カンラン石, Opx: 斜方輝石,

Bi: 黒雲母, Car: ザクロ石,

* 2 PO: プラント・オハール含有率 or 有無

* 3 主要ガラス型の名称 (吉川, 1976)

Ha, Hb: 扁平型 (ハズルウォール型)

* 4 (吉川, 1976) 以外のガラスの略称

SG: スコリア質ガラス

Cpx: 斜方輝石,

Zr: ジルコン

Ca, Ch: 中間型 (軽石型)

Ta, Tb: 多孔質型 (軽石・繊維状型)

It: 不規則型

GHo: 緑色普通角閃石, BHo: 褐色普通角閃石,

Id: イディンサイト, Opx: 不透明 (鉄) 鉱物,

表 8 中岡東井坪遺跡土壌試料分析 10 試料
試料採取層準土層様式柱状図及び分析結果

火山ガラス検出層準			屈折率 (Nd)	主な火山 ガラス型	※(5) 対比される 広域テフラ	※(5) 降灰年代	備 考
分布層準	最大濃集層準	地層名					
No.① No.② No.③ No.④	No.① No.② No.③ No.④	No.① No.② No.③ No.④					
No.① ~ No.④	No.②	黄灰色粘質土	1.508 ~ 1.514 最頻値 =1.510	H 型 (扁平型)	鬼界アカホヤ 火山灰 (K-Ah)	6,300 B. P.	全分布層準で下位層準の火山ガラス(AT)と混在するが, No. ②試料の黄灰色粘質土層準で相対的な含有比が最も高い。ただし濃集度は高くなく, 降灰層準を認定することは困難であり, 降灰層準に比較的近いと判断される。ガラス形態はH型を主とし, 濃い色付ガラスを少量含む。火山ガラスの屈折率が高いことも特徴となる。
No.① ~ No.④	-	-	1.498 ~ 1.501 最頻値 =1.500	H 型 (扁平型)	始良 Tn 火山灰 (AT)	22,000 ~ 25,000 B. P.	今回の全分布層準で検出されるが, 濃集度は低く, また含有率変化もほとんどないことから, 降灰層準を認定するのは困難。また今回の分析試料は高いK-Ah ガラスの含有が認められることから, 最下位層の明黄橙色砂質土層上部の年代は, 比較的K-Ah 降灰層準に近いものと推測される。無色透明の扁平(バブル・ウオール)型ガラスを主とするが, 亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。

※(5) 町田 洋・新井房夫(1992):火山灰アトラス [日本列島とその周辺]。東京大学出版会。
表9 正箱遺跡C-2区北壁における火山ガラス濃集層準とその特徴

火山ガラス検出層準		最大濃集層準	深度	地層名	屈折率 (Nd)	主な火山ガラス型	※(5)(6)対比される広域テフラ	※(5)(6)降灰年代	備考
分布層準	標高								
No. I ~ No. V	-	No. I ~ No. II	-	15 灰白色シト ~ 16 灰色土	1.508 ~ 1.514 最頻値 =1.510	H 型 (扁平型)	鬼界アカホヤ 火山灰 (K-Ah)	6,300 B.P.	I, II 試料で最大の濃集が認められる。降灰層準の認定は困難だが、16 灰色土層かより上位にあるものと推定される。ガラス形態はH型を主とし濃い色付ガラスを含む。火山ガラスの屈折率がかなり高いのが特徴。プラント・オパール含有が高いことが注目される。
No. I	-	-	-	-	1.493 ~ 1.495	T, C 型 (軽石型)	三瓶浮布 (SUP)	<16,000 B.P.	微量だがNo. I 試料でのみ検出される。降灰層準決定は困難。火山ガラスの特徴と分布域・層序から三瓶浮布 (SUP) テフラ起源と推定されるが詳細は不明。
No. I ~ No. X	-	No. VI	-	(29 黄褐色 粘土)	1.498 ~ 1.501 最頻値 =1.500	H 型 (扁平型)	給良 Tn 火山灰 (AT)	24,000 ~ 25,000 B.P.	今回の全分析層準で検出される。No. IV 試料でわずかに含有率増加が認められるが全体に含有は低く、降灰層準の認定は困難。分析層準の下部では含有が急減することから、降灰層準は黄橙粘土層付近にあるものと推定される。

※(5) 町田 洋・新井房夫 (1992): 火山灰アトラス [日本列島とその周辺]。東京大学出版会。

(6) 加藤茂弘・堀原徹・山下透・竹村恵二・岡田篤正 (1996): 兵庫県神戸市で発見された三瓶火山起源のテフラ。第四紀研究, 35 (5), 383-389。

表 10 中間東井坪遺跡における検出テフラの層準とその特徴

注). ※(1) 吉川周作(1976):大阪層群の火山灰層について,地質学雑誌,82(8),479-515.

(2) 横山卓雄・壇原 徹・山下 透(1986):温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定,第四紀研究,25(1),21-30.

(3) Danhara T., Yamashita T., Iwano H. and Kasuya M.(1992):An improved system for measuring refractive index using the thermal immersion method. Quaternary International,13/14,89-91.

(4) 壇原 徹(1993):温度変化型屈折率測定法,日本第四紀学界編,第四紀試料分析法2,研究対象分析法,149-157,東京大学出版会.

(5) 町田 洋・新井房夫(1992):火山灰アトラス [日本列島とその周辺],東京大学出版会.

#PAT.1803336,1888831

No.	試料名	重 鉱 物 組 成 ※(1)											備 考
		Ol	Pyroxene		Amphibole		Opx	Cum	Zr	Bi	Ap	total	
			Opx	Cpx	BHo	GHo							
1	正箱遺跡 B区下層北壁	-	9	-	-	38	22	-	6	-	-	75	エピソード少量含む
	①	0.0	12.0	0.0	0.0	50.7	29.3	0.0	8.0	0.0	0.0	100.0	
2	正箱遺跡 B区下層北壁	-	3	-	-	26	24	-	1	-	-	54	エピソード少量含む
	②	0.0	5.6	0.0	0.0	48.1	44.4	0.0	1.9	0.0	0.0	100.0	
3	正箱遺跡 B区下層北壁	-	4	-	-	27	21	-	10	-	-	62	エピソード少量含む
	③	0.0	6.5	0.0	0.0	43.5	33.9	0.0	16.1	0.0	0.0	100.0	
4	正箱遺跡 B区下層北壁	-	7	-	1	32	10	-	3	-	-	53	エピソード少量含む
	④	0.0	13.2	0.0	1.9	60.3	18.9	0.0	5.7	0.0	0.0	100.0	
5	正箱遺跡 B区下層北壁	-	5	-	-	27	16	-	1	2	-	51	エピソード少量含む
	⑤	0.0	9.8	0.0	0.0	52.9	31.4	0.0	2.0	3.9	0.0	100.0	
6	正箱遺跡 B区下層北壁	-	2	-	-	29	18	-	3	2	-	54	エピソード少量含む
	⑥	0.0	3.7	0.0	0.0	53.7	33.3	0.0	5.6	3.7	0.0	100.0	
	以下余白												

注. ※(1) 上段 計測粒子数 下段 %

なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol: カンラン石, Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, BHo: 褐色普通角閃石,
 GHo: 緑色普通角閃石, Opq: 不透明(鉄)鉱物, Id: イディングサイト, Zr: ジルコン,
 Bi: 黒雲母, Ap: アパタイト, Gar: ザクロ石, VG: 火山ガラス,
 Zoisite: ヌウレン石, Cum: カミングトン閃石, WEpidote: 緑閃石,

表 11 重鉱物組成表 (1)

No.	試料名	重 鉱 物 組 成 ※(2)										備考	
		Pyroxene			Amphibole		Opx	Cum	Zr	Bi	Ap		total
		Ol	Opx	Cpx	BHo	GHo							
1	正箱遺跡 C-2区北壁 ①	-	4	1	-	20	13	-	1	-	-	39	エビドート少量含む
	0.0	10.3	2.6	0.0	51.2	33.3	0.0	2.6	0.0	0.0	100.0		
2	正箱遺跡 C-2区北壁 ②	-	3	-	1	23	11	-	4	-	-	42	エビドート少量含む
	0.0	7.1	0.0	2.4	54.8	26.2	0.0	9.5	0.0	0.0	100.0		
3	正箱遺跡 C-2区北壁 ③	-	3	-	-	22	14	-	1	3	-	43	エビドート少量含む
	0.0	7.0	0.0	0.0	51.1	32.6	0.0	2.3	7.0	0.0	100.0		
4	正箱遺跡 C-2区北壁 ④	-	-	-	-	29	16	-	6	-	-	51	エビドート少量含む
	0.0	0.0	0.0	0.0	56.8	31.4	0.0	11.8	0.0	0.0	100.0		
	以下余白												

注. ※(1) 上段 計測粒子数 下段 %

なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol: カンラン石, Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, BHo: 褐色普通角閃石,
 GHo: 緑色普通角閃石, Opx: 不透明(鉄)鉱物, Id: イディングサイト, Zr: ジルコン
 Bi: 黒雲母, Ap: アバタイト, Gar: ザクロ石, VG: 火山ガラス
 Zoisite: ユウレン石, Cum: カミングトン閃石, WEpidote: 緑レン石,

表 12 重鉱物組成表 (2)

No.	試料名	重 鉱 物 組 成 ※ (3)										備 考	
		Ol	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bi	Ap		total
			Opx	Cpx	BHo	GHo							
1	中間東井坪遺跡 I	-	2	-	2	29	11	-	2	-	-	46	エビトード少量含む
		0.0	4.3	0.0	4.3	63.2	23.9	0.0	4.3	0.0	0.0	100.0	β-Qz 含む
2	中間東井坪遺跡 II	-	9	-	-	68	15	-	3	-	-	95	エビトード少量含む
		0.0	9.5	0.0	0.0	71.5	15.8	0.0	3.2	0.0	0.0	100.0	
3	中間東井坪遺跡 III	-	3	-	-	43	16	-	2	-	-	64	エビトード少量含む
		0.0	4.7	0.0	0.0	67.2	25.0	0.0	3.0	0.0	0.0	100.0	
4	中間東井坪遺跡 IV	-	6	1	-	68	16	-	6	-	-	97	エビトード少量含む
		0.0	6.2	1.0	0.0	70.1	16.5	0.0	6.2	0.0	0.0	100.0	
5	中間東井坪遺跡 V	-	5	-	-	77	23	-	13	-	-	118	エビトード少量含む
		0.0	4.2	0.0	0.0	65.3	19.5	0.0	11.0	0.0	0.0	100.0	β-Qz 含む
6	中間東井坪遺跡 VI	-	1	-	-	31	9	-	4	-	-	45	エビトード少量含む
		0.0	2.2	0.0	0.0	68.9	20.0	0.0	8.9	0.0	0.0	100.0	
7	中間東井坪遺跡 VII	-	2	-	-	42	16	-	2	-	-	62	エビトード少量含む
		0.0	3.2	0.0	0.0	67.8	25.8	0.0	3.2	0.0	0.0	100.0	
8	中間東井坪遺跡 VIII	-	-	-	1	19	4	-	1	-	-	25	エビトード少量含む
		0.0	0.0	0.0	4.0	76.0	16.0	0.0	4.0	0.0	0.0	100.0	
9	中間東井坪遺跡 IX	-	1	-	-	25	9	-	-	-	-	35	エビトード少量含む
		0.0	2.9	0.0	0.0	71.4	25.7	0.0	0.0	0.0	0.0	100.0	
10	中間東井坪遺跡 X	-	2	-	-	15	7	-	3	1	-	28	エビトード少量含む
		0.0	7.1	0.0	0.0	53.6	25.0	0.0	10.7	3.6	0.0	100.0	

注: ※ (1) 上段 計測粒子数 下段 %

なお各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol: カンラン石, Opx: 斜方輝石, Cpx: 単斜輝石, BHx: 褐色普通角閃石,
 GHx: 緑色普通角閃石, Opq: 不透明(鉄)鉱物, Id: イデイングサイト, Zr: ジルコン
 Bi: 黒雲母, Ap: アバタイト, Gar: ザクロ石, VG: 火山ガラス
 Zoisite: ユウレン石, Cum: カミングトン閃石, WEpidote: 緑閃石,

表 13 重 鉱 物 組 成 表 (3)

通番	試料名	乾焼重量 (g)	粒度組成 (g)			鉱物・ガラス組成 (%)			主要重鉱物および備考	*1 PO含有 (%)	*2 主要火山ガラス型	*3 色付ガラスの有無	
			砂粒分 (mesh size) >60	~120	~250	粘土分 <250	火山ガラス	重鉱物					軽鉱物
1	正箱遺跡B区北壁(1)	12.8	1.5	1.0	1.2	9.0	2.0	1.0	97.0	Glo, Opq>OpX, Zr	+	Hb, Cb, Ha	+
2	正箱遺跡B区北壁(2)	12.4	1.7	1.0	1.2	8.5	3.0	1.5	95.5	Glo, Opq>OpX, Zr	+	Hb, Cb, Ca, Ha, It	+
3	正箱遺跡B区北壁(3)	13.1	1.4	0.8	1.2	9.7	3.5	1.5	95.0	Glo, Opq>Zr, OpX	+	Hb, Cb, Ha, Ca	+
4	正箱遺跡B区北壁(4)	12.7	1.5	1.0	1.2	9.0	3.5	1.0	95.5	Glo>OpX, Opq>Zr, BfO	+	Hb, Cb, Tb, Ha, It	+
5	正箱遺跡B区北壁(5)	13.1	2.0	1.3	1.4	8.4	3.0	1.0	96.0	Glo, Opq>OpX, Bi, Zr	+	Hb, Cb, Ha, Ca	+
6	正箱遺跡B区北壁(6)	13.3	3.0	1.5	1.5	7.2	3.5	1.0	95.5	Glo, Opq>Zr, OpX, Bi	+	Hb, Cb, Ha, Tb	+

*1 各鉱物とその略称は以下のように対応します。

Ol ; カンラン石 OpX ; 斜方輝石 Cpx ; 単斜輝石 GfO ; 緑色角閃石 Cum ; シンクイート閃石 BfO ; 褐色角閃石 CzO ; 斜ユウレン石
Bi ; 黒雲母 Gar ; ザクロ石 Zr ; ジルコン Id ; イダイト Opq ; 不透明鉱物 Epi ; 緑線石

*2 PO含有はプラント・オパール含有量 (%) を示します。

*3 火山ガラス型とその略称は吉川(1976)に従い以下のように対応します。

Ha, Hb ; 扁平型 (バブル・ウォール型) Ca, Cb ; 中間型 (軽石型) Ta, Tb ; 多孔質型 (軽石型, 繊維状型)

*4 なお、吉川(1976)以外のガラス型について次の略称を用います。

SG ; スコリア質ガラス It ; 不規則型

[顕微鏡像頻度分布]

	(No.)	1	2	3	4	5	6
		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)
1.495 =<Nd< 1.496		0	0	0	0	0	0
1.496 =<Nd< 1.497		4	3	5	1	3	3
1.497 =<Nd< 1.498		9	7	11	3	12	8
1.498 =<Nd< 1.499		10	9	8	13	9	12
1.499 =<Nd< 1.500		1	3	1	6	5	6
1.500 =<Nd< 1.501		0	0	0	1	0	0
1.501 =<Nd< 1.502		0	0	0	0	0	0
1.502 =<Nd< 1.503		0	0	0	0	0	0
1.503 =<Nd< 1.504		0	0	0	0	0	0
1.504 =<Nd< 1.505		0	0	0	0	0	0
1.505 =<Nd< 1.506		0	0	0	0	0	0
1.506 =<Nd< 1.507		0	0	0	0	0	0
1.507 =<Nd< 1.508		0	0	0	0	0	0
1.508 =<Nd< 1.509		0	0	1	1	0	0
1.509 =<Nd< 1.510		2	1	2	2	1	1
1.510 =<Nd< 1.511		3	4	2	3	0	0
1.511 =<Nd< 1.512		1	3	0	0	0	0
1.512 =<Nd< 1.513		0	0	0	0	0	0
1.513 =<Nd< 1.514		0	0	0	0	0	0
1.514 =<Nd< 1.515		0	0	0	0	0	0

表 14 正箱遺跡B区北壁土壤中火山灰抽出分析

通番	試料名	乾燥重量 (g)	粒度組成 (g)				鉱物・ガラス組成 (%)			*1 主要重鉱物および備考	*2 PO ₂ 含有 (%)	*3 *4 主要火山ガラス型	色付 ガラス 有無
			砂粒分 (mesh size) >60	~120	~250	<250	火山 ガラス	重鉱物	軽鉱物				
1	正箱遺跡 C-2区(1)	13.1	1.7	0.9	1.1	9.4	7.0	0.5	92.5	Glo, Opq>Op _x , Cpx, Zr	+	Hb, Cb, Ha, Tb, It	+
2	正箱遺跡 C-2区(2)	12.9	2.6	0.9	1.0	8.3	6.0	0.5	93.5	Glo, Opq>Zr, Op _x , BHo	+	Hb, Cb, Ha, Tb	+
3	正箱遺跡 C-2区(3)	13.2	2.1	1.0	1.2	8.9	5.5	0.5	94.0	Glo, Opq>Op _x , Bi, Zr	-	Hb, Cb, Ha, Tb, It	+
4	正箱遺跡 C-2区(4)	13.9	4.2	1.2	1.1	7.3	4.0	0.5	95.5	Glo, Opq>Zr	-	Hb, Cb, Ha, Tb	+

*1 各鉱物とその略称は以下に対応します。

O1 : カンラン石 Op_x: 斜方輝石 Cpx: 単斜輝石 Glo: 緑色角閃石 Cum: カシタノ閃石 BHo: 褐色角閃石 CZo: 斜ニウレン石
Bi : 黒雲母 Car: ザクロ石 Zr : ジルコン Id : イデノクサイト Opq: 不透明鉱物 Epi: 緑レン石

*2 PO₂含有はプラント・オパール含有量 (%) を示します。

*3 火山ガラス型とその略称は吉川(1976)に従い以下に対応します。

Ha, Hb: 扁平型 (バブル・ウォール型) Ca, Cb: 中間型 (軽石型) Ta, Tb: 多孔質型 (軽石型, 繊維状型)

*4 なお、吉川(1976)以外のガラス型について次の略称を用います。

SG : スコリア質ガラス It : 不規則型

[屈折率値頻度分布]

(No.)	(No.)			
	1 (1)	2 (2)	3 (3)	4 (4)
1.495 =<Nd< 1.496	0	0	0	0
1.496 =<Nd< 1.497	4	2	5	0
1.497 =<Nd< 1.498	9	4	8	9
1.498 =<Nd< 1.499	5	7	6	10
1.499 =<Nd< 1.500	2	3	4	4
1.500 =<Nd< 1.501	0	0	0	0
1.501 =<Nd< 1.502	0	0	0	0
1.502 =<Nd< 1.503	0	0	0	0
1.503 =<Nd< 1.504	0	0	0	0
1.504 =<Nd< 1.505	0	0	0	0
1.505 =<Nd< 1.506	0	0	0	0
1.506 =<Nd< 1.507	0	0	0	0
1.507 =<Nd< 1.508	0	0	0	0
1.508 =<Nd< 1.509	1	1	0	1
1.509 =<Nd< 1.510	5	3	1	1
1.510 =<Nd< 1.511	4	7	5	3
1.511 =<Nd< 1.512	0	2	1	1
1.512 =<Nd< 1.513	0	1	0	1
1.513 =<Nd< 1.514	0	0	0	0
1.514 =<Nd< 1.515	0	0	0	0

表 15 正箱遺跡 C-2 区土壤中火山灰抽出分析

通番	試料名	乾燥重量 (g)	粒度組成 (g)			鉱物・ガラス組成 (%)			*1 主要重鉱物および備考	*2 PO ₂ 含有 (%)	*3 ** 主要火山灰 ^a 型	色付 ^b の有無	
			砂粒分 (mesh size) >60 ~120 ~250	粘土分 <250	火山 ^c ガラス	重鉱物	軽鉱物						
1	中間東井坪遺跡 I	24.5	1.4	1.2	1.7	20.3	13.0	0.5	86.5	Glo, Opq>Opq, Bfo, Zr	1.5	Hb, Ha, Ch, Ca, 亀/甲g.l.	+
2	中間東井坪遺跡 II	26.1	1.9	1.3	1.8	21.2	7.5	1.5	91.0	Glo>Opq, Opq>Zr	7.5	Hb, Ch, Ca, Ha, Tb	+
3	中間東井坪遺跡 III	26.4	3.2	1.7	2.2	19.4	5.0	1.5	93.5	Glo>Opq>Opq, Zr	9.0	Hb, Ch, Ha, Tb	+
4	中間東井坪遺跡 IV	25.9	1.9	2.1	3.2	18.7	5.5	2.0	92.5	Glo>Opq>Opq, Zr, Cpx	8.5	Hb, Ch, Tb, Ha, Ca	+
5	中間東井坪遺跡 V	27.6	0.9	1.7	3.1	21.9	3.5	0.5	96.0	Glo>Opq>Zr, Opq	5.0	Hb, Ch, Ha, Tb	+
6	中間東井坪遺跡 VI	30.7	0.8	1.8	3.6	24.5	8.0	1.5	90.5	Glo>Opq>Zr, Opq	3.5	Hb, Ch, Ha, Tb	-
7	中間東井坪遺跡 VII	33.5	0.9	2.1	4.9	25.6	3.5	1.5	95.0	Glo>Opq>Opq, Zr	0.5	Hb, Ha, Ch, Ca	-
8	中間東井坪遺跡 VIII	32.6	1.5	3.4	4.8	22.9	3.0	1.0	96.0	Glo>Opq, Zr	+	Hb, Ha, Ch, Ca	-
9	中間東井坪遺跡 IX	28.5	2.9	4.9	4.8	15.9	5.5	1.5	93.0	Glo, Opq>Opq	+	Hb, Ha, Ch, It (晶子含)	-
10	中間東井坪遺跡 X	25.8	4.4	5.1	3.5	12.7	1.0	0.5	98.5	Glo, Opq>Opq, Zr, Bi	+	Hb, Ha, Ch, Ca, Tb	+

*1 各鉱物とその略称は以下のように対応します。

O1 : カンラン石 Opq: 斜方輝石 Cpx: 単斜輝石 Glo: 緑色角閃石 Cum: シンクイト閃石 Bfo: 褐色角閃石 Czo: 斜ウレウレン石
Bi : 黒雲母 Gar: ザクロ石 Zr : ジルコン Id : イデノゲキト Opq: 不透明鉱物 Epi: 緑レン石

*2 PO含有はプラント・オパール含有量 (%) を示す

*3 火山ガラス型とその略称は吉川(1976)に従い以下のように対応します。

Ha, Hb: 扁平型 (バブル・ウォール型) Ca, Ch: 中間型 (軽石型) Ta, Tb: 多孔質型 (軽石型, 繊維状型)

*4 なお、吉川(1976)以外のガラス型について次の略称を用います。

SG : スコリア質ガラス It : 不規則型

[屈折率値頻度分布]

(No)										
	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
1.495 <Nd< 1.496	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
1.496 <Nd< 1.497	1	2	3	2	2	5	2	4	2	0
1.497 <Nd< 1.498	8	10	10	10	9	10	5	13	12	12
1.498 <Nd< 1.499	6	8	7	9	10	10	14	10	14	14
1.499 <Nd< 1.500	6	0	5	3	7	5	8	3	2	4
1.500 <Nd< 1.501	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0
1.501 <Nd< 1.502	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.502 <Nd< 1.503	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.503 <Nd< 1.504	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.504 <Nd< 1.505	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.505 <Nd< 1.506	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.506 <Nd< 1.507	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.507 <Nd< 1.508	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.508 <Nd< 1.509	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0
1.509 <Nd< 1.510	2	2	0	1	0	0	0	0	0	0
1.510 <Nd< 1.511	5	3	2	2	0	0	0	0	0	0
1.511 <Nd< 1.512	0	3	1	2	0	0	0	0	0	0
1.512 <Nd< 1.513	0	0	1	1	1	0	0	0	0	0
1.513 <Nd< 1.514	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
1.514 <Nd< 1.515	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

表 16 中間東井坪遺跡土壤中火山灰抽出分析

No.	試料名 (Sample Name)	屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大				
1	正箱遺跡 B区北壁 ①	1.496	1.500	1.4978	24	$1.497 \leq n < 1.499$ *60%	H, C型
		1.509	1.511	1.5101	6		
2	正箱遺跡 B区北壁 ②	1.496	1.499	1.4979	22	$1.497 \leq n < 1.499$ *50%	H, C型
		1.510	1.512	1.5109	8		
3	正箱遺跡 B区北壁 ③	1.496	1.499	1.4977	25	$1.497 \leq n < 1.499$ *70%	H, C型
		1.509	1.511	1.5095	5		
4	正箱遺跡 B区北壁 ④	1.496	1.500	1.4985	24	$1.498 \leq n < 1.500$ *60%	H, C型
		1.508	1.510	1.5096	6		
5	正箱遺跡 B区北壁 ⑤	1.497	1.500	1.4980	29	$1.497 \leq n < 1.499$ *70%	H, C型
		—	—	1.5091	1		
6	正箱遺跡 B区北壁 ⑥	1.497	1.499	1.4982	29	$1.497 \leq n < 1.499$ *70%	H, C型
		—	—	1.5096	1		
	以下余白						

*全測定数に対するmode範囲内にある火山ガラスの含有を示す。

※ H : 扁平型
C : 中間型
T : 多孔質型
(吉川, 1976)
It : 不規則型

表 17 火山ガラスの屈折率結果一覧表

No.	試料名 (Sample Name)	屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大				
1	正箱遺跡 C-2区 ①	1.497	1.499	1.4977	20	1.496 ≤ n < 1.499 *60%	H, C型
		1.509	1.511	1.5098	10		
2	正箱遺跡 C-2区 ②	1.497	1.499	1.4981	16	1.497 ≤ n < 1.499 *40%	H, C型
		1.509	1.513	1.5104	14		
3	正箱遺跡 C-2区 ③	1.496	1.500	1.4978	23	1.496 ≤ n < 1.499 *60%	H, C型
		1.509	1.511	1.5103	7		
4	正箱遺跡 C-2区 ④	1.497	1.500	1.4983	23	1.497 ≤ n < 1.499 *60%	H, C型
		1.509	1.513	1.5104	7		
	以下余白						

*全測定数に対するmode範囲内にある火山ガラスの含有を示す。

※ H : 扁平型
C : 中間型
T : 多孔質型
(吉川, 1976)
It : 不規則型

表 18 火山ガラスの屈折率結果一覧表

No.	試料名 (Sample Name)	屈折率範囲 (range)		屈折率 平均値 (mean)	測定 個体数 (個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大				
1	中間東井坪遺跡 I	1.496	1.500	1.4982	21	1.497 ≤ n < 1.500 *70%	H, C型
		—	—	1.5017	1		
		1.508	1.511	1.5098	8		
2	中間東井坪遺跡 II	1.496	1.499	1.4978	21	1.497 ≤ n < 1.499 *60%	H, C型
		1.508	1.512	1.5101	9		
3	中間東井坪遺跡 III	1.496	1.500	1.4980	26	1.497 ≤ n < 1.499 *60%	H, C型
		1.510	1.512	1.5110	4		
4	中間東井坪遺跡 IV	1.497	1.499	1.4980	24	1.497 ≤ n < 1.499 *60%	H, C型
		1.510	1.512	1.5110	6		
5	中間東井坪遺跡 V	1.496	1.500	1.4983	29	1.497 ≤ n < 1.499 *60%	H, C型
		—	—	1.5122	1		
6	中間東井坪遺跡 VI	1.497	1.500	1.4979	30	1.497 ≤ n < 1.499 *70%	H, C型
7	中間東井坪遺跡 VII	1.497	1.500	1.4985	30	1.498 ≤ n < 1.500 *70%	H, C型
8	中間東井坪遺跡 VIII	1.496	1.500	1.4979	30	1.497 ≤ n < 1.499 *80%	H, C型
9	中間東井坪遺跡 IX	1.497	1.500	1.4980	30	1.497 ≤ n < 1.499 *90%	H, C型
10	中間東井坪遺跡 X	1.497	1.500	1.4982	30	1.497 ≤ n < 1.499 *80%	H, C型

*全測定数に対するmode範囲内にある火山ガラスの含有を示す。

※ H : 扁平型
C : 中間型
T : 多孔質型
(吉川, 1976)
It : 不規則型

表 19 火山ガラスの屈折率結果一覧表

顯微鏡写真集

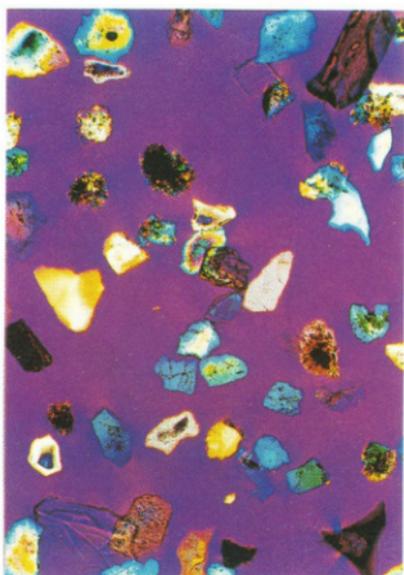


OPEN NICOL



正箱遺跡B地区北壁①

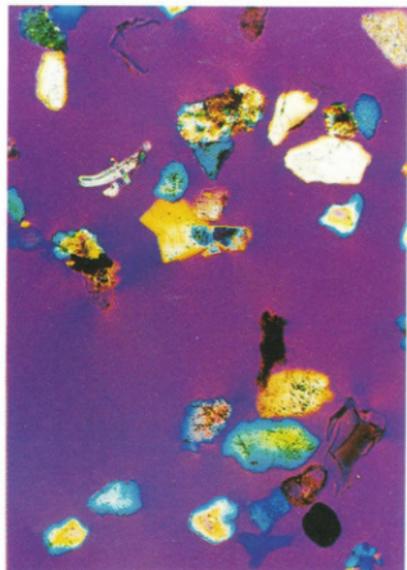
CROSS NICOL+銳敏檢板



(同 左)



正箱遺跡B地区北壁②



(同 左)

图 97